

# 山家地区遺跡

九州電力株式会社200KV西福岡線  
新設に伴う埋蔵文化財発掘調査

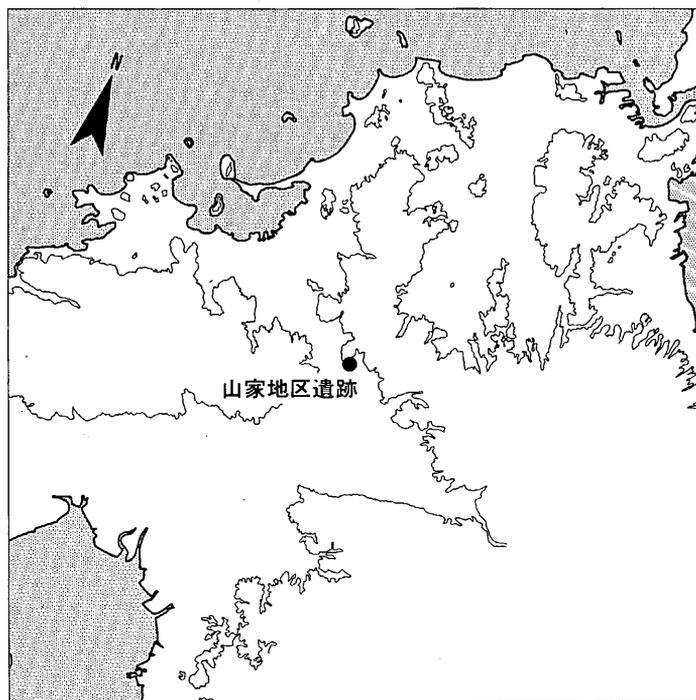
筑紫野市文化財調査報告書

第 19 集

1987

筑紫野市教育委員会

やまえ  
山家地区遺跡



## 序

本市は大古から交通の要衝であり、数多くの遺跡が多い地域です。最近福岡市のベッドタウンとして急速に都市化していく反面、在来からの農業が近代化し、農地基盤整備事業なども進行していくという両面の素面をもち、これらの開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査件数も年々増加しております。山家地区遺跡は筑紫野市東部にあり、江戸時代には長崎街道の宿場として栄えた所です。今回の発掘調査では古墳時代や弥生時代のすまいの跡や墓などが発見され、さらに縄文時代の土器も出土し、古くから永々と人々が生活を営んできた証を垣間見ることができました。今後はこれらの発掘調査の成果を市民学習の場で役立てますと伴に、まだまだ数多く埋もれている文化財を子々孫々へ伝えるべく一層の努力をする所存でございます。なを、発掘調査にあたりまして九州電力株式会社の多大な御理解、御協力をいただき、衷心よりお礼申し上げます。

昭和62年3月31日

筑紫野市教育委員会

教育長 松田 康男

## 例 言

- 1, 本報告書は九州電力株式会社の委託を受け、昭和60年度から61年度にかけて筑紫野市教育委員会が実施した山家地区遺跡の発掘調査報告書である。
- 2, 発掘調査は九州電力(株)220KV(一部550KV設計)西福岡線No.17鉄塔(筑紫野市大字山家4176-1、4176-6)、No.18鉄塔(同大字山家4191-2、1992-28、4192-22、4192-27)建設予定地を行った。
- 3, 調査地点番号は山家地区遺跡内の通算番号を当てる。
- 4, 遺構実測は森山栄一が行った。
- 5, 遺物実測は土器を奥村俊久、山野洋一、鶴味加代子が、石器を渡辺和子が行った。
- 6, 写真撮影は遺構写真を森山栄一が、遺物写真を山野洋一が撮影した。
- 7, 製図は鶴味が行った。
- 8, 本書の執筆はIII-7を渡辺が、その他を奥村が行ない、編集は奥村が行った。

# 目 次

	頁
I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	1
III 第3地点の調査	4
1 調査概要	4
2 住居跡の調査	6
3 甕棺墓	14
4 木棺墓	37
5 土壌	37
6 縄文式土器	45
7 石器	45
IV 第4地点の調査	49
1 遺構	49
2 出土土器	50
V まとめ	51

## 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布地図	2	第23図	17号・22号・23号甕棺墓実測図	25
第2図	調査区周辺地形図	3	第24図	25号・24号甕棺墓実測図	26
第3図	第3地点遺構配置図	4	第25図	9号・10号甕棺実測図	27
第4図	第3地点主要遺構配置図	5	第26図	11号・12号甕棺実測図	28
第5図	1号住居跡実測図	6	第27図	13号・14号甕棺実測図	29
第6図	2号住居跡実測図	7	第28図	15号・16号甕棺実測図	30
第7図	4号住居跡実測図	8	第29図	24号・25号甕棺実測図	31
第8図	3号住居跡実測図	折り込み	第30図	1号・18号甕棺実測図	32
第9図	5号住居跡実測図	折り込み	第31図	2号・3号・4号甕棺実測図	33
第10図	6号住居跡実測図	9	第32図	5号・6号・7号甕棺実測図	34
第11図	7号住居跡実測図	9	第33図	17号・19号・20号甕棺実測図	35
第12図	8号住居跡実測図	10	第34図	21号・22号甕棺実測図	36
第13図	住居跡出土遺物実測図	12	第35図	木棺墓実測図	38
第14図	住居跡出土遺物実測図	13	第36図	土壌実測図	39
第15図	1～4号甕棺墓実測図	15	第37図	土壌実測図	40
第16図	26号・5号・18号甕棺墓実測図	16	第38図	土壌出土土器実測図	43
第17図	20号・6号・19号・21号甕棺墓実測図	18	第39図	土壌出土土器実測図	44
第18図	7号・8号甕棺墓実測図	19	第40図	土壌出土土器実測図	45
第19図	9号・10号甕棺墓実測図	21	第41図	第3地点出土の縄文土器	46
第20図	11号・16号甕棺墓実測図	22	第42図	第3地点出土の石器	48
第21図	15号・12号甕棺墓実測図	23	第43図	第4地点遺構配置図	49
第22図	14号・13号甕棺墓実測図	24	第44図	第4地点出土土器実測図	50

## I 調査に至る経過

昭和59年5月、九州電力株式会社福岡支店より、筑紫野市教育委員会に220kv(一部500kv設計)西福岡線新設に伴う埋蔵文化財調査の依頼があった。これを受けて市教育委員会では、市内の全線に渡り鉄塔建設予定地の踏査を行い、埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高い山家地区3ヶ所、筑紫地区4ヶ所を選出した。さらにこの7ヶ所について試掘調査を実施する事となり、前者については昭和59年11月に試掘調査委託契約を締結し、同月19日から21日にかけて試掘調査を実施した。その結果、2ヶ所に埋蔵文化財が包蔵されている事が確認された。試掘結果を基に協議を重ねた結果、筑紫野市教育委員会が九州電力株式会社から前述2ヶ所の埋蔵文化財発掘調査を受託する事で合意し、昭和61年1月に発掘調査委託契約を締結し、その後ただちに調査を開始した。

調査組織は下記のとおりである。

総括	筑紫野市教育委員会	教育長	松田康男
庶務	筑紫野市教育委員会社会教育課	課長	山村茂
	筑紫野市教育委員会社会教育課文化財係	主事	奥村俊久
調査	筑紫野市教育委員会社会教育課文化財係	嘱託	森山栄一 (現在 文化財係 技師)

## II 位置と環境

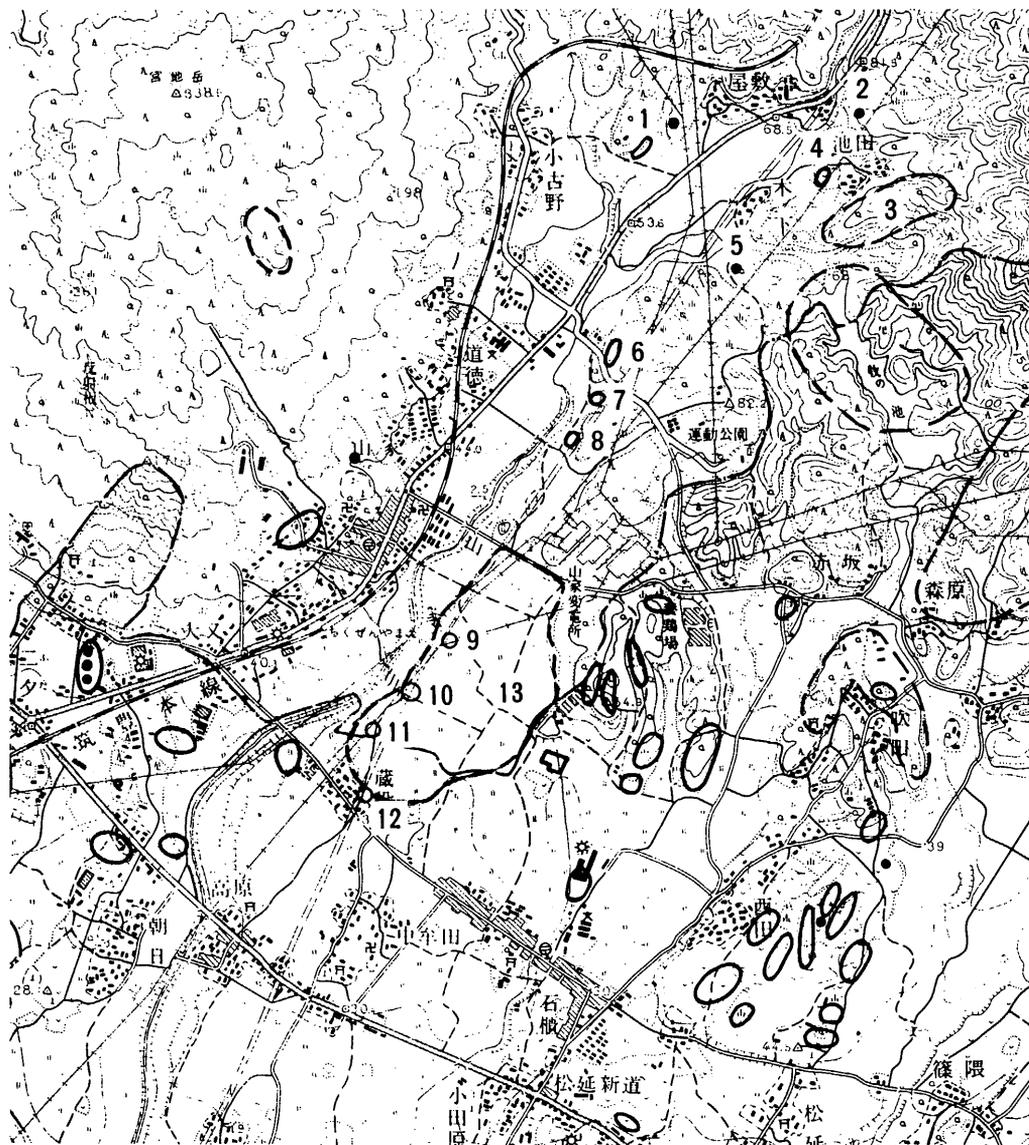
筑紫野市は、福岡市と久留米市のほぼ中央に位置し、筑後国、肥前国と境を接す。西に背振山塊、北東に三郡山塊が迫り、その間に狭長な筑紫野の平野部があり、古くから交通の要所であった。市内の北西には鷺田川があり、御笠川と合流して博多湾に注ぐ。東には筑紫平野北部を潤し、筑後川と合流して有明海に注ぐ宝満川がある。宝満川やその支流ぞいには数多くの遺跡が所在する。宝満川上流域から宮地岳(337m)を狭み東側にその支流である山家川が流れる。

山家川は山家冷水道ぞいに下り、筑前六宿の一つ山家宿の東側を肥沃な平野を潤しつつ流れる。この山家川のさらに東岸に広がる低台地上に山家地区遺跡が所在する。この地域は筑紫野市と夜須町にまたがり、国道200号線バイパス建設に伴う発掘調査<sup>註1</sup>で大島遺跡、八ヶ坪遺跡として2ヶ所が発掘調査されている。しかし、その後の圃場整備に伴う発掘調査<sup>註2</sup>や本報告の調査のように、この台地一帯に遺跡が広がると考えられ、これらの遺跡を現在の段階で個々の遺跡に分ける事は将来矛盾が生じるおそれがあるため、この地域全体を山家地区遺跡として報告する。

註

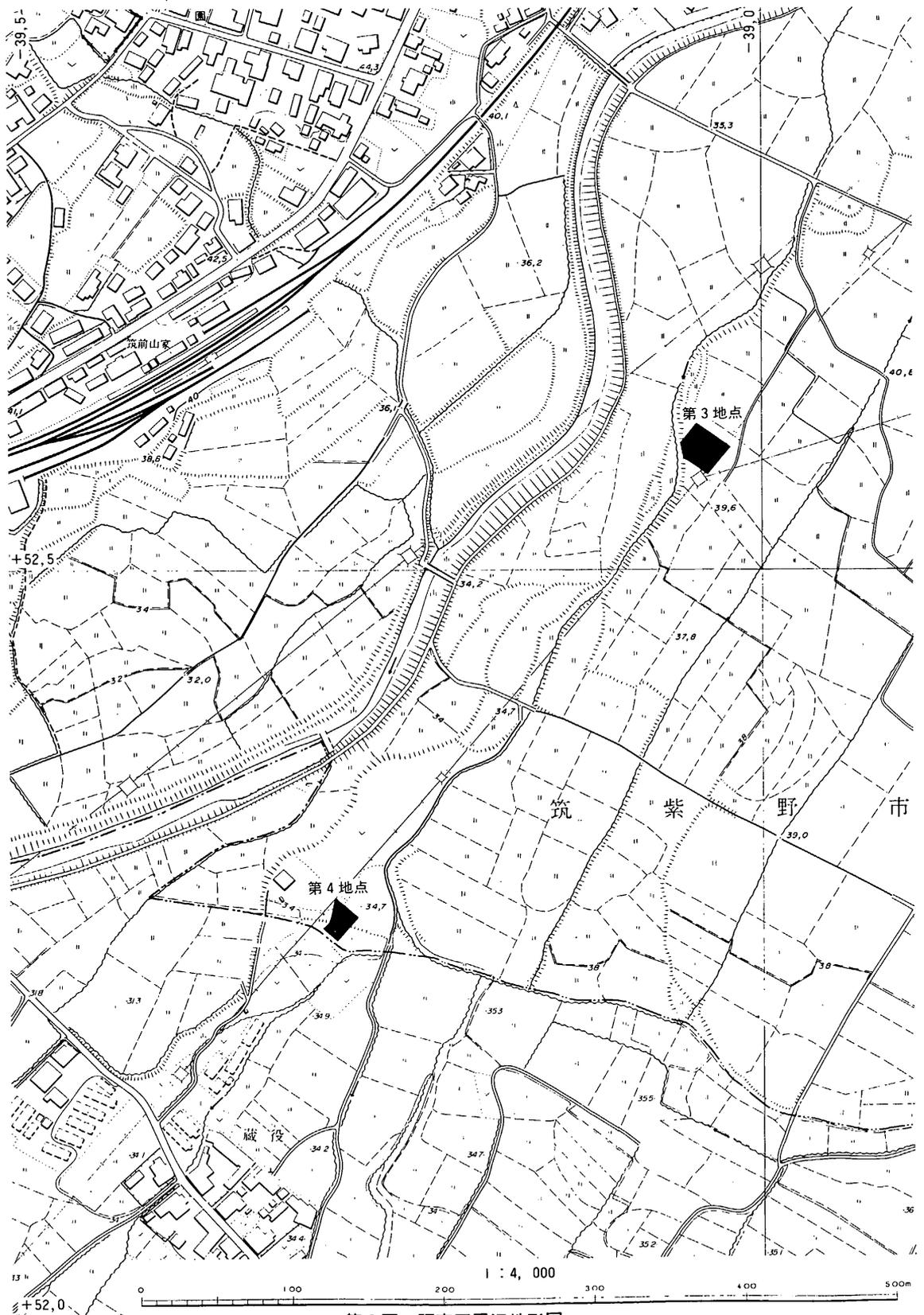
註1 「冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会 1982

註2 昭和60年度から筑紫野市分は当教育委員会が実施している。



第1図 周辺遺跡分布地図 (縮尺1/25,000)

1 丸隈遺跡 2 池田8号古墳 3 池田1～7号古墳 4 池田遺跡 5 池田9号古墳 6 浮殿A遺跡 7 浮殿B遺跡 8 浮殿D遺跡 9 山家地区遺跡第3地点 10 大島遺跡 11 山家地区遺跡第4地点 12 八ヶ坪遺跡 13 山家地区遺跡

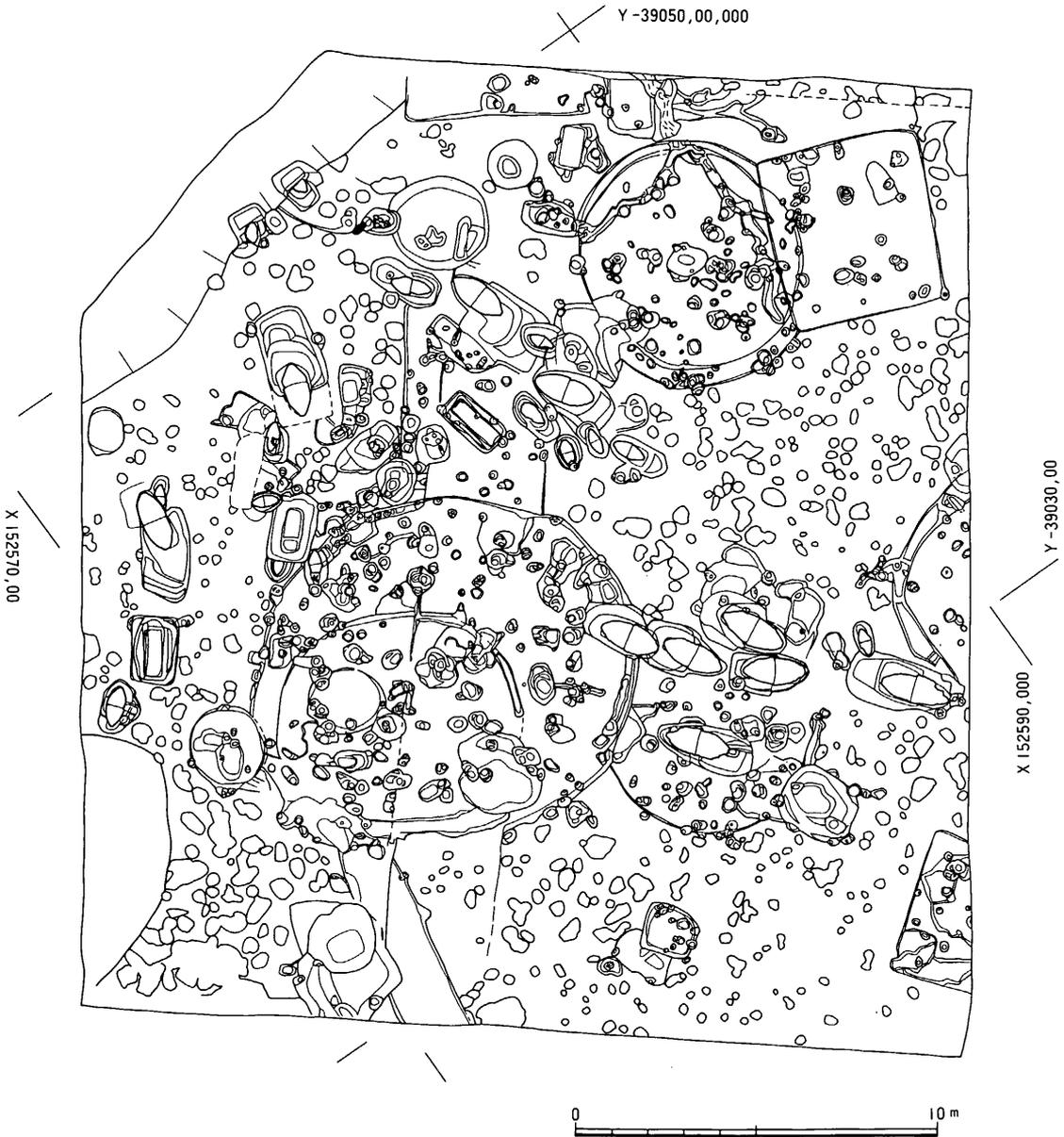


第2図 調査区周辺地形図

### III 第3地点の調査

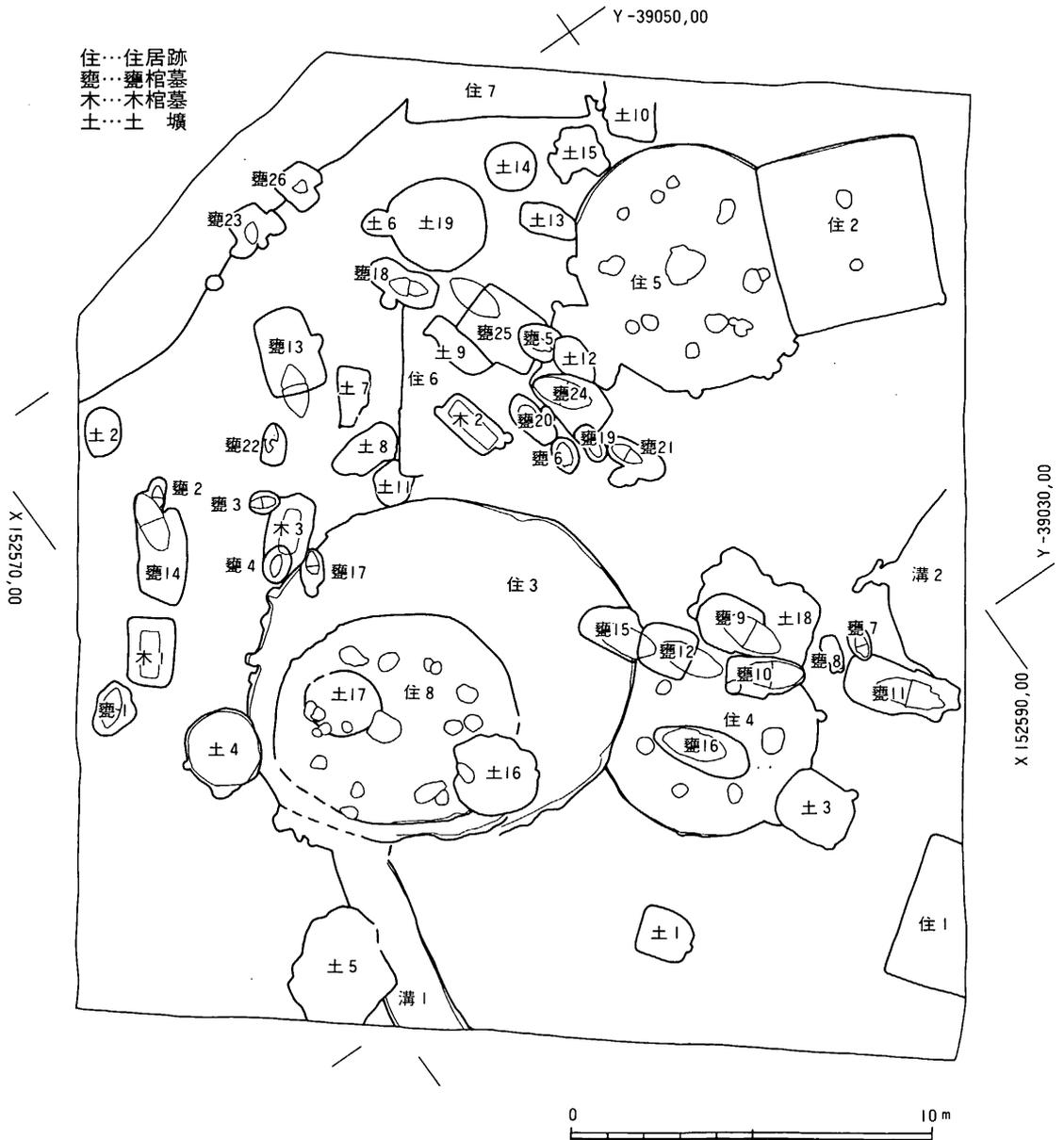
#### 1 調査概要

調査面積は640㎡で、竪穴式住居跡8軒、甕棺墓26基、木棺墓3基、土壇19基、溝2条、その



第3図 第3地点遺構配置図(縮尺1/200)

他数多くのピットを検出した。住居跡は円形プランを呈すもの4軒、方形プランを呈すもの4軒が検出され、このうち円形プランを呈す3号住居跡は他のものに比べ特に大きな規模である。甕棺は成人用甕棺墓10基、小児用甕棺墓14基、およびその中間の大きさをもつ甕棺墓2基を検出した。全体的に残りはあまり良好でない。土壌のなかには袋状堅穴を呈すものがあり、貯蔵穴を含む。また、遺構の包土などから縄文式土器等が出土した。



第4図 第3地点主要遺構配置図(縮尺1/200)

## 2 住居跡の調査

### 1号住居跡 (第5図 図版2)

調査区外へ延びる方形プランの住居跡で、調査区内で検出された一边は4.1mを測る。壁高は4cmほどで、床面下はさらに掘削される。

### 2号住居跡 (第6図 図版2)

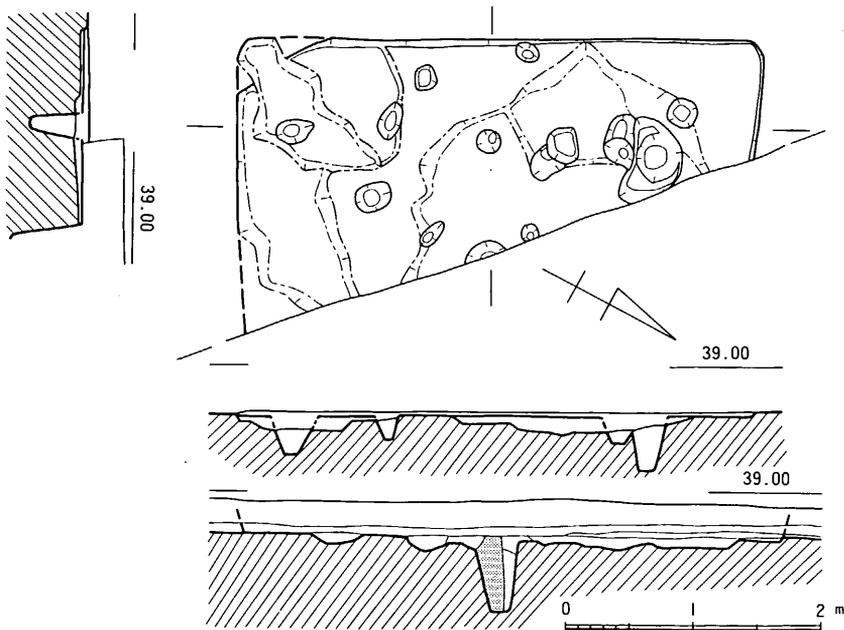
4.6×5mを測る方形プランの住居跡である。主柱穴は2本で、主軸をN-59°-Wにとる。主柱穴間は151cmで、主軸をややずれて炉が検出された。削平が著しいため明瞭でないが、西壁にはカマドが設けられていると考えられ、粘土の基部が残り、付近に焼土が広がる。また、カマドの北側には第13図1の椀が、炉の東側には2・5の椀が出土した。

### 3号住居跡 (第8図 図版2)

11.8~9.54mを測るやや隋円形気味のプランを呈す。中央には1.1~1.2m、深さ54cmのピットがあり、その両脇にN-67°-Eに主軸をとり2本の主柱穴をもつ。主柱穴間の距離は1.8m、深さは50cm余りである。中心から2.9~3.95mの距離で柱穴がめぐる。柱穴は近接している部分もあり、建て変えがあった可能性がある。

### 4号住居跡 (第7図 図版3)

南側を3号住居跡に切られるほかに攪乱が多く明瞭さを欠くが、径約6.2mの円形プランを呈

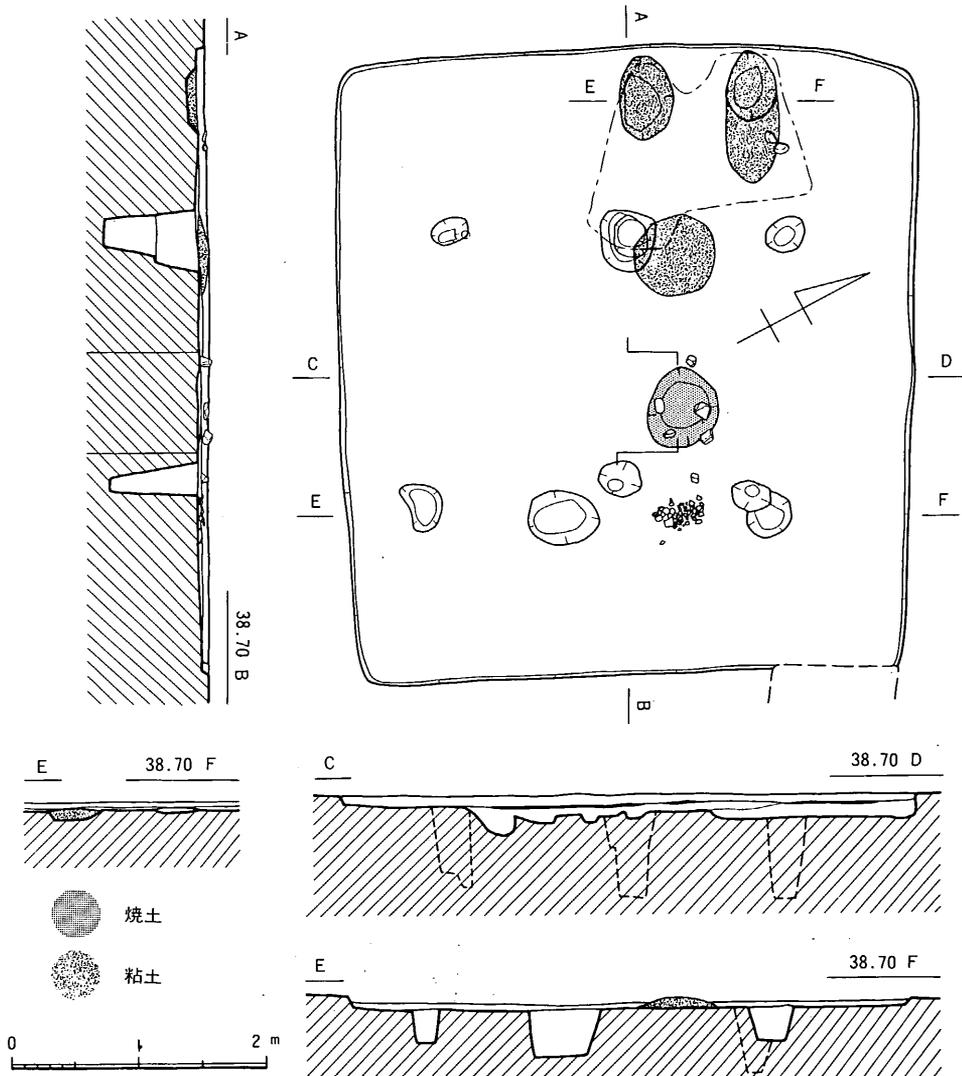


第5図 1号住居跡実測図 (縮尺1/60)

す住居跡である。壁高は最大8cmしか遺存しない。中心から1.5~2mの距離で六角形状に深さ55~90cmの柱穴がめぐる。柱穴間は144~195cmを測る。

5号住居跡 (第9図 図版3)

北側を2号住居跡に切られる円形プランの住居跡である。壁体・柱穴ともに2重に検出され、拡張が行われたものである。拡張前は径5.8~6.3mほどの規模で、深さ約20cmを測る。中心には114×80cmの隋円形プランを呈し、深さ50cmを測るピットがある。その両脇にN-49°-Eに主軸をとり2本の主柱穴を配す。主柱穴間の距離は125cmを測る。さらに中心から1.65~2.05mの距

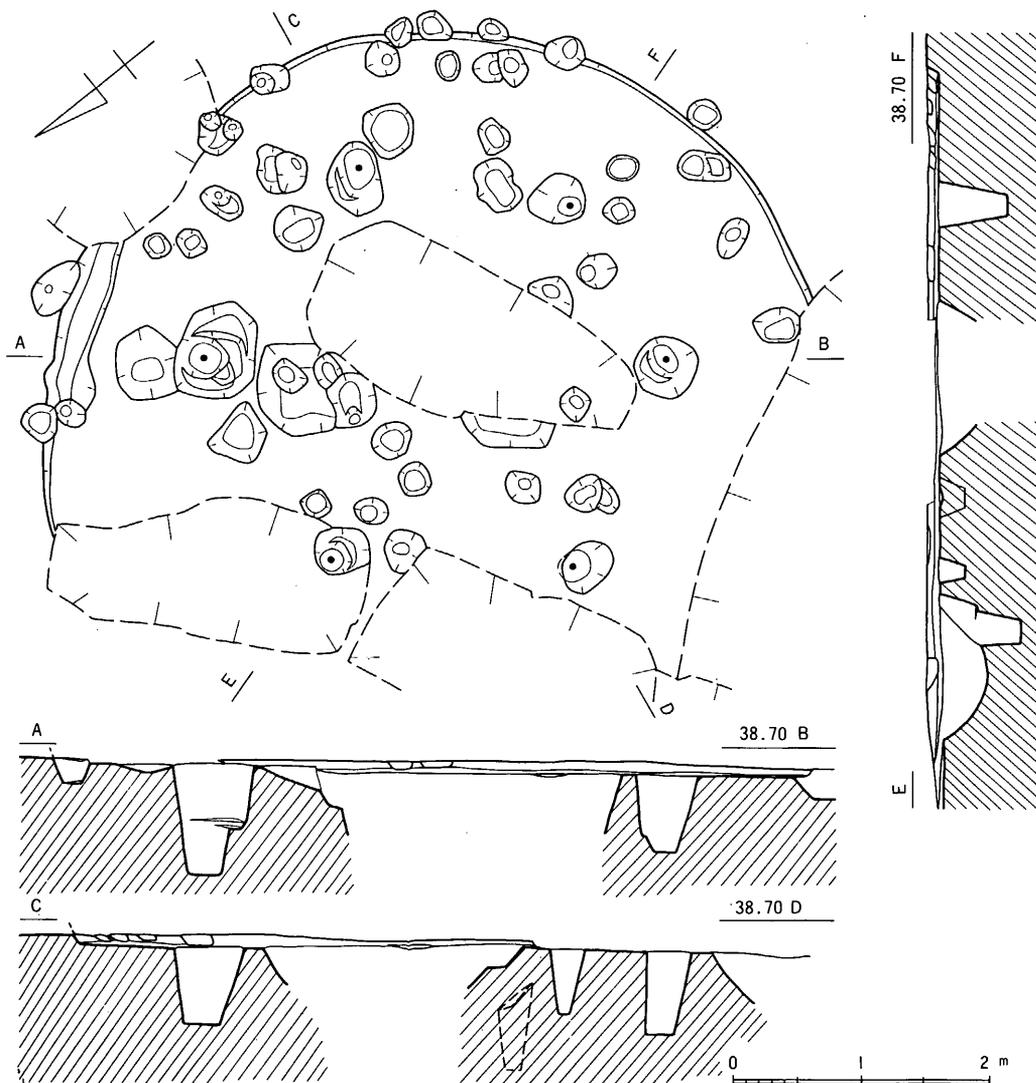


第6図 2号住居跡実測図 (縮尺1/60)

距離で六角形に深さ46~76cmの柱穴がめぐり、柱穴間の距離は187~213cmを測る。拡張後の規模は部分的に消失するものの径6.7~7.2mを測り、支柱穴は同一、または拡張前の支柱穴の外側を切る柱穴であろう。この場合の支柱間の距離は189cmを測る。六角形状に回っていた柱穴は2本増して八角形状を呈し、中心からの距離205~238cm、深さ37~72cm、柱穴間の距離155~213cmを測る。

6号住居跡 (第10図)

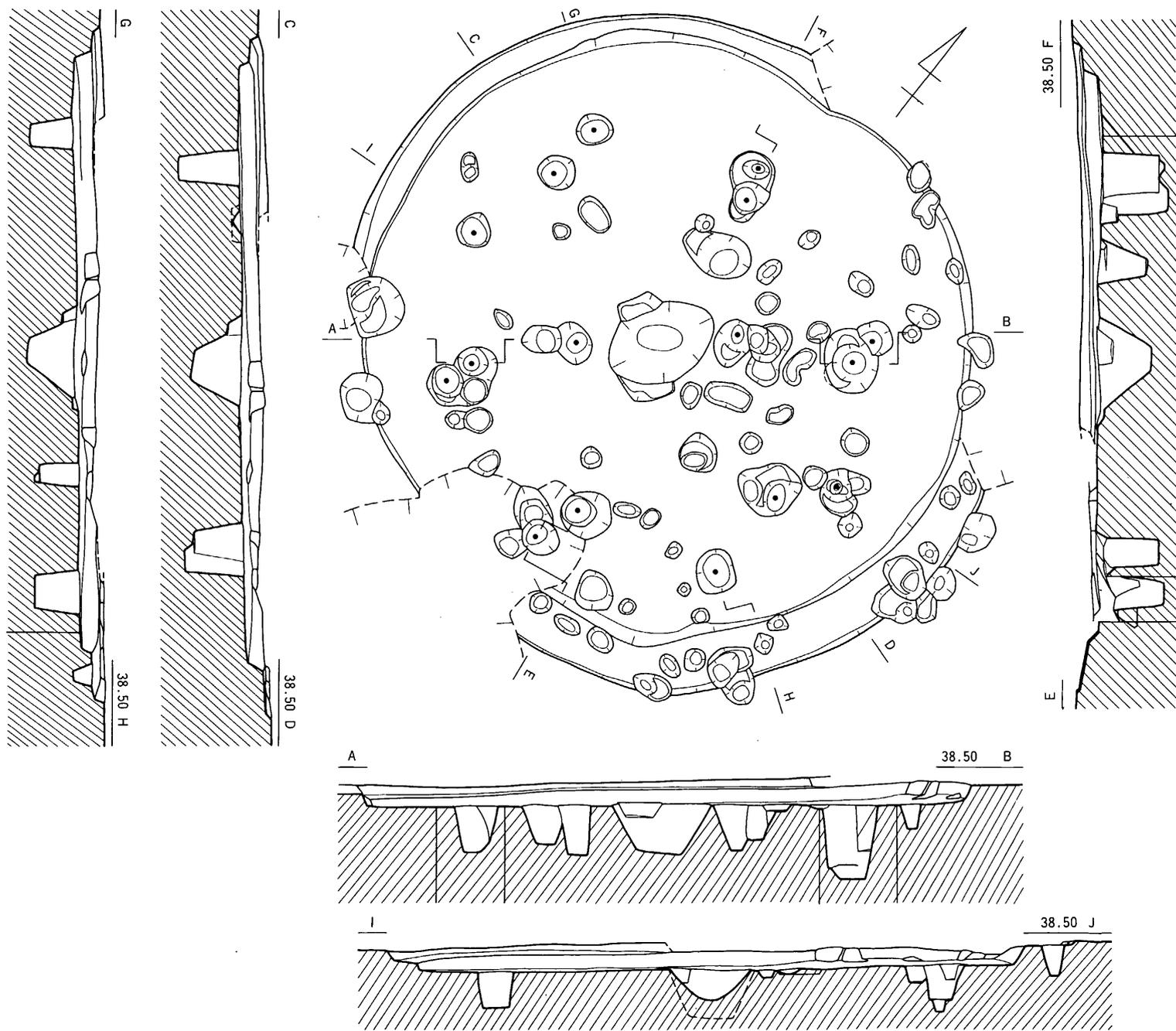
3号住居跡の北西で検出された。方形プランを呈し、壁高は4cmほどである。中央部は試掘



第7図 4号住居跡実測図 (縮尺1/60)



第8图 3号住居跡実測図 (縮尺1/60)



第9图 5号住居跡実測图 (縮尺1/60)

0 1 2 m

の際に消失した。確認された一辺は4.83mを測る。

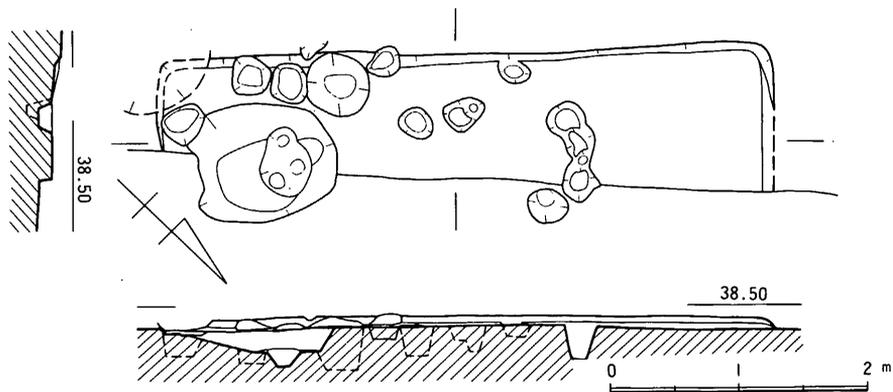
### 7号住居跡 (第11図 図版3)

調査区北西部で検出した。段落ちする調査区外へ延びる方形プランの住居跡である。確認された一辺は5.09m、壁高10~15cmを測る。

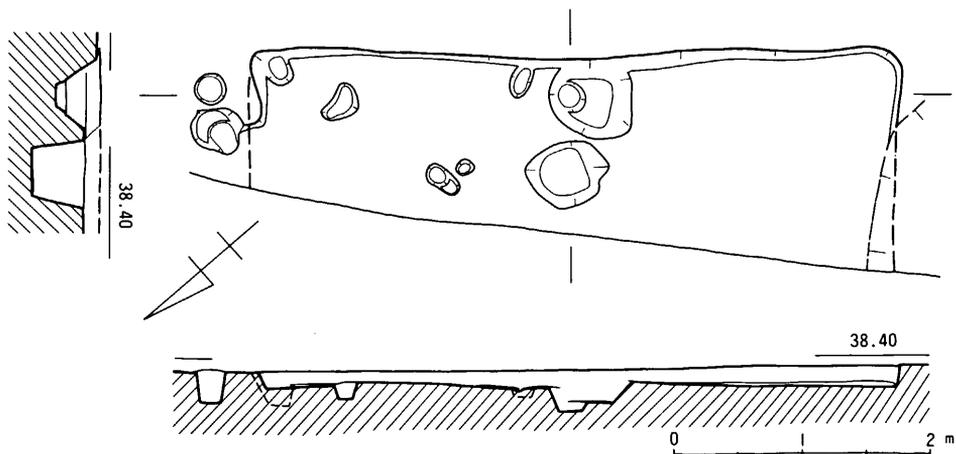
### 8号住居跡 (第12図)

3号住居跡の調査中に検出された住居跡である。壁体の残りは悪く $\frac{3}{4}$ 近くを失うが、径7m程度の円形プランを呈すと思われる。中央には径98~72cmの不整円形のピットがあり、その両脇にN-44°-Eに主軸をとる2本の支柱穴がある。支柱穴間の距離は164cmを測る。さらに中心から168~258cmの距離で深さ18~67cmの柱穴がめぐる。柱穴配置の形状は復原しえないが、2回以上の建て変えがあったものと推測される。

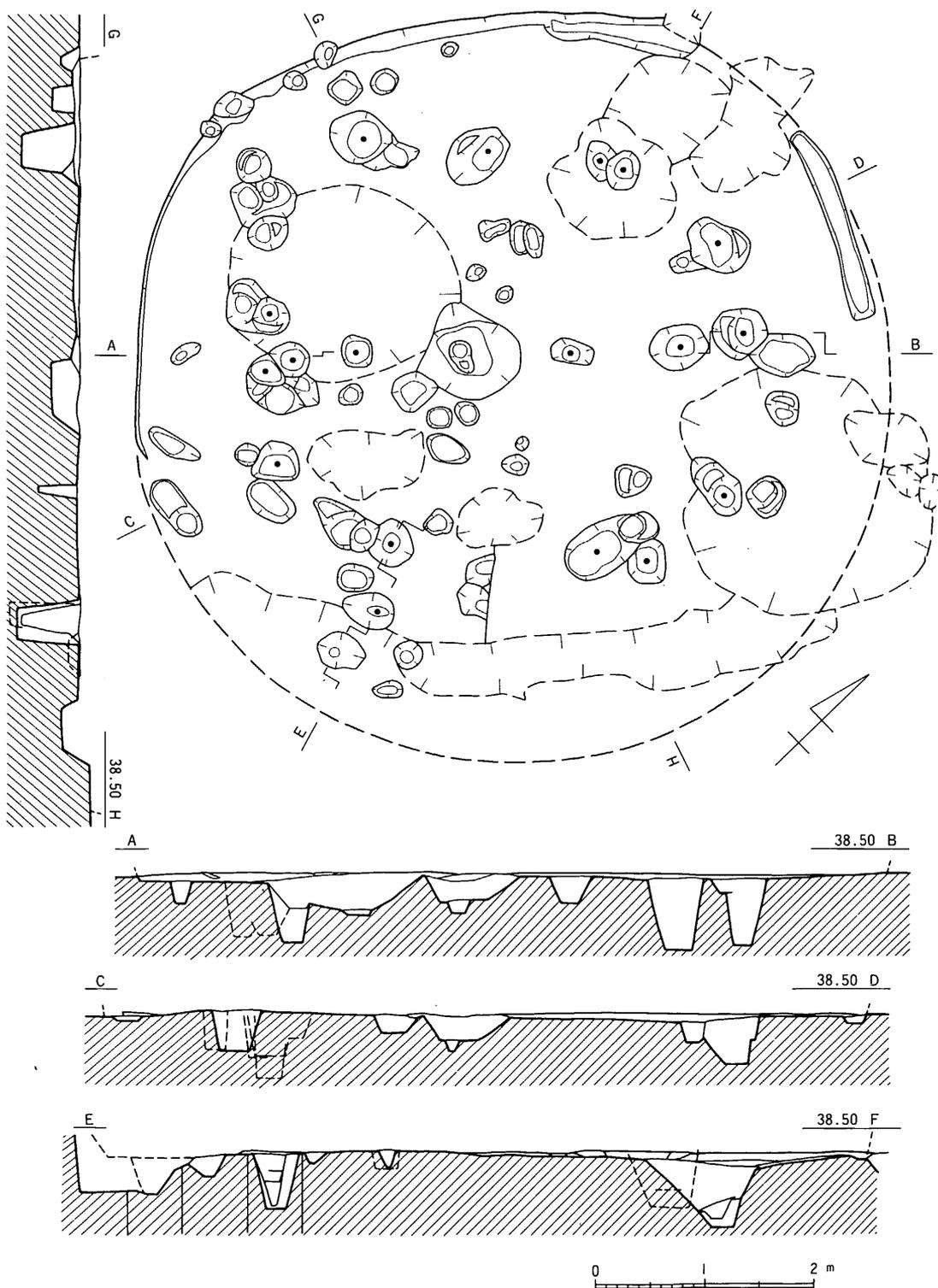
### 遺物 (第13・14図 図版22)



第10図 6号住居跡実測図 (縮尺1/60)



第11図 7号住居跡実測図 (縮尺1/60)



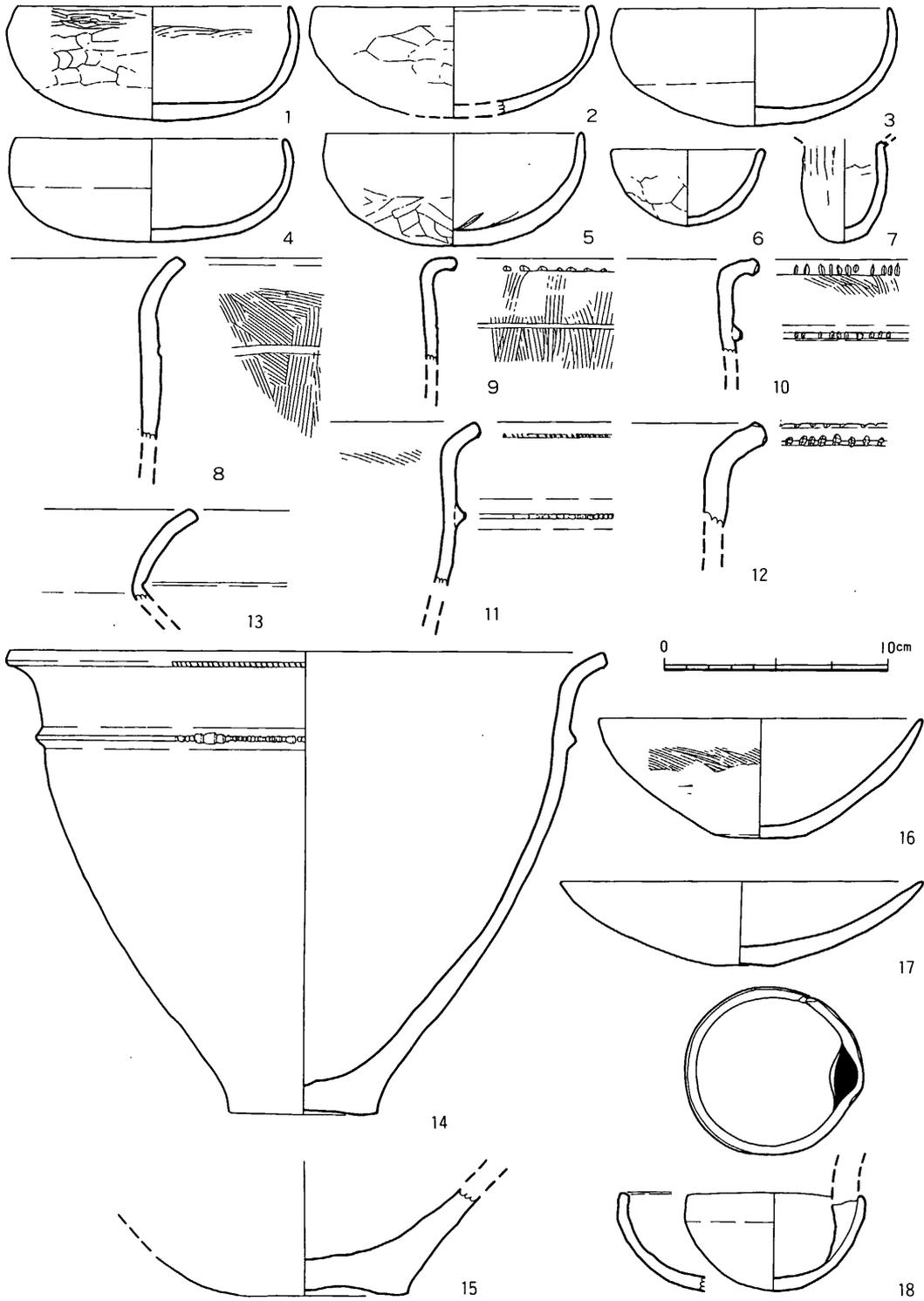
第12图 8号住居跡実測图 (縮尺1/60)

## 2号住居跡出土の土器

1～5は椀である。口縁部は1～4がやや内弯し、5は直立する。また、1・4の底部は座りの良い丸底を呈すが、2・3・5は比較的丸味が強い。口径／器高はそれぞれ1が12.1cm／5.4cm、2が12.2cm／5.2cm、3が12.2cm／5.4cm、4が12～12.6cm／4.7cm、5が12cm／5.2cmを測る。1・2は胴部から底部までヘラケズリされるが、胴部のケズリは横方向の丁寧なものである。口縁部から胴部内面にかけてはミガキが施され、それ以下は丁寧にナデられる。3～5は胴部中位ほどからヘラケズリを施されるが、3はやや低い位置から削られる。また、胴部上半から内面にかけては磨滅して不明瞭である。4はヘラナデした全体に丁寧な作りである。5は口縁部から内面にかけてナデられるが、内面底部付近にヘラの当った痕が残され、ナデ以前にケズリが施されたと思われる。色調はいずれも淡赤褐色～赤褐色を呈し、胎土は微砂粒を含む良質なものである。焼成は3がややあまいが、外は良好である。6は小形の椀で、口径7cm、器高3.5cmを測る。全体的にナデで仕上げられるが、外面には指頭痕が多く残る。色調は黄褐色、胎土は0.5～1mm大の砂粒をやや含み、焼成は良好である。7はミニチュア製品で、口縁部を欠失する。外面は縦方向にケズリが施され、内面はヨコナデされる。色調は淡赤褐色、胎土は微砂粒を含み、焼成はほぼ良好である。

## 3号住居跡出土の土器・土製品

8～12は甕の口縁部片である。いずれも如意形口縁とし、9・10は強く外反する。8は口縁下に一条の沈線がめぐる。口縁部から内面にかけてヨコナデされ、外面は刷毛目が施される。色調は淡褐色、胎土は1mm大の砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。9は口唇部下端にヘラによる刻目が施され、口縁下に一条の沈線がめぐる。内面は磨滅して不明瞭であるが、外面には刷毛目が施される。色調は淡褐色を呈し、胎土は1mm大の砂粒をやや多く含み、焼成はやや不良である。10は口縁部と口縁下の凸帯にヘラによる刻目が施される。凸帯下に貼付位置の目印と思われる沈線が認められる。内面は磨滅して不明瞭であるが、口縁部外面は刷毛目を施した後ヨコナデされる。11も10と同様に口縁部と口縁下の凸帯に刻目が施される。口縁部の刻目は口唇下端に切れ込みを入れるように細かく施され、凸帯の刻目はヘラを差し込み、左側に抜く。内外面ともヨコナデされるが、内面口縁部下に刷毛目が僅かに認められる。色調は暗褐色を呈し、胎土には1mm大の砂粒をやや含み、焼成は良好である。12は大形甕の口縁部で、口唇部上端と下端に刷毛状工具による刻目を施す。口縁から外面にかけてヨコナデされ、内面は短かい単位でヘラナデする。また、外面には僅かにススの付着が認められる。色調は暗褐色、胎土には1mm大の砂粒がやや多く、焼成はやや不良である。13は壺の口縁部で、内傾して延びた頸部と口縁部との境は「く」字状を呈す。口縁部は肥厚し、やや外反して延びる。全体に磨滅して調整は不明である。色調は外面黄褐色、内面淡黒灰色を呈し、胎土には1mm大の砂粒をやや含み、焼成はやや不良である。19～24はいわゆるメンコと呼ばれるものである。いずれも甕



第13图 住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3)

の胴部を再利用したもので、19は底部近く、20は口縁部近くのものである。25は土製の紡錘車で、径3.7~3.8cm、厚み1.5cmを測る。中央に径6~7mmの穴を開る。

#### 4号住居跡出土の土器

14は口径27cm、器高21.1cmを測る甕である。口縁部は如意形を呈し、口縁下に凸帯をめぐらす。口縁部の作りは11と類似しており、口唇部下端に細かい切れ込みを入れるような刻みを施し、凸帯にはヘラを差し込んだ後、左側へ抜く刻目を連続的に施す。口縁部はヨコナデされ、胴部内面はナデられる。胴部外面は刷毛目を施した後、これを消すように板状工具でナデられる。胴部中位には赤変がみられ、全体にススが附着する。色調は黄褐色、胎土には1~2mm大の砂粒を多目に含み、焼成は良好である。15は大形甕の底部で、底径9cmを測る。全体的に磨滅し、内面は器面の剝落が著しい。色調は灰白色、胎土には1~2mm大の砂粒を多く含み、焼成はあまい。

#### 5号住居跡出土の土器

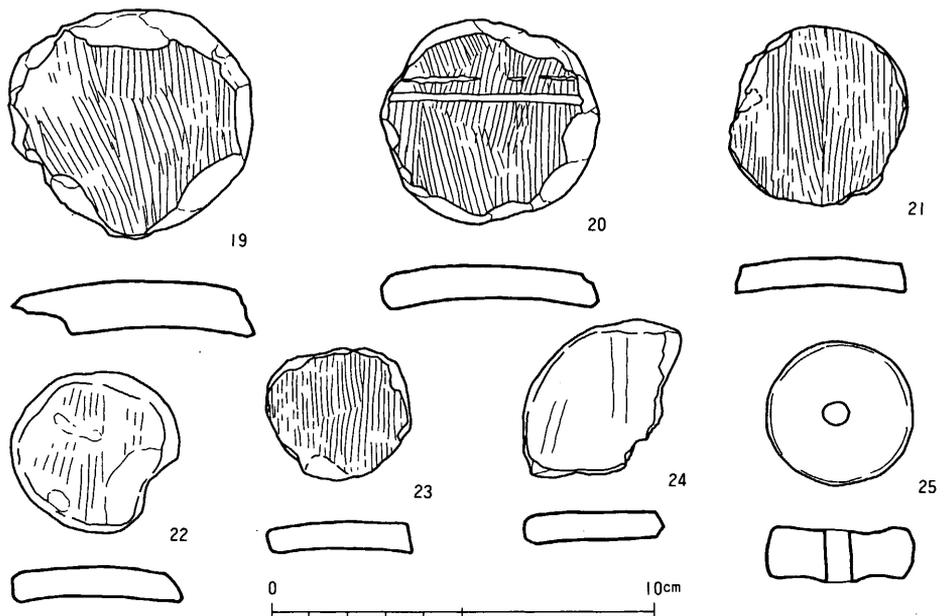
弥生式土器の小片が若干出土した。

#### 6号住居跡出土の土器

弥生式土器が僅かに出土した。

#### 7号住居跡出土の土器

16・17は椀である。16は口径14.4cm、器高5.6cmを測る。底部はレンズ状に近い平底を呈す。外面は刷毛目を施した後、体部下半をヘラケズリする。内面体部にも刷毛目を施した後、口縁



第14図 住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/2)

部から体部上半にかけてヨコナデする。色調は黄褐色、胎土は1mm大の砂粒をやや含む。焼成はややあまい。17は口径16.2cm、器高4cmを測る。体部は大きく開き、径の小さい底部はやや上げ底気味である。内外面ともナデで仕上げられるが、内面底部に僅かな刷毛目が残る。色調は淡黄褐色、胎土には1mm大の砂粒をやや多く含む、焼成は良好である。18は柄杓で、柄の部分を欠失する。杓部は口径7.5~7.9cm、器高4.5cmを測る。口縁部はヨコナデされ、体部には横方向の刷毛目が施される。柄は杓部の内面から貼付され、この部分の外面にのみ縦方向の刷毛目が認められる。色調は淡赤褐色~灰白色を呈し、胎土には1mm大の砂粒をやや多く含む。焼成はややあまい。

### 3 甕棺墓

#### 1号甕棺墓（第15図 図版4）

調査区の東部、1号木棺墓の南隣で検出した。主軸をN-34°-Wにとる。ほぼ水平に埋地された接口式の中形甕棺墓である。

#### 2号甕棺墓（第15図 図版4）

14号甕棺墓（成人棺）のほぼ主軸線上に隣接して検出された。主軸をN-52°-Eにとり、ほぼ水平に埋置された小児用甕棺墓である。

#### 3号甕棺墓（第15図 図版4）

3号木棺墓の北西隅上で検出された。主軸をN-34°-Eにとり、ほぼ水平に埋置された接口式の小児用甕棺墓である。

#### 4号甕棺墓（第15図 図版4）

3号木棺墓の東側墓壙を切って検出された。主軸をN-42°-Eにとり、下甕が低く埋置角は17°を測る。接口式の小児用甕棺である。

#### 5号甕棺墓（第16図）

25号甕棺墓（成人棺）の東側墓壙を切って埋置されるものである。主軸をN-73°-Eにとり、下甕をやや低く埋置する接口式の小児用甕棺墓である。

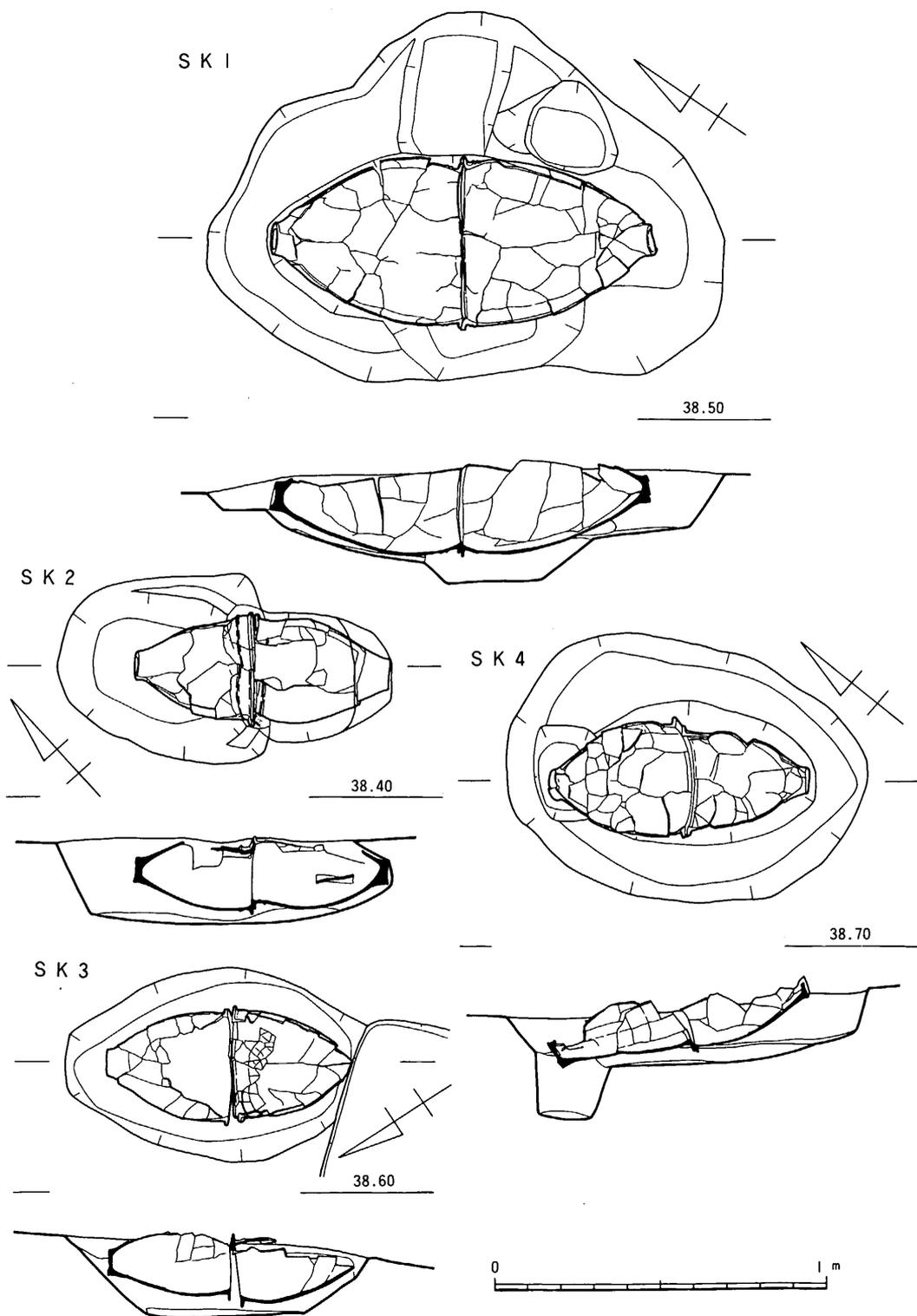
#### 6号甕棺墓（第17図 図版5）

24号甕棺墓（成人棺）の南隣りで検出したもので、西側をピットに切られる。主軸をN-64°-Wにとり、ほぼ水平に埋置される接口式の小児用甕棺墓である。

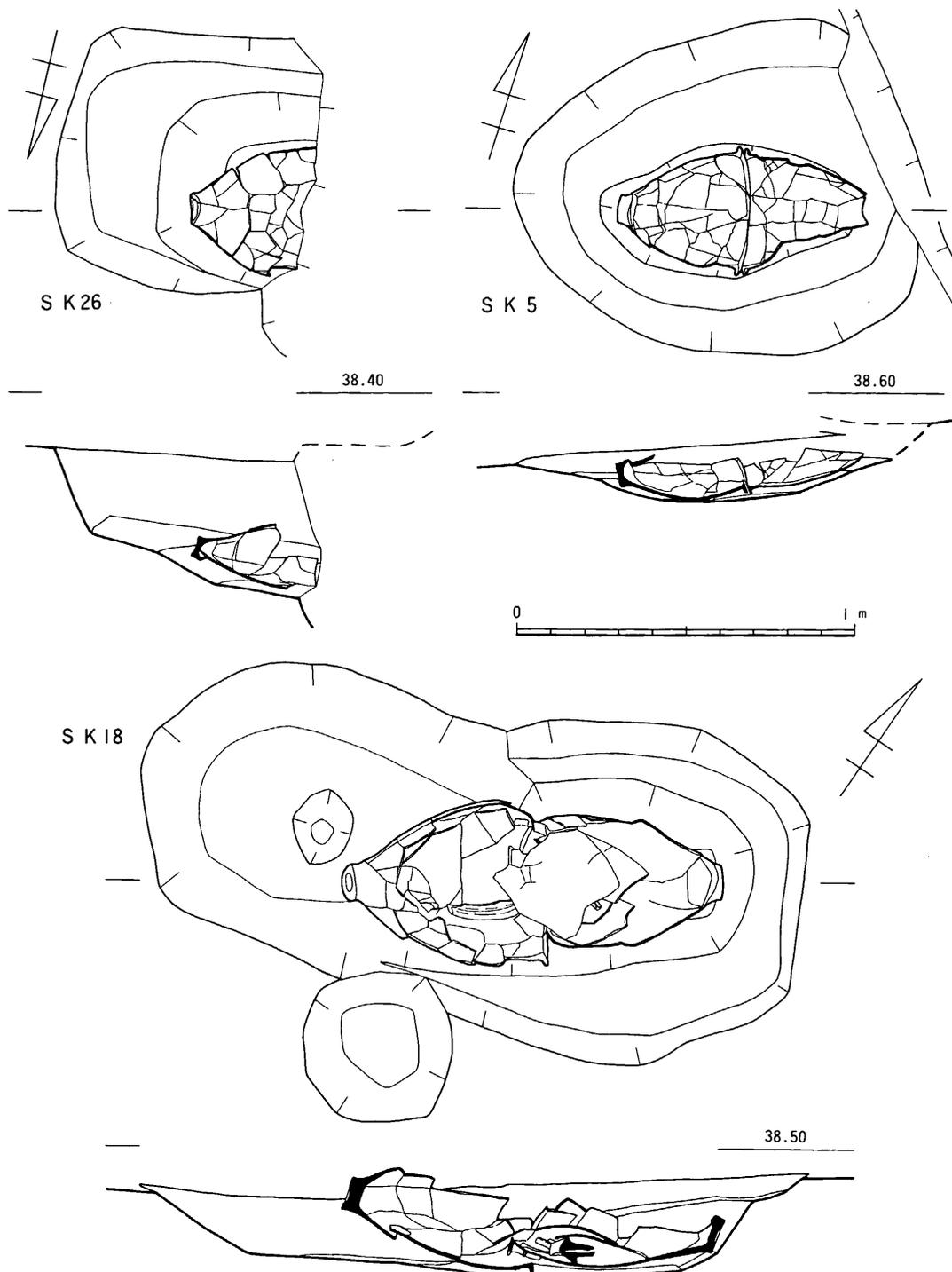
#### 7号甕棺墓（第18図 図版5）

11号甕棺墓（成人棺）の西側墓壙を切って検出されたもので、主軸をN-64°-Wにとる。ほぼ水平に埋置された小児用甕棺である。

#### 8号甕棺墓（第18図）



第15图 1号~4号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)



第16図 26号・5号・18号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

7号甕棺墓の南隣りにほぼ平行して埋置されるもので、主軸をN-77°-Wにとる。甕棺の上半は削平されるうえ、上甕の下半、下甕の胴部は他のピットに切られ残りが悪い。接口式の小児用甕棺墓である。

#### 9号甕棺墓（第19図 図版5）

10号甕棺墓と12号甕棺墓の東西に隣接して検出された。墓墳の上半は削平され不明瞭であるが、方形に近いプランを呈すと推定される。更に東側に横穴を穿ち下甕を挿入する。主軸をN-68°-Eにとり、9°の傾斜角をもって下甕を低く埋置する接口式の成人用甕棺墓である。

#### 10号甕棺墓（第19図 図版5）

11号・12号・15号甕棺墓とほぼ直線に並ぶ。本甕棺墓も削平が著しいが、1.2×1.1mを測る方形プランを呈す墓墳が残存する。更に北東に横穴を穿ち下甕を挿入する。主軸はN-68°-Eにとり、ほぼ水平に埋置する接口式の成人用甕棺墓である。

#### 11号甕棺墓（第20図 図版6）

10号・11号・12号・15号甕棺墓とほぼ直線に並ぶ北東端に位置する接口式の成人用甕棺墓で、主軸はN-58°-Eにとる。墓墳は削平されるものの比較的原形を止どめる。2×1.45mの方形プランを呈し、床面中ほどから北東に更に掘り下げ、横穴を穿つ。甕棺はほぼ水平に埋置され、下甕はほぼ横穴に収まるものと推定される。

#### 12号甕棺墓（第21図 図版6）

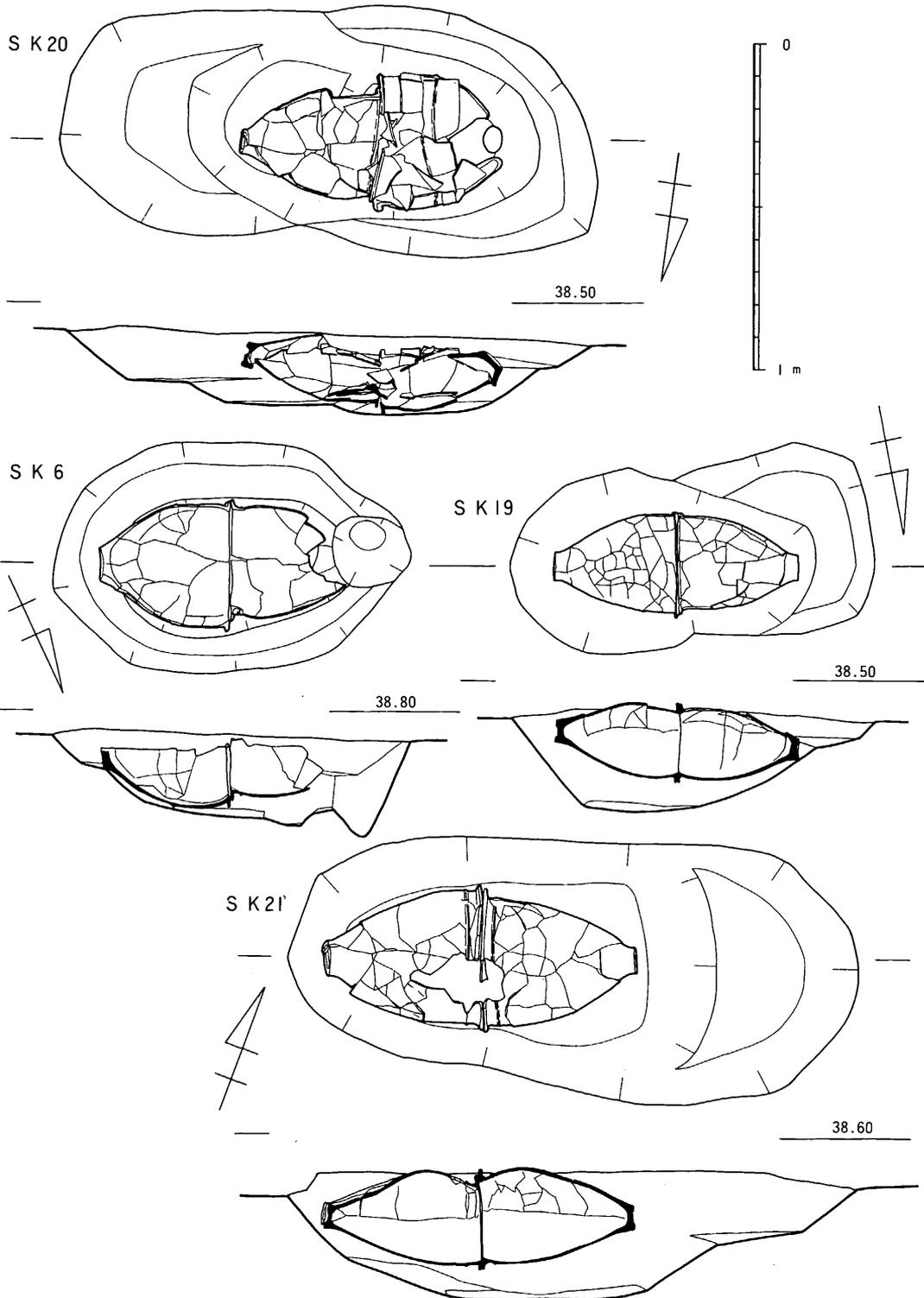
10号甕棺墓と15号甕棺墓の間で検出され、墓墳の一部を15号甕棺墓に切られる。墓墳の上半は削平され明確でないが、1.6×1.4mの方形プランを呈すと推定される。墓墳からさらに北東に横穴を穿ち下甕を挿入する。甕棺は下甕を低くして埋置され、傾斜角6°を測る。主軸をN-72°-Eにとる接口式の成人用甕棺墓である。

#### 13号甕棺墓（第22図 図版6）

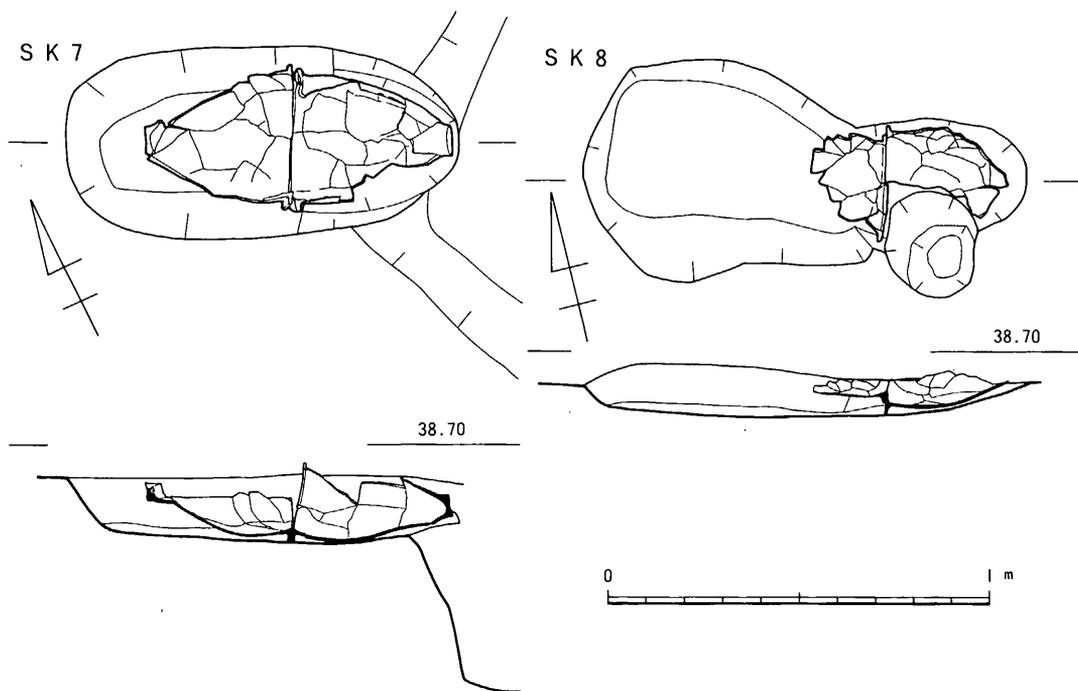
調査区の東部、3号木棺墓主軸の延長線上に位置する。墓墳は比較的良く残っており2.5×1.6mを測る方形プランを呈す。墓墳床面は西側が高く、東に向い掘り下げ、東壁体に横穴を穿つ。横穴に下甕を4/5ほど挿入し、下甕口縁内に、口縁部を打ち欠いた上甕をはめ込む。甕棺は下甕を高くして埋置され、傾斜角9°を測る。主軸をN-59°-Eにとる覆口式の成人用甕棺墓である。

#### 14号甕棺墓（第22図 図版6）

1号木棺墓主軸の延長上で検出されたものである。墓墳は比較的良く残っており2.6×1.3mを測る略方形プランを呈す。墓墳南東部は階段状に下り、床面は北西に向いゆるやかに下る。床面中央から更に掘り下げられ、西側角に横穴を穿ち下甕を挿入する。甕棺は下甕が僅かに低く埋置され、傾斜角3°を測る。主軸をN-72°-Wにとる接口式の成人用甕棺墓である。



第17図 20号・6号・19号・21号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



第18図 7号・8号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

15号甕棺墓（第21図 図版7）

10号・11号・12号・15号甕棺墓とほぼ直線に並ぶ南西端に位置する接口式の成人用甕棺で、主軸はN-66°-Eにとる。墓壙は削平が著しく明瞭でないが、1.8×1.3mの方形プランが検出された。床面は南東側壁体に添って掘り下げられ、北東側壁体に横穴を穿つ。横穴に下甕を挿入し、上甕を合わせる接口式の成人用甕棺である。下甕がやや低く埋置され、傾斜角4°を測る。

16号甕棺墓（第20図）

10号・12号甕棺墓の南東で、これらと平行して検出された。墓壙は大きく削平され、上下甕とも陥没する。墓壙は方形プランを呈すと考えられ、甕棺はほぼ水平に埋置される。主軸をN-56°-Eにとる接口式の成人用甕棺である。

17号甕棺墓（第23図 図版7）

3号木棺墓に接して検出された。主軸をN-51°-Wにとり、下甕を僅かに高くして埋置された接口式の小児用甕棺である。

18号甕棺墓（第16図 図版7）

24号・25号甕棺墓と同一軸線上で検出された。削平が著しく、埋置状態は不明瞭である。墓壙床面は平坦で、北東壁体に横穴を穿って下甕を挿入したと思われる。残存口縁部は覆口して

いるが、埋置後、下甕底部が落ちた際に現状のようになったと考えられ、本来は接口していたものであろう。主軸はN-56°-Eにとる中形甕棺墓である。

#### 19号甕棺墓（第17図 図版7）

24号甕棺墓（成人棺）墓壙東隅を切って埋置されるものである。主軸はN-80°-Wにとり、ほぼ水平に埋置される接口式の小児用甕棺墓である。

#### 20号甕棺墓（第17図 図版8）

24号甕棺墓と2号木棺墓の間で検出された。主軸はN-83°-Eにとり、ほぼ水平に埋置される接口式の小児用甕棺墓である。

#### 21号甕棺墓（第17図 図版8図）

24号・25号甕棺墓を中心とするグループの端で検出された。主軸をN-71°-Eにとり、ほぼ水平に埋置された接口式の小児用甕棺墓である。

#### 22号甕棺墓（第23図）

13号甕棺墓と3号木棺墓の間で検出された。主軸をN-40°-Wにとる接口式の小児用甕棺で、下甕をやや低く埋置し、傾斜角11°を測る。接口部分は後世のピットによって壊される。

#### 23号甕棺墓（第23図）

調査区西端で検出された。下甕下半分は削平により失われる。下甕口縁には白色粘土がめぐる。主軸をN-63°-Wにとる小児用甕棺墓で、下甕が低く埋置される。

#### 24号甕棺墓（第24図 図版8）

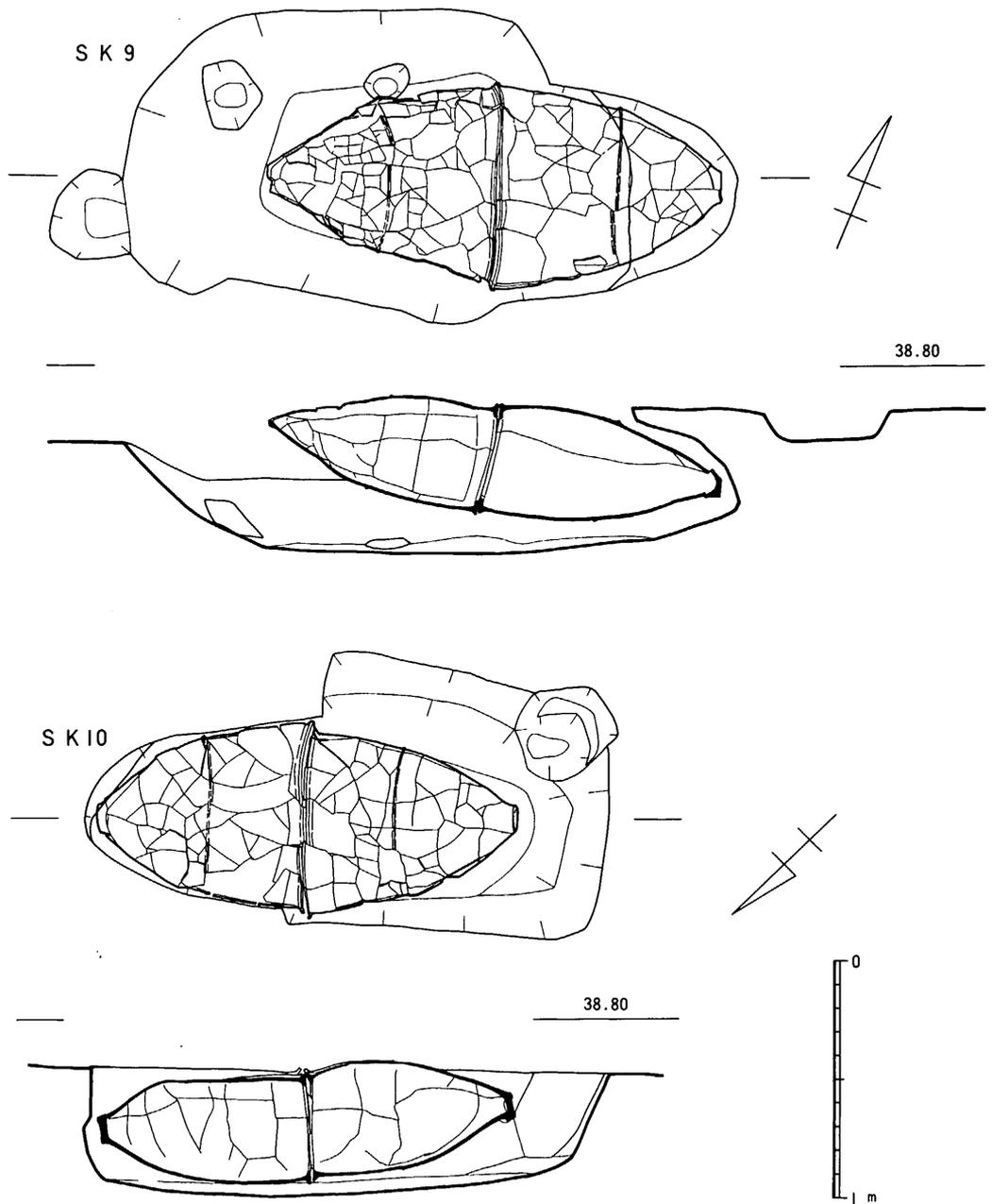
25号甕棺墓の東側から検出された。下甕は陥没し墓壙の形状は不明瞭であるが、1.5×1.4mの方形プランを呈すと思われる。甕棺は墓壙の延びる方向から若干南に主軸をとってほぼ水平に埋置される。主軸をN-61°-Eにとる接口式の成人用甕棺である。

#### 25号甕棺墓（第24図 図版8）

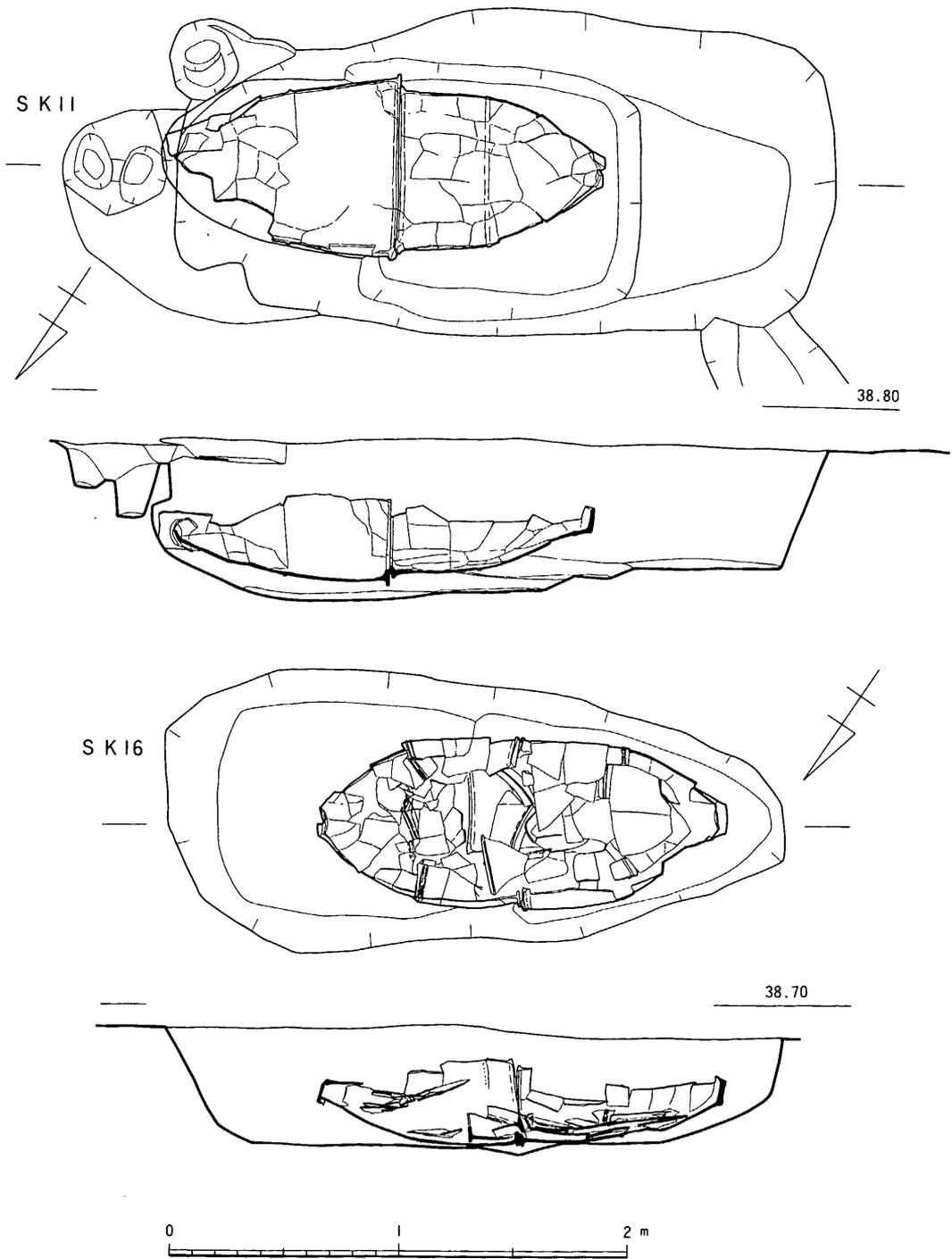
24号甕棺墓の西で検出されたものである。比較的良く墓壙が残るもので、2.3×1.7mの方形プランを呈す。墓壙東側に段を有し、北側壁体に添って西側壁体に横穴を穿つ。下甕は完全に横穴に挿入される。主軸をN-80°-Eにとり、ほぼ水平に埋置される成人用甕棺墓である。

#### 26号甕棺墓（第16図）

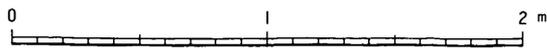
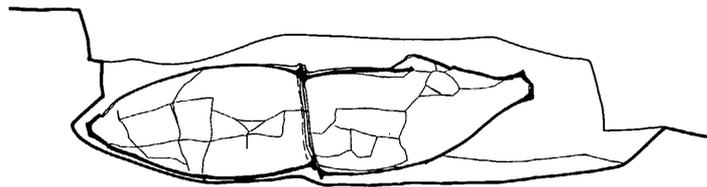
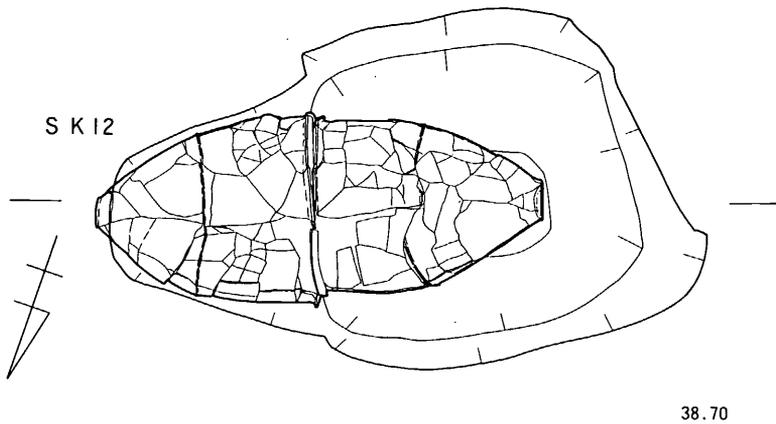
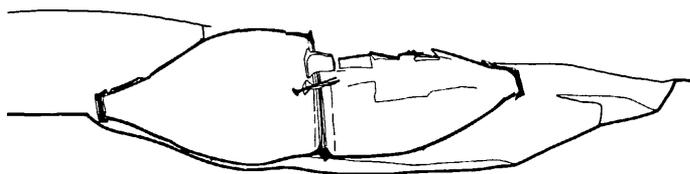
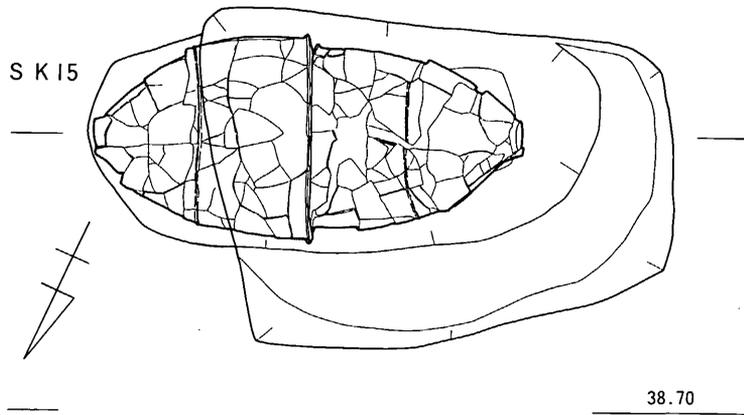
23号甕棺の北隣りで検出された。上甕口縁部から下甕にかけては削り取られる。主軸をN-78°-Eにとる小児用甕棺墓である。



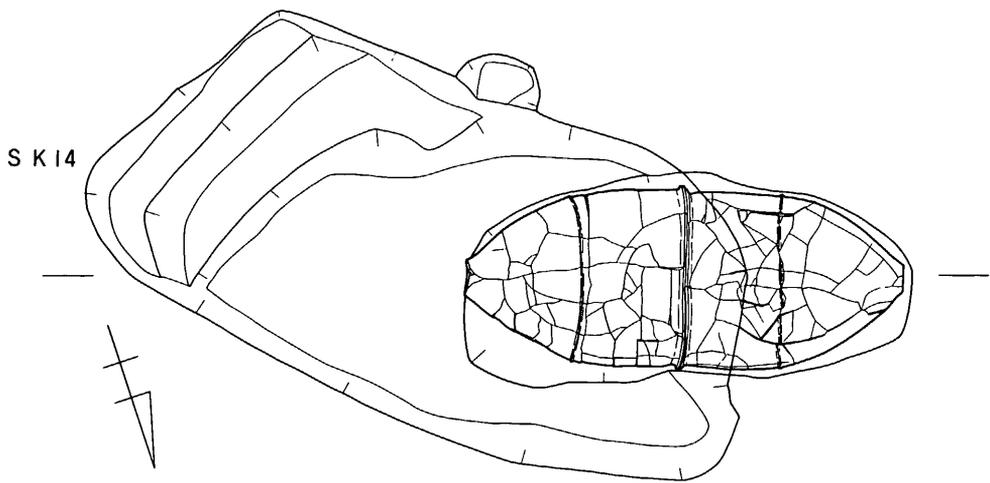
第19図 9号・10号甕棺墓実測図(縮尺1/30)



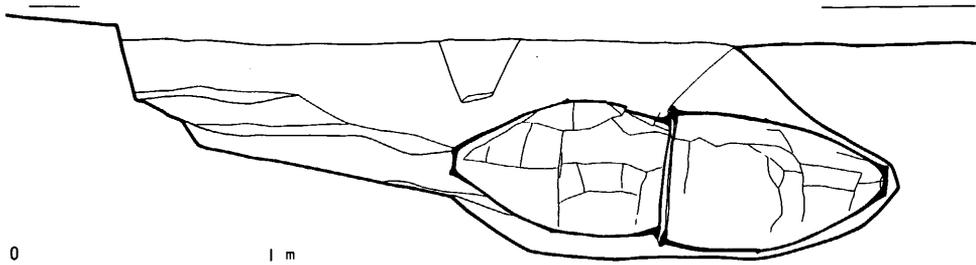
第20図 11号・16号甕棺墓実測図（縮尺1/30）



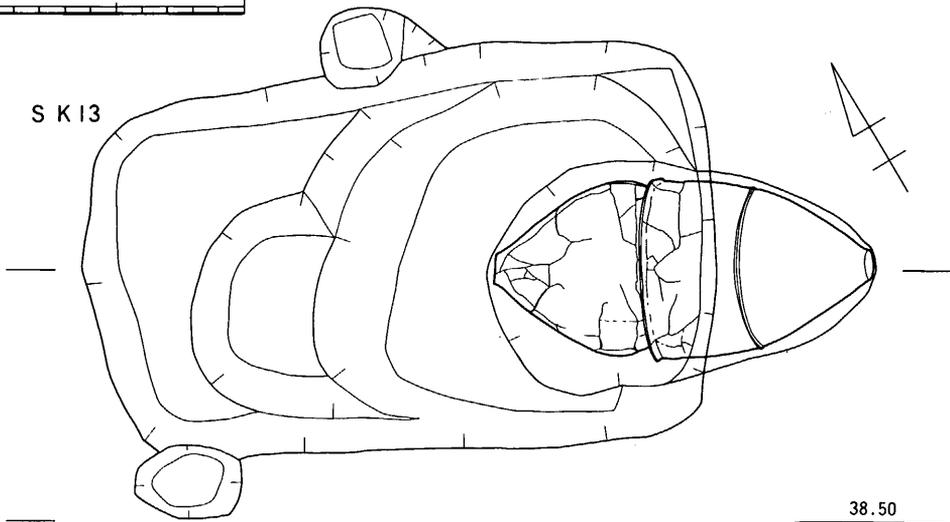
第21図 15号・12号壙棺墓実測図（縮尺1/30）



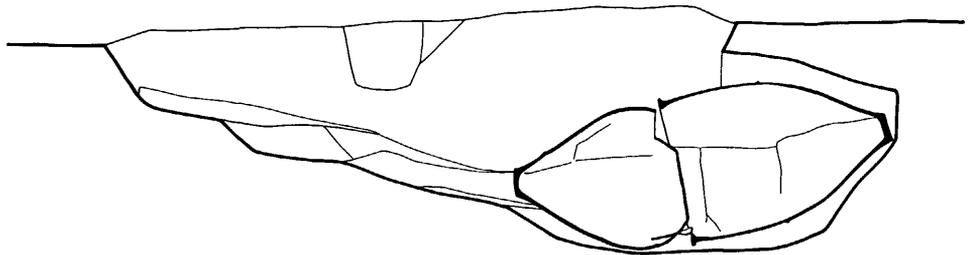
38.40



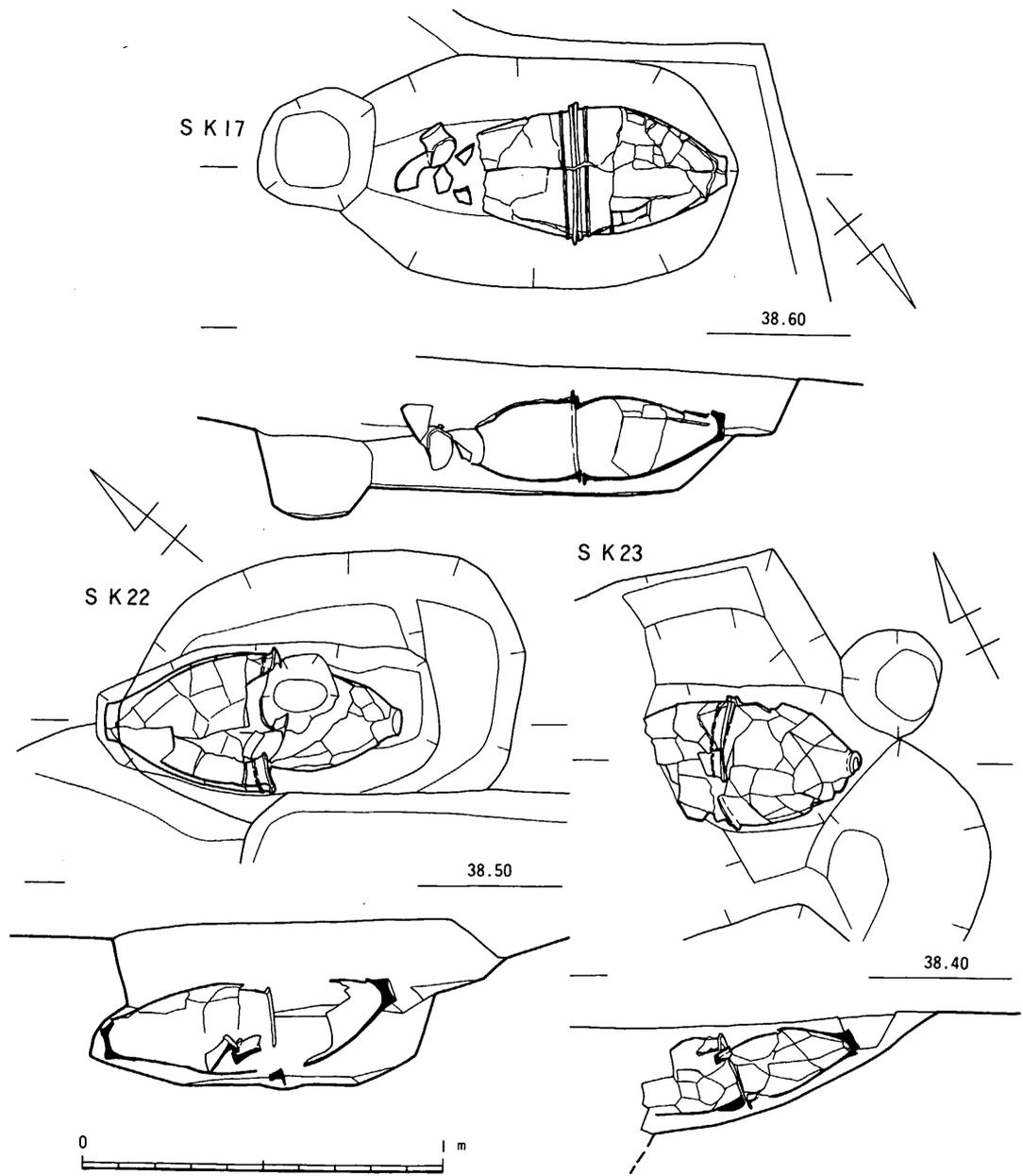
S K 13



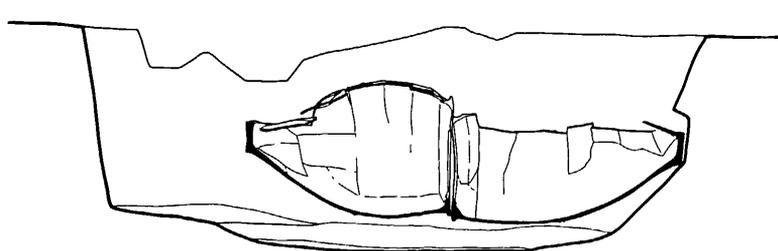
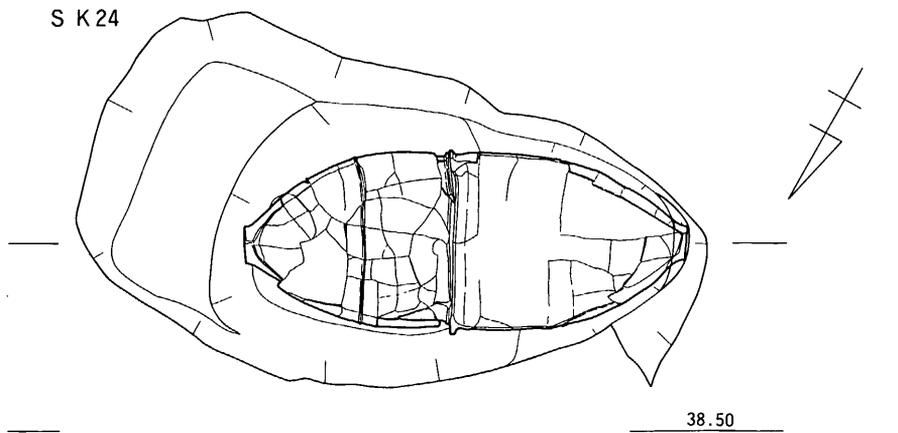
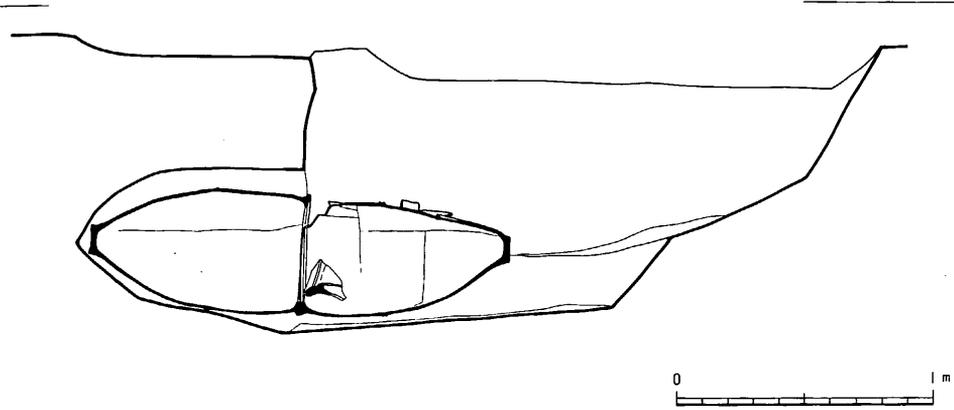
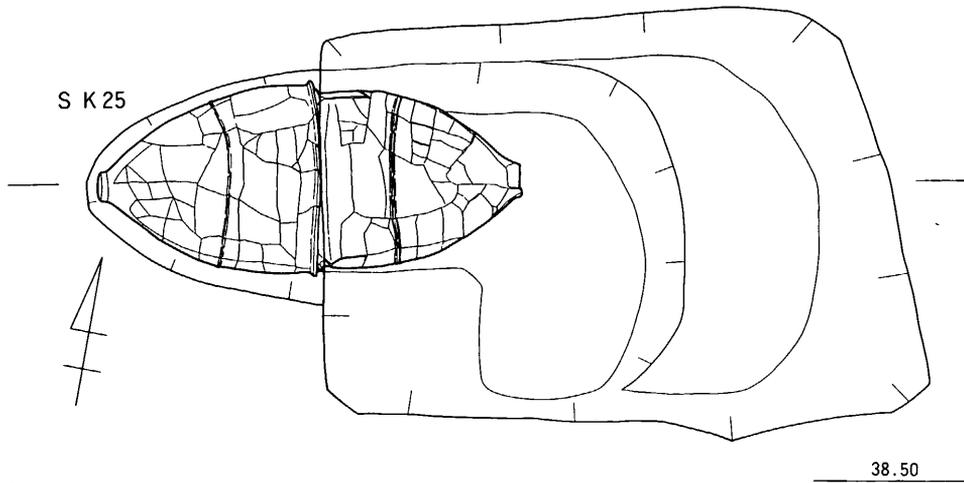
38.50



第22図 14号・13号壙棺墓実測図(縮尺1/30)



第23図 17号・22号・23号 壙墓実測図（縮尺1/20）



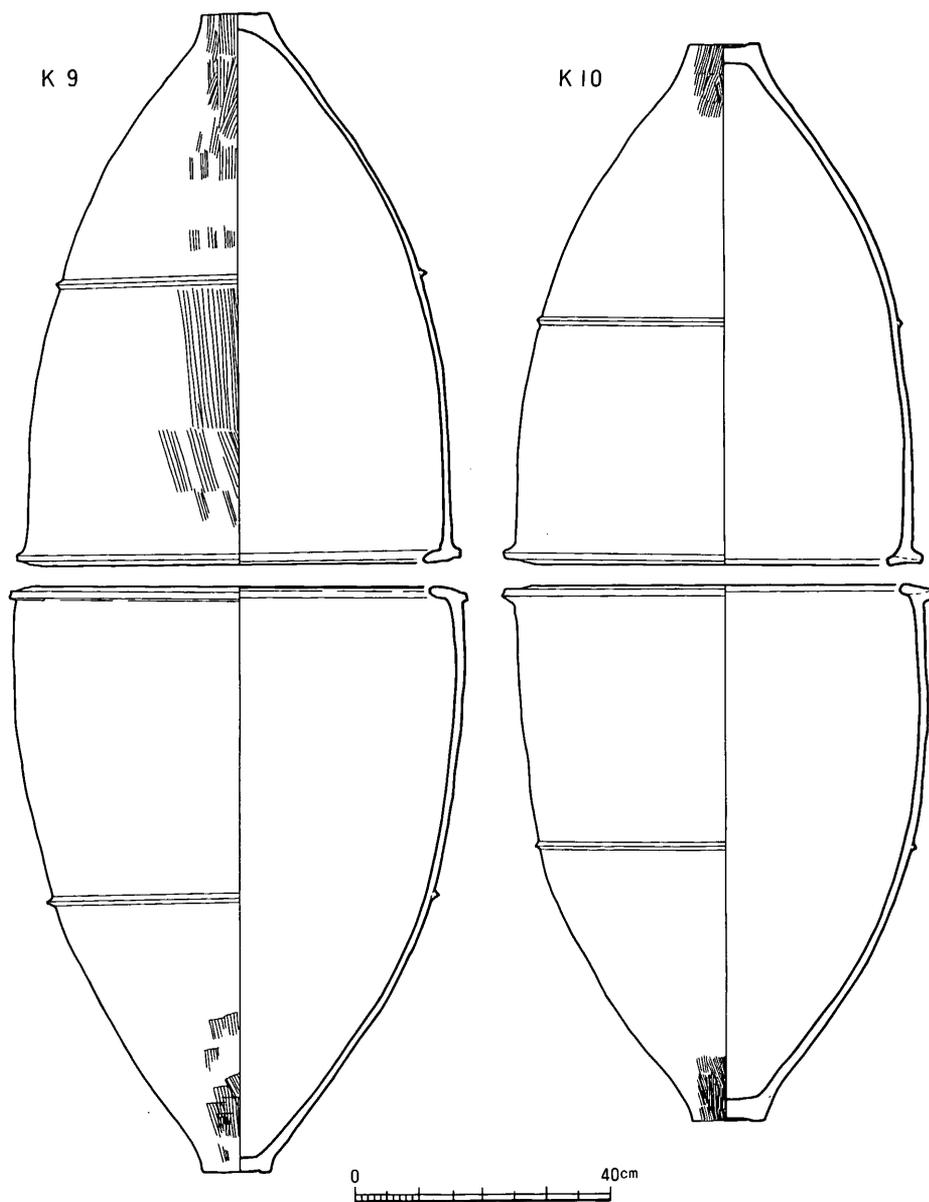
第24図 25号・24号甕棺墓実測図（縮尺1/30）

甕棺 (第25~34図 図版14~21)

甕棺は26基51個体出土した。これらの甕棺は法量により大形(20個体)、中形(4個体)、小形(27個体)に分け、さらに形態によりそれぞれ3類、1類、3類に分けた。

大形甕棺 I 類

S K 14上甕に見られるように口縁部は内側にも肥厚するが、全体として逆L字状を呈し、

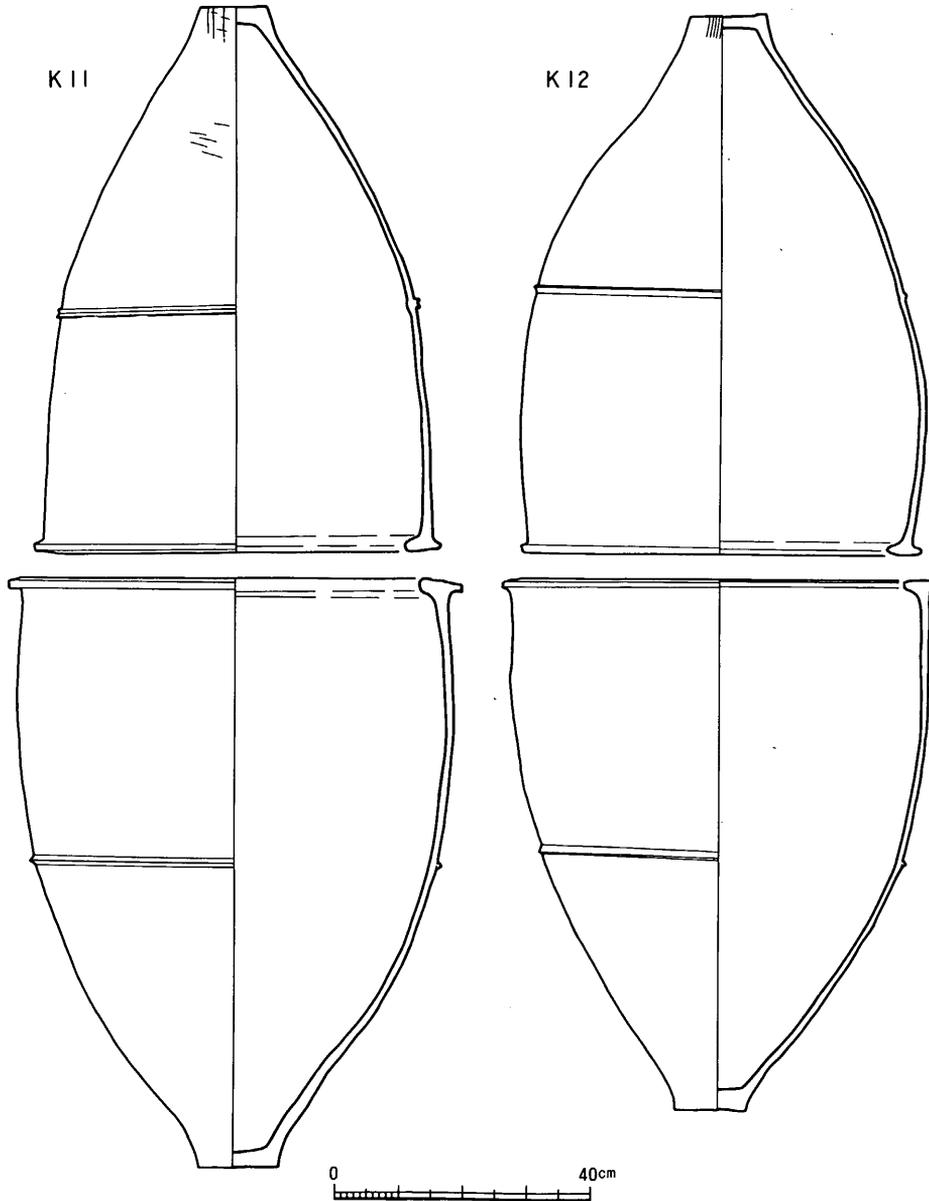


第25図 9号・10号甕棺実測図 (縮尺1/12)

胴部はやや張る。凸帯は胴部のほぼ中央に貼付される。

### 大形甕棺Ⅱ類

口縁部が内側に張り出し、胴部が明瞭に張るもので、凸帯は胴部中央より高い位置に貼付される。口縁平坦部はS K 25下甕が内傾する外はほぼ水平である。凸帯はS K 24・25の上甕が二条、同下甕が一条の三角凸帯をめぐらす。またS K 25の凸帯貼付に沈線による目印が認められ

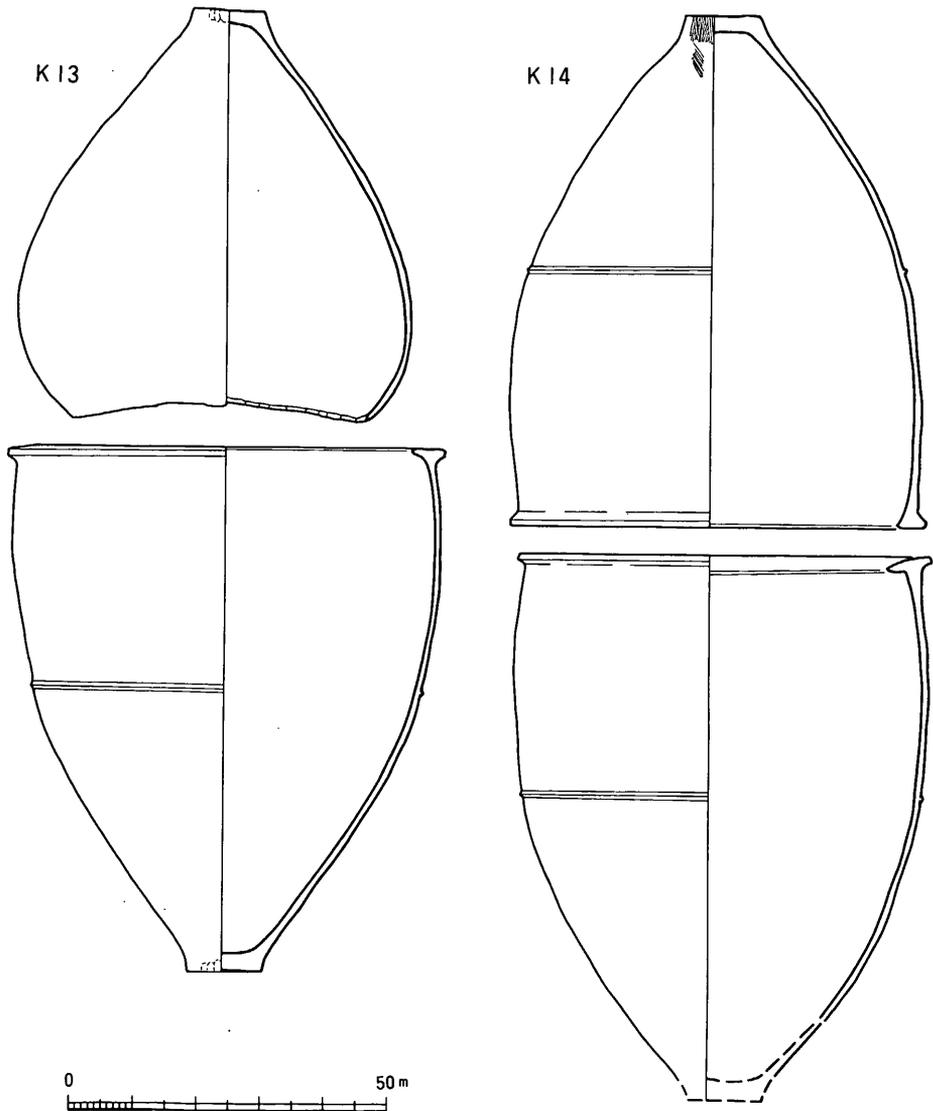


第26図 11号・12号甕棺実測図（縮尺1/12）

た。

### 大形甕棺Ⅲ類

口縁部はⅡ類と同様に内側へ張り出すが、胴部上半は直立、または僅かに開き気味に立つもので、さらに凸帯の位置により二分した。凸帯が胴部中位より上方にめぐるものをⅢa類、下方にめぐるものをⅢb類とした。口縁平坦部はほぼ水平なもの（SK12上下甕、SK13下甕、SK16下甕）、外傾するもの（SK9・10・11・15上下甕、SK16上甕）、内傾するもの（SK14下甕）がある。また、凸帯はSK16上のみにも2条の三角凸帯がめぐり、外はすべて1条のものが



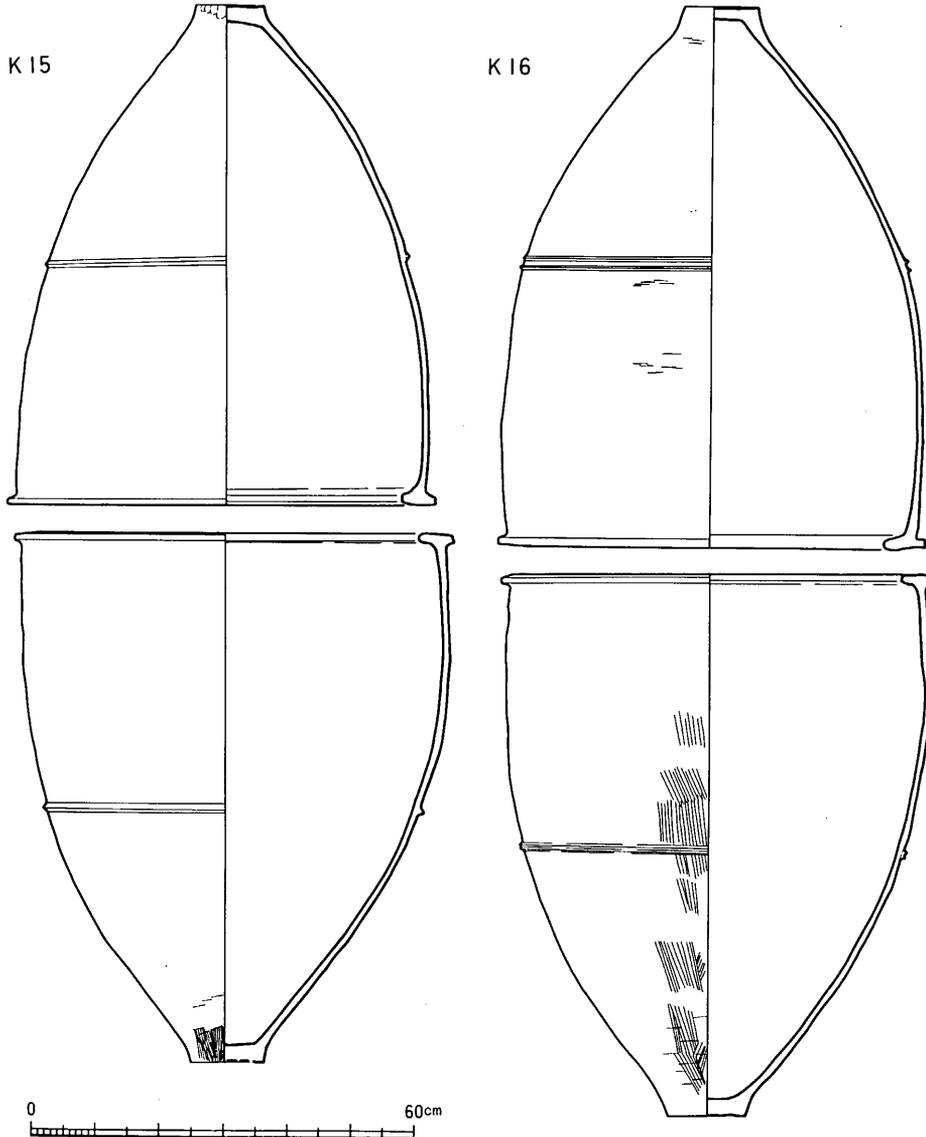
第27図 13号・14号甕棺実測図（縮尺1/12）

めぐる。S K11上甕にはタタキ痕が僅かに認められ、底部には靱の圧痕が残る。

以上の大形甕棺のほかにS K13上甕のように、胴部が強く張り、口縁下がすぼまるものがある。

### 中形甕棺

口縁部は逆L字状を呈し、平坦部は内傾する。胴部最大径は上位にあり、張りが強い。底部は細くすぼまり、上げ底をなす。口縁下にはS K1下甕、S K18上甕が2条、これと対をなす



第28図 5号・16号甕棺実測図（縮尺1/12）

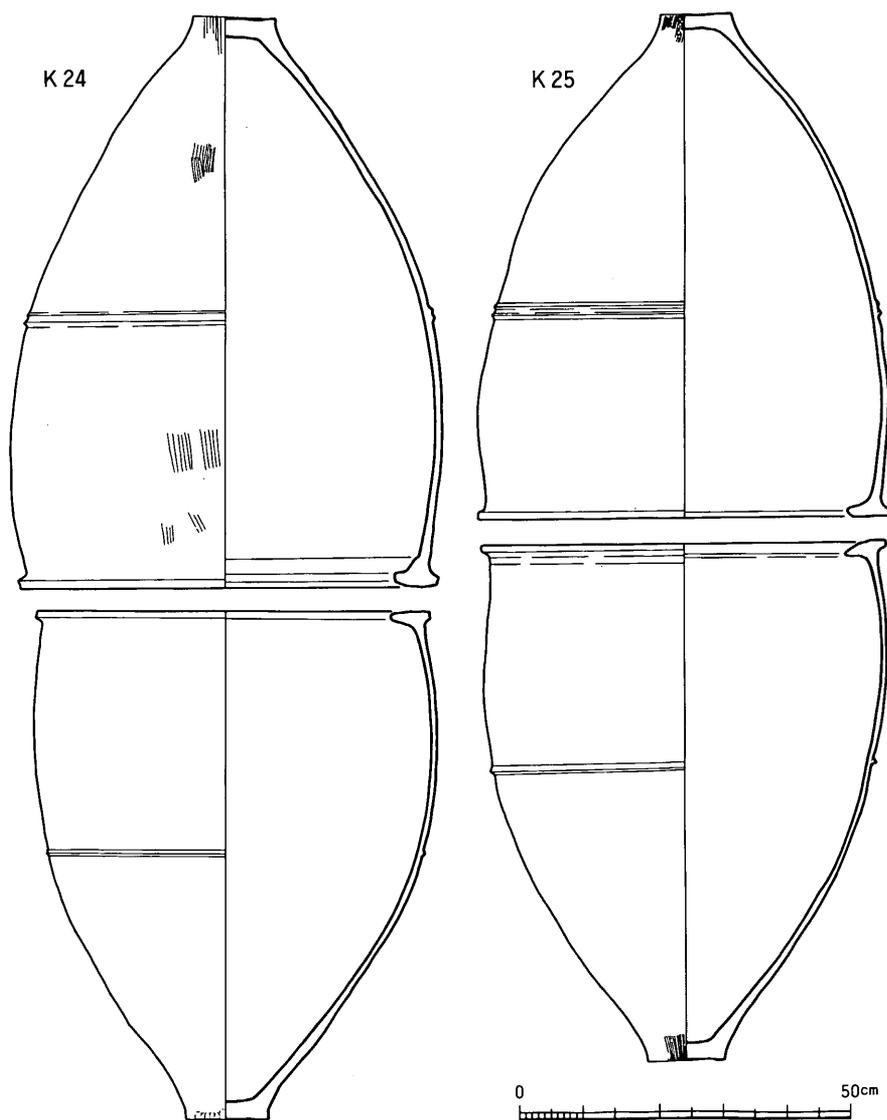
甕に1条の三角凸帯が貼付される。

#### 小形甕棺Ⅰ類

口縁部は逆L字状を呈し、平坦面は内傾する。胴部最大径は上位にもち、張りが強い。底部は細くしぼられ、上げ底をなす。S K23下甕の口縁下に三角凸帯がみとめられる。

#### 小形甕棺Ⅱ類

Ⅰ類に類似するが、やや後出的な要素が認められるものをⅡ類とした。口縁部は逆L字状を呈す。胴部最大径がⅠ類に比べ低く、胴部の張りも弱い。底部のしまりもあまく、胴部最大径

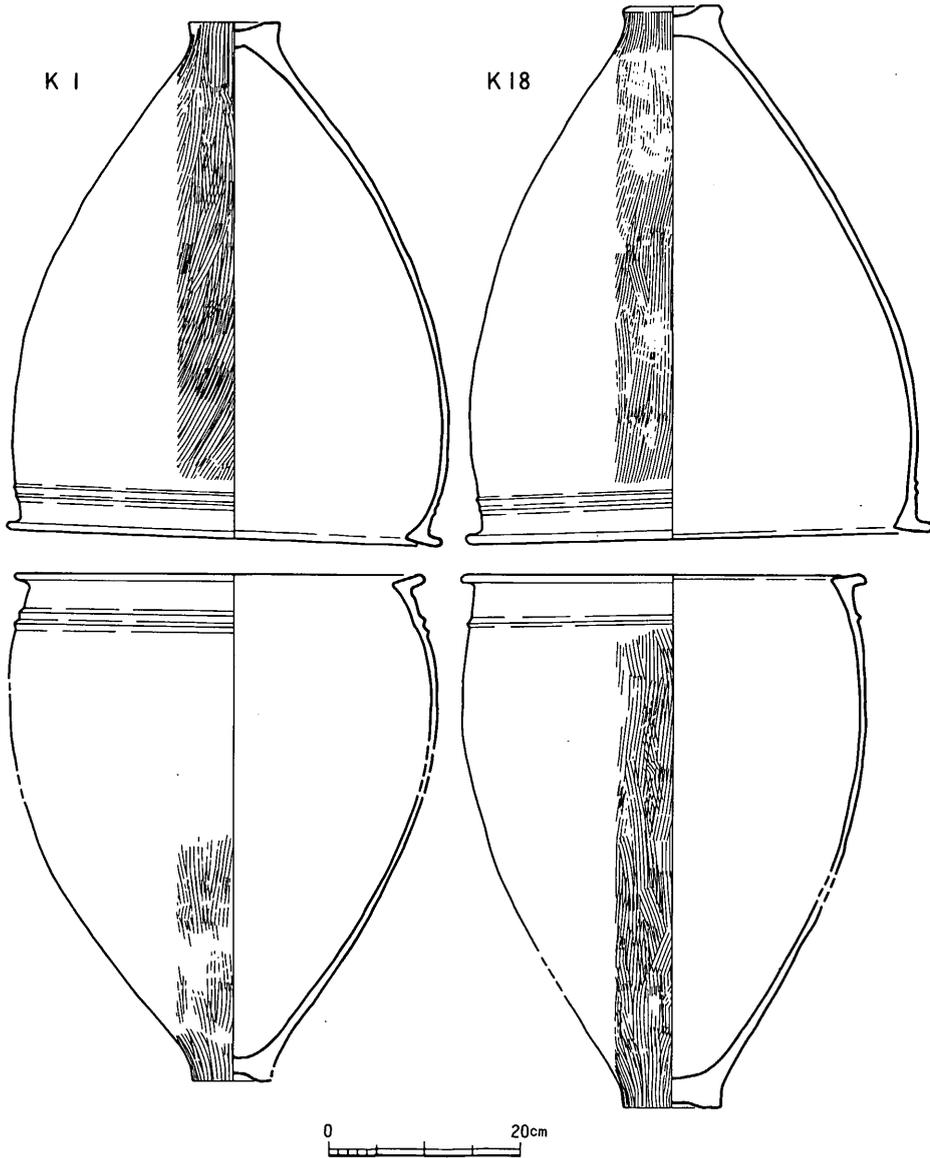


第29図 24号・25号甕棺実測図(縮尺1/12)

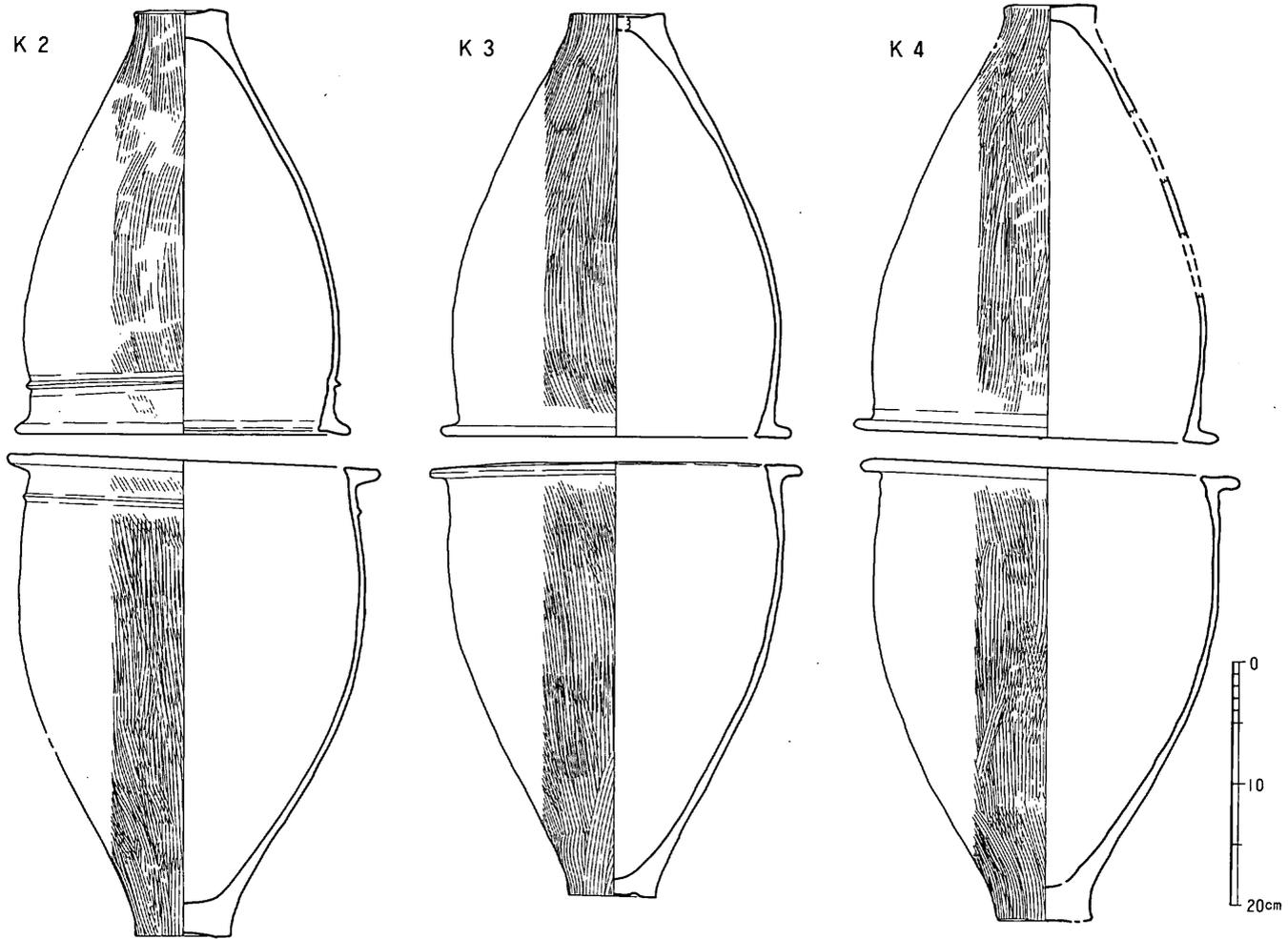
に対する底部直径の比率が25%を越える。口縁平坦部はSK2上甕、SK19下甕、SK22上下甕などが内傾するが、その度合は小さく、SK17上甕が僅かに外傾する外はほぼ水平である。

SK2・17・21上下甕、SK22下甕の口縁下には1条の三角凸帯が貼付される。底部はいずれも上げ底を呈すが、I類に近いものから、浅いものまで、その形状は定形ではない。

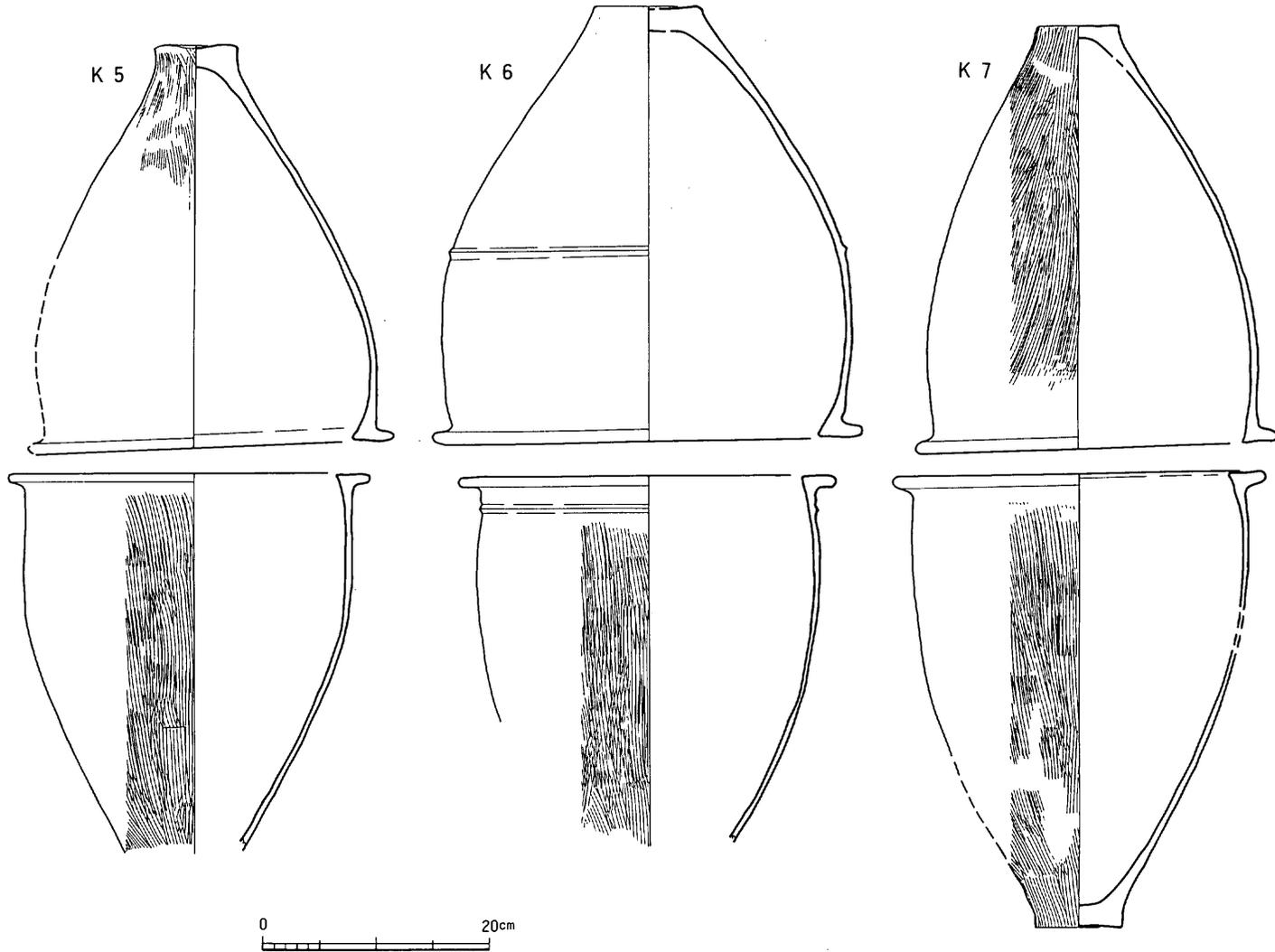
SK6上甕は前述の甕と形態を異にするが、胴部の張りがやや弱いこと、三角凸帯が胴部最大径位より若干下に貼付されている点などからII類平行期と考えられる。



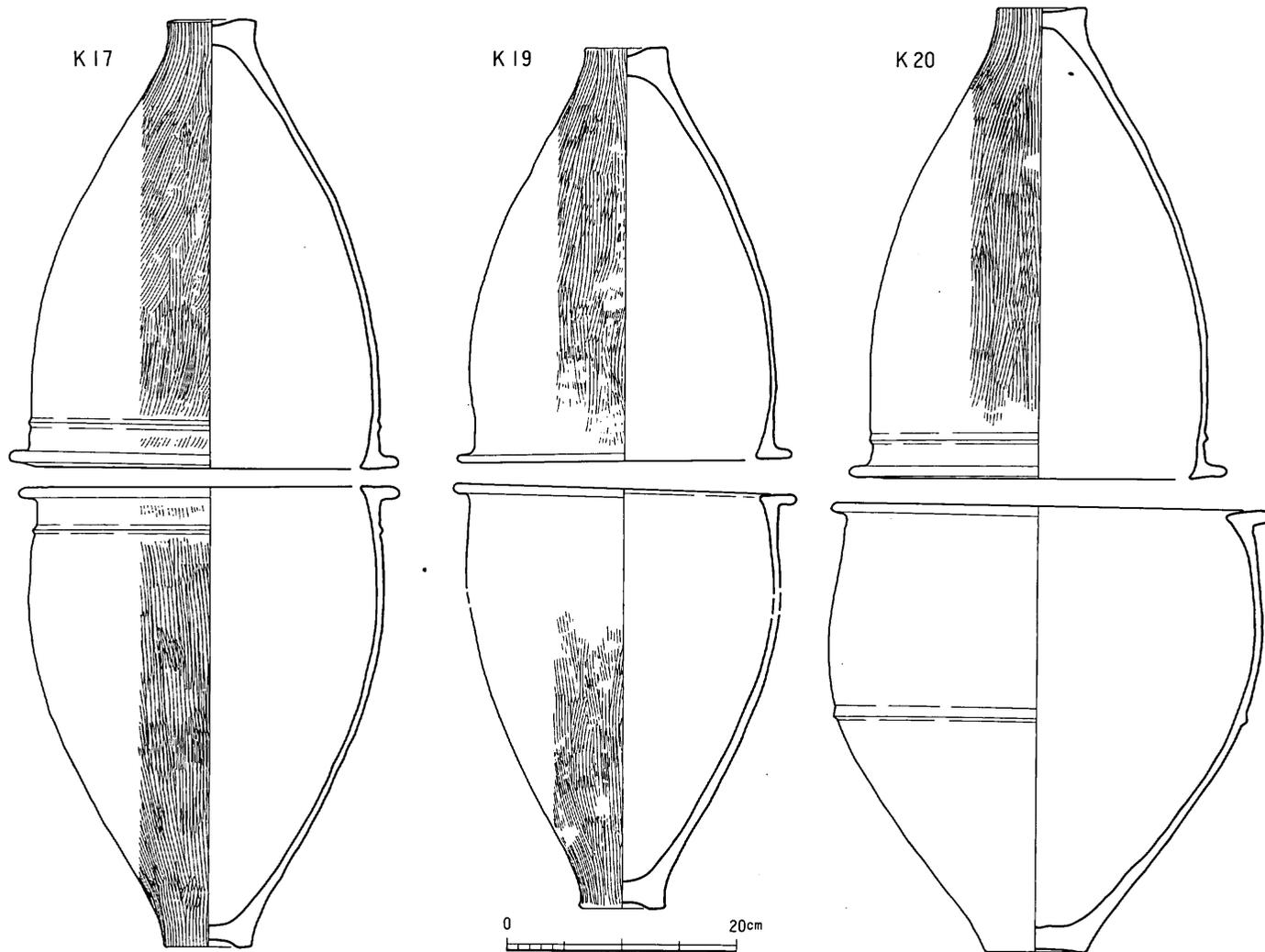
第30図 1号・18号甕棺実測図(縮尺1/8)



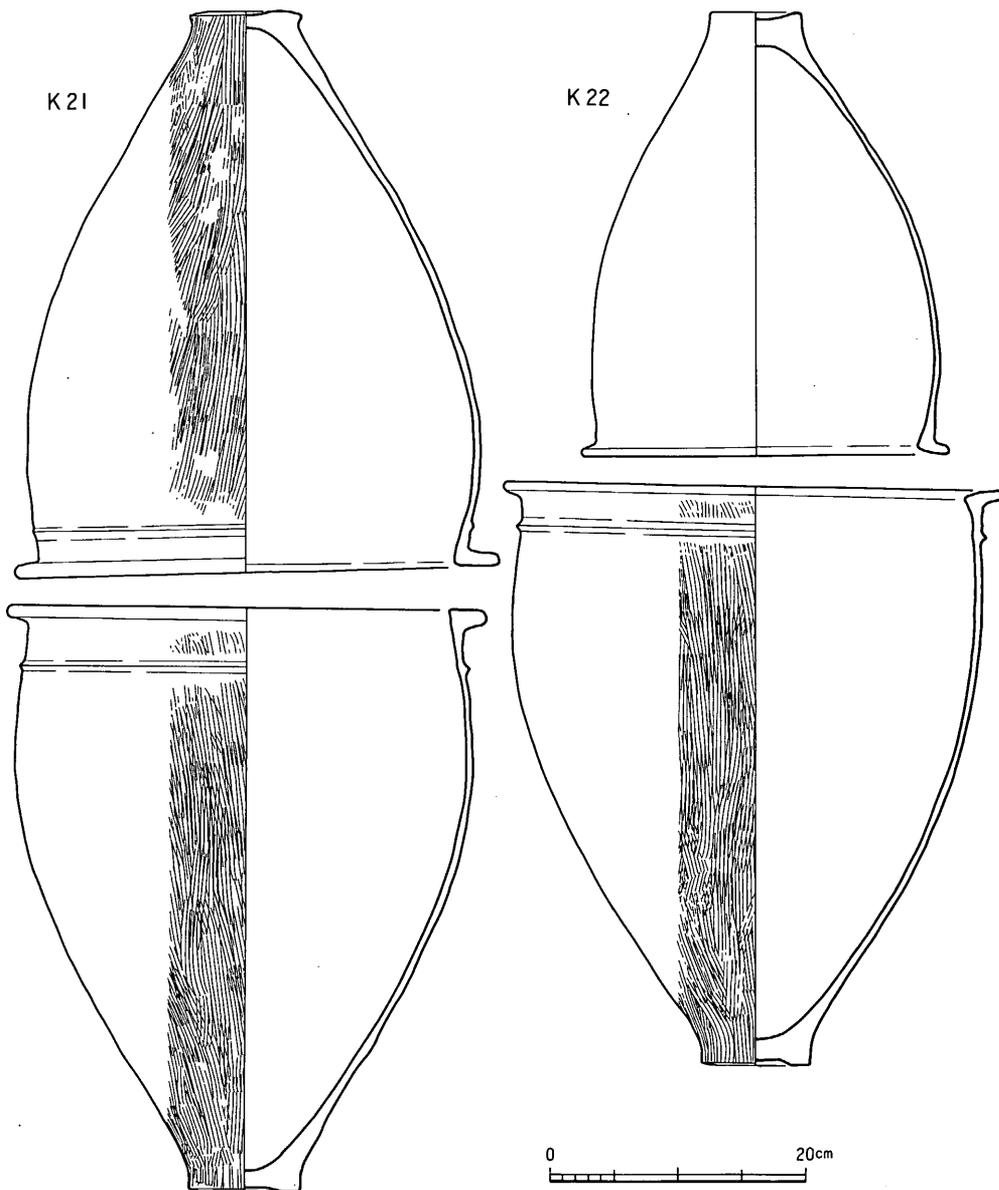
第31图 2号·3号·4号甕棺实测图(縮尺1/6)



第32图 5号·6号·7号甕棺実測図(縮尺1/6)



第33図 17号・19号・20号甕棺実測図（縮尺1/6）



第34図 21号・22号甕棺実測図（縮尺1/6）

### 小形甕棺Ⅲ類

口縁部は逆L字状を呈し、平坦部は水平、または若干外傾する。胴部の張りは不明瞭となり、底部もほとんど締まらず、平底に近くなる。SK6下甕とSK20上甕の口縁下には1条の三角凸帯が貼付される。

## 4 木棺墓

### 1号木棺墓（第35図 図版9）

1号甕棺と14号甕棺の間で検出された。主軸はN-44°-Wにとる。墓墳は189×128cmの長方形プランを呈す。40～50cmほど垂直に掘り下げた後、棺設置部分は規模をせばめ更に30～40cmほど掘り下げ、棺設置後裏込めを行う。棺の規模は130×52cm測る。南西側板と北東側板の一部に板をはめ込む切り込みを設け、木棺は側板で木口を狭み込む形態をとる。

### 2号木棺墓（第35図 図版9）

24号・25号甕棺の南東で検出され、主軸方位をほぼ同じくする。主軸はN-82°-Eにとり、墓墳は183×88cmを測る長方形プランを呈す。地山を棺の規模に合わせ二段掘りするもので、棺の規模は153×36cmを測る。木口板設置部分には掘り込みをもつ。木棺は箱形に組み合わせ形態をとる。

### 3号木棺墓（第35図 図版9）

1号・3号・4号甕棺墓に切られるものである。主軸をN-32°-Wにとる。地山を二段掘りして棺を設置するもので、墓墳は195×128cmの方形プランを呈す。南東隅に木口設置の掘り込みであろうか37cmに渡り深さ8cmほど下げられる。棺の規模は明確でないが、床面から110×40cmほどと推定される。

## 5 土壇

### 1号土壇（第36図）

調査区の東部で検出された。約1.4×1.3mの略方形プランを呈す。深さは15cmほどを残す。

### 2号土壇（第37図 図版10）

調査区の西部で検出された。約1.4×9.5mの楕円形プランを呈す。壁体は僅かに袋状を呈す部分があり、深さは60cm余りを残す。

### 3号土壇（第36図 図版10）

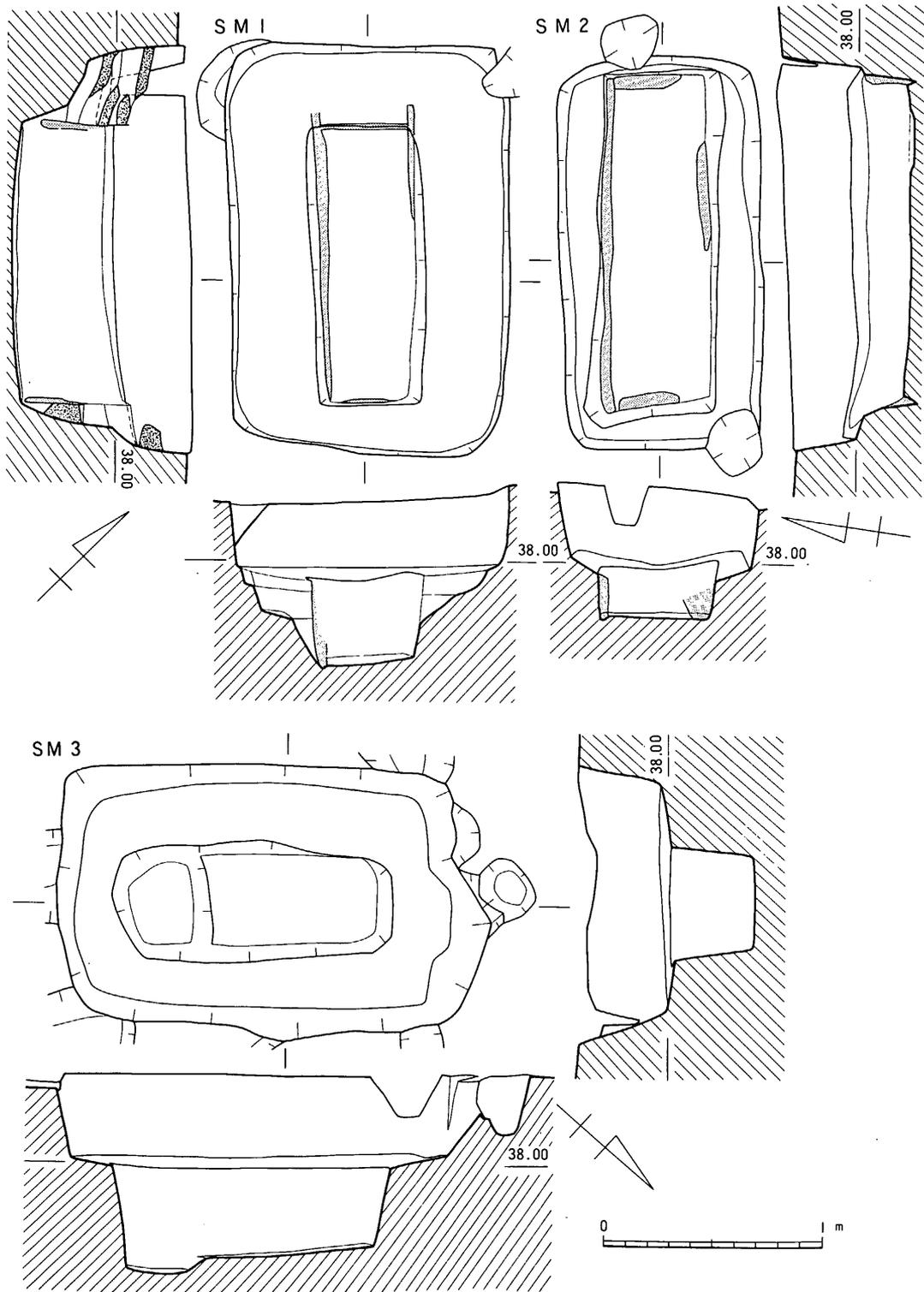
調査区の東部で検出され、4号住居跡を切る。約2.2×1.75mを測る略方形プランを呈す。上面から約50cmの深さに段が $\frac{3}{4}$ ほどめぐり、中央はさらに20cmほど深くなる。

### 4号土壇（第36図 図版10）

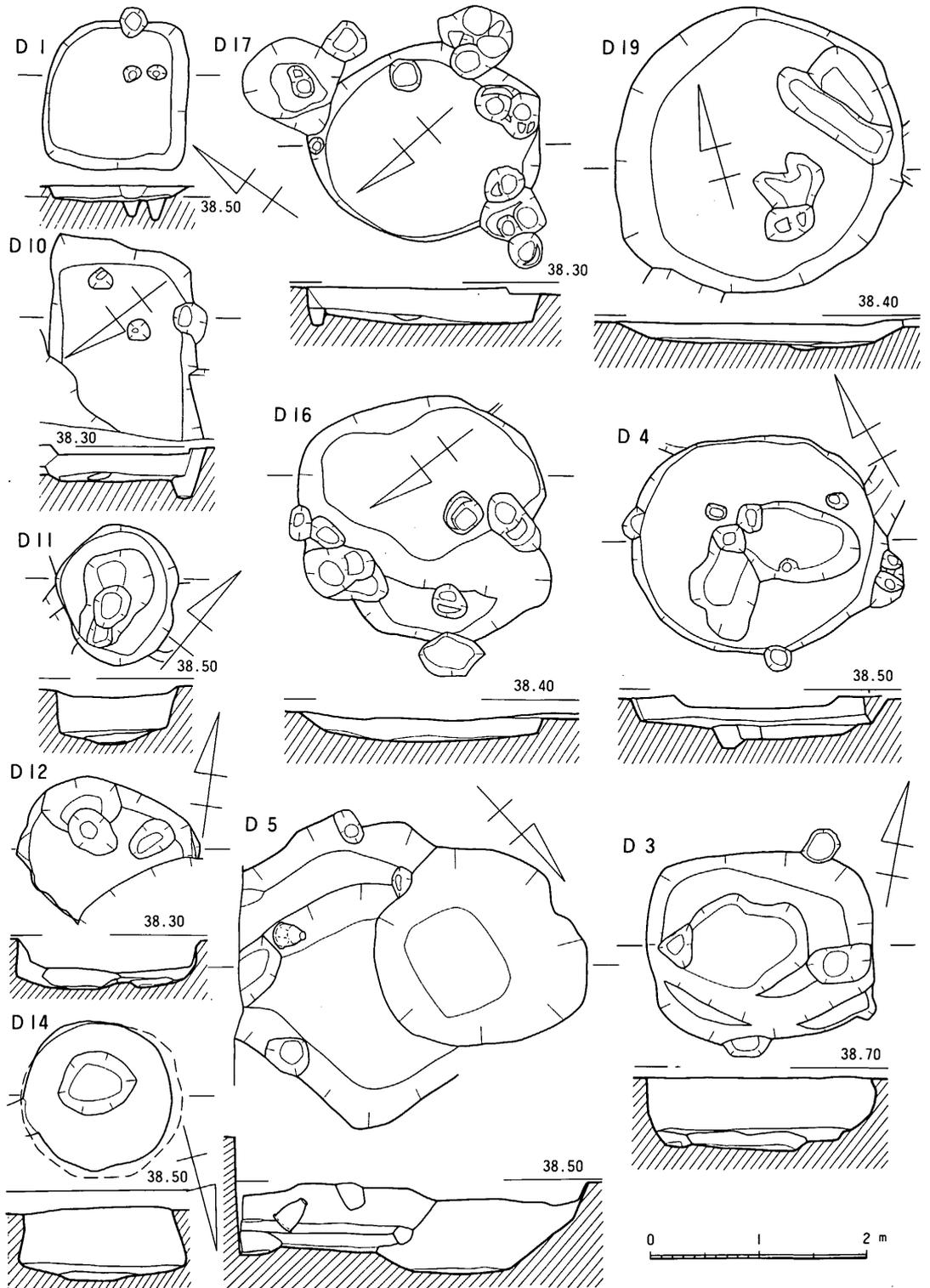
3号住居跡の南隣りで検出された径2.1～2.3mの円形プランを呈す。上面から20～30cmほどの部分に平担部がめぐり、中央部はさらに約10cm深くなる。この中央部には混黒色土黄色粘質土、平担部上には混黄褐色粘質土粒黒色土が埋まっていた。

### 5号土壇（第36図 図版10）

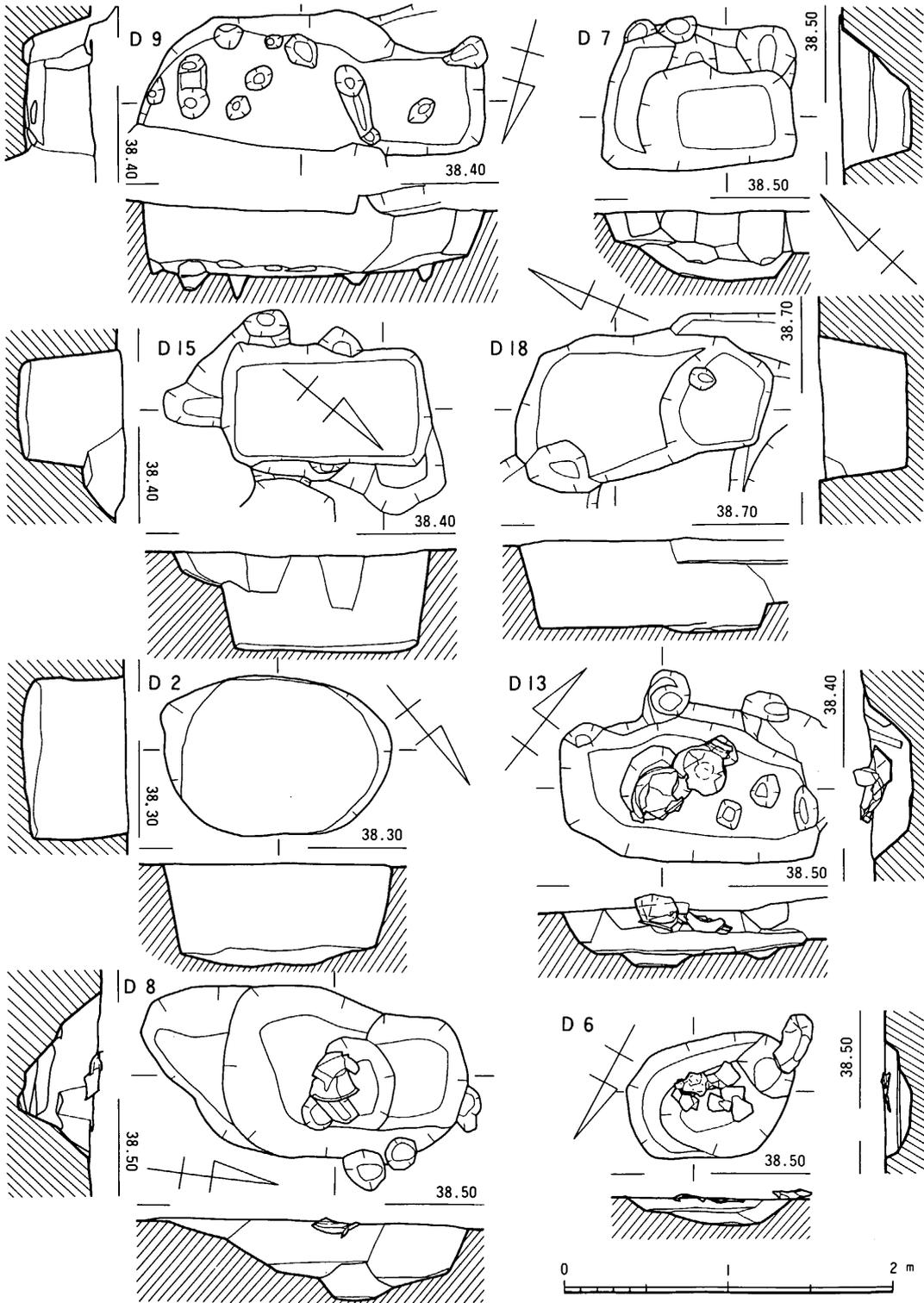
調査区東側で1号溝に切られて検出され、一部は調査区外へ延びる。最大幅3×3.2mを測る



第35図 木棺墓実測図 (縮尺1/30)



第36図 土坑実測図 (縮尺1/60)



第37図 土坑実測図 (縮尺1/40)

不整形プランを呈す。土壌東側で床面より20cmたらず浮いて甕（第38図4）が口縁を下にして出土した。

#### 6号土壌（第37図 図版11）

調査区西部で19号土壌を切る小形の土壌である。1.05×0.77mを測る略楕円形プランを呈す。上面から深さ10cmたらずの所に½ほど段がめぐり、中央の床面はさらに約8cm深くなる。遺構上面から土器が出土した。

#### 7号土壌（第37図 図版11）

調査区の西部、13号甕棺墓の西隣りから検出された。北～東縁部をピットにより切られ明瞭さを欠くが、1.15×0.9mを測る方形プランを有す。2辺の上面から20～30cmの深さに段をもち、上面から40cmほどの深さに58×37cmの方形プランを呈す床面がある。

#### 8号土壌（第37図 図版11）

7号土壌の東隣りで検出された。長軸を南北にとる約2×1.1mの不整形楕円形プランを呈す。南側2段、北側1段の平坦面を経て深さ47cmの床面に至る。上面から壺（第39図9）が出土した。

#### 9号土壌（第37図 図版11）

25号甕棺に切られる全長2.07mを測る長方形プランの土壌である。上面から40cmほど下で床面を検出した。床面には12個のピットが認められたが、総じて平坦な床面である。

#### 10号土壌（第36図 図版12）

5号住居跡西隣りから検出された。一端は調査区外へ延びる。幅は1.3m以上、長さ1.8m以上で、方形プランを呈すと思われる。上面から床面まで約30cmを測り、床面は平坦である。

#### 11号土壌（第36図 図版12）

8号土壌の東側で検出され、3号住居跡を切る。径1.1～1.3mの円形プランを呈し、上面から30cmほどの所に平坦部がある。中央から南側にかけて更に10cmほど深くなり、その中央に深さ約5cmのピットがある。

#### 12号土壌（第36図）

24号・25号甕棺墓に切られたため形状は明瞭さを欠くが、円形プランを呈し、壁体は袋状をなすと考えられる。測定可能な上面プランの径は1.3mを測る。

#### 13号土壌（第37図 図版12）

5号住居跡を切る。9.5×1.6m以上の長方形プランを呈す。床面は平坦で、上面から20～25cmの深さである。床面から10cmほど浮いて甕（第40図10）が出土した。床面からは4個のピットを検出したが、いずれも5～10cmの深さである。

#### 14号土壌（第36図 図版12）

5号・7号住居跡、15号・19号土壌に囲まれた位置で検出した。径1.35mの正円形に近いプラ

ンを呈す。壁体は袋状を呈し、上面から床面まで約60cmを測る。床面中央には深さ5cm、径60～70cmの略隋円形ピットがある。

#### 15号土壌（第37図 図版13）

5号住居跡と7号住居跡の間で検出された。1.25×0.75mの長方形プランを呈し、床面までの深さ63cmを測る。壁体はやや外傾するものの垂直に近い。

#### 16号土壌（第36図 図版13）

3号住居跡の中で検出された。2.35×2.25mを測る不整形円形を呈し、北西部に段をもつ。床面は平担である。

#### 17号土壌（第36図 図版13）

8号住居跡の内検出された。径1.8～2.1mの円形プランを呈し、床面まで約30cmを測る。床面は平担で、壁体は全体にやや外傾するが、垂直に立つ部分もみられる。

#### 18号土壌（第37図 図版13）

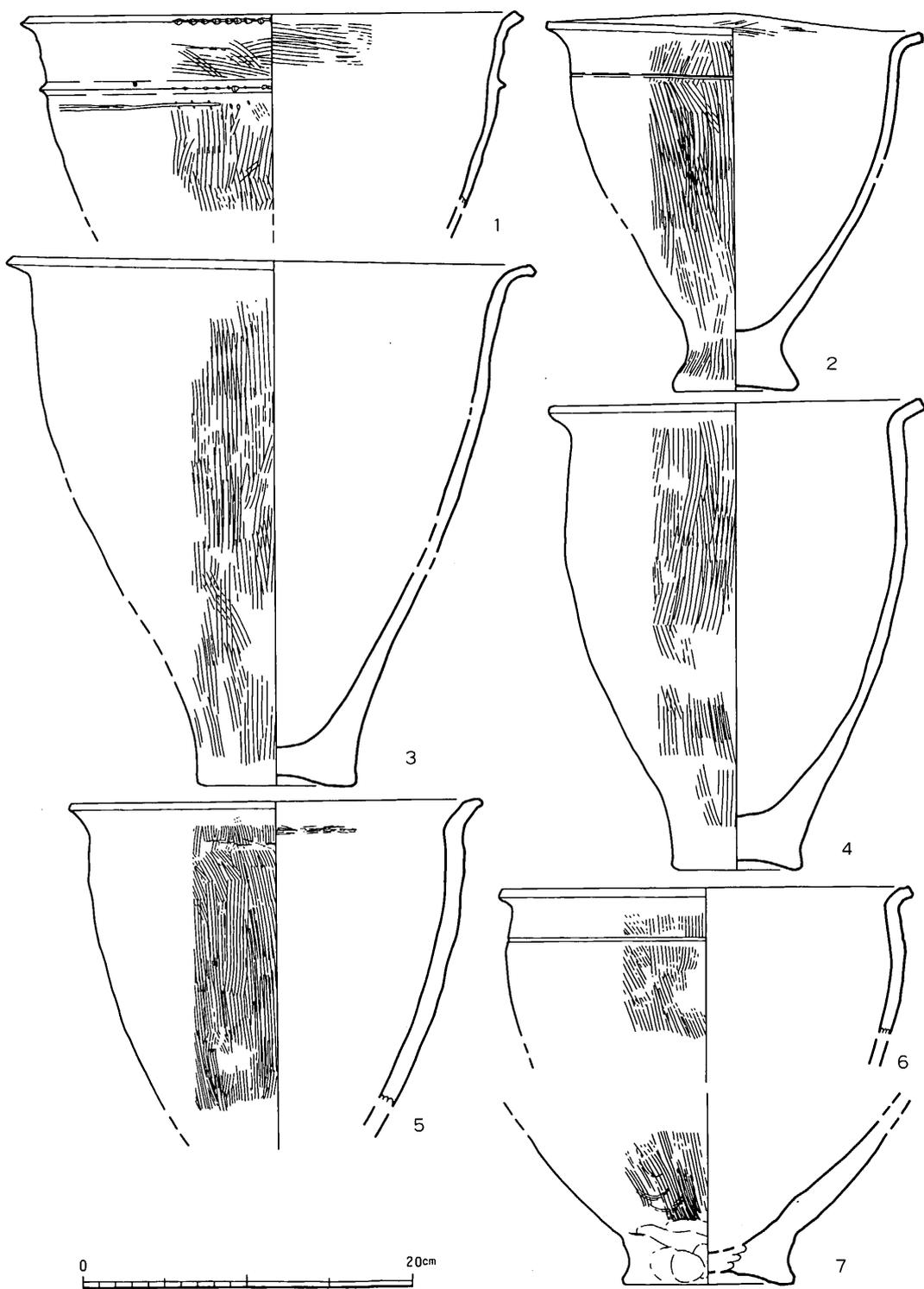
7～11号土壌の一角で検出された。0.9×1.5mを測る略長方形プランを呈す。中央部から北側にかけて上面から深さ105cmほどの所に平担面が広がり、南側は更に5cmほど深くなる。

#### 19号土壌（第36図）

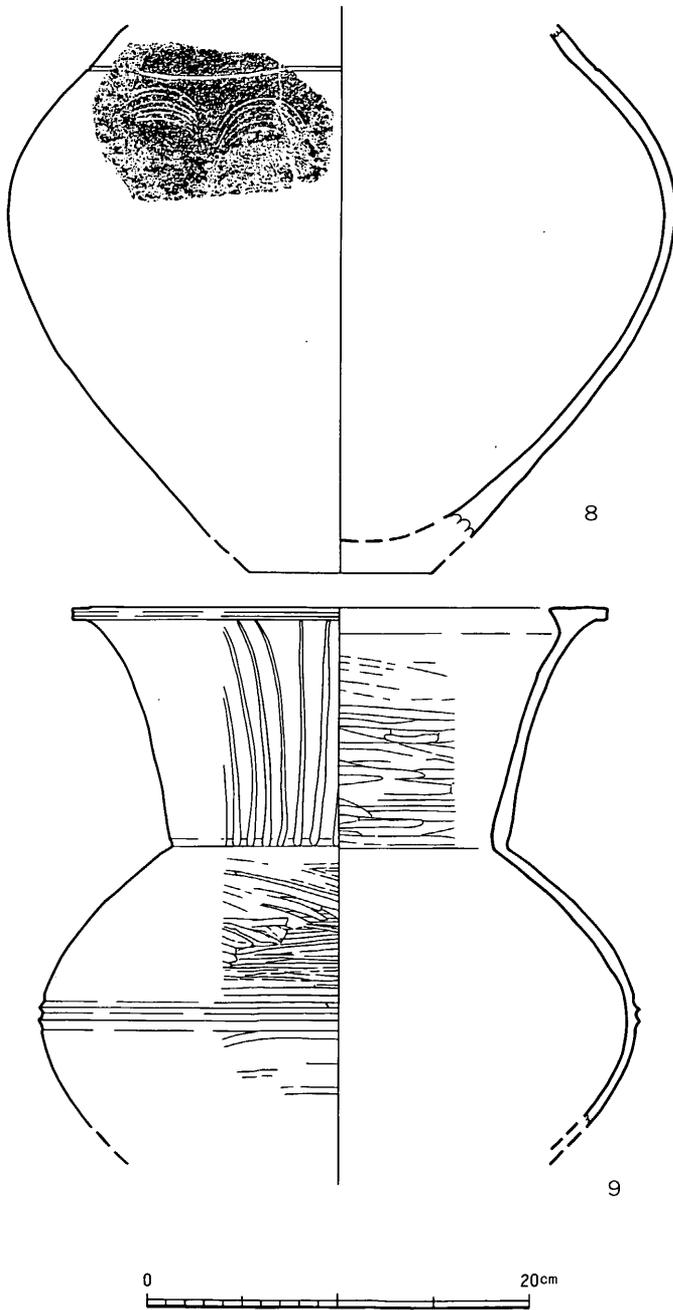
6号土壌に切られる。径2.6mほどの正円形に近いプランを呈す。床面は平担で、深さは上面から20cmほどである。壁体の残りは悪いが、残存部は大きく開く。

#### 遺物（第38～40図 図版22・23）

1は2号土壌出土の甕である。口縁部は如意形を呈し、口径30.4cmを測る。口縁下に一条の凸帯がめぐり、その下に貼付位置目印の沈線が認められる。口唇部下端と凸帯にはヘラによる刻目が施される。口唇部周辺と凸帯部分はヨコナデされ、外面と内面口縁部は刷毛目が施される。2～6は5号土壌出土の甕である。2は口径22.9cm、器高22.3cmを測る。口縁部は強い如意形を呈し、口縁下に一条の沈線がめぐり、台形状に張る厚い底部にかけて、胴部は浅いカーブをもって下る。口唇部周辺はヨコナデされ、外面と口縁部内面は刷毛目が施される。3は口径32.1cm、器高32.1cmを測る。口縁部は2と同様に強い如意形を呈す。胴部はやや直線的で、底部は上げ底をなす。4は口径22.8cm、5は器高28.6cmを測る。口縁部は外上方に折れるように短かく外傾する。胴部はやや張り気味で、底部は厚く、上げ底をなす。口縁部はヨコナデされ、外面は刷毛目が施される。胴部上半の一部に赤色がみられ、中央部の器面が剝離する。5は口径24.8cmを測る。口縁部は4と同様に折れるように外傾し、胴部は若干の張りを持つ。器壁は厚く、下位に赤変がみられる。調整は口唇部周辺はヨコナデ、外面と内面口縁部は刷毛目が施され、さらには口縁部はその後ヨコナデされる。内面胴部は器面が黒色化し、粗れる。6は口径25cmを測り、如意形口縁を呈す。口縁下に沈線がめぐり、胴部上位にやや強目の張りをもつ。外面は刷毛目が施され、残存部のほぼ全体にススが付着する。口縁部はヨコナデされる

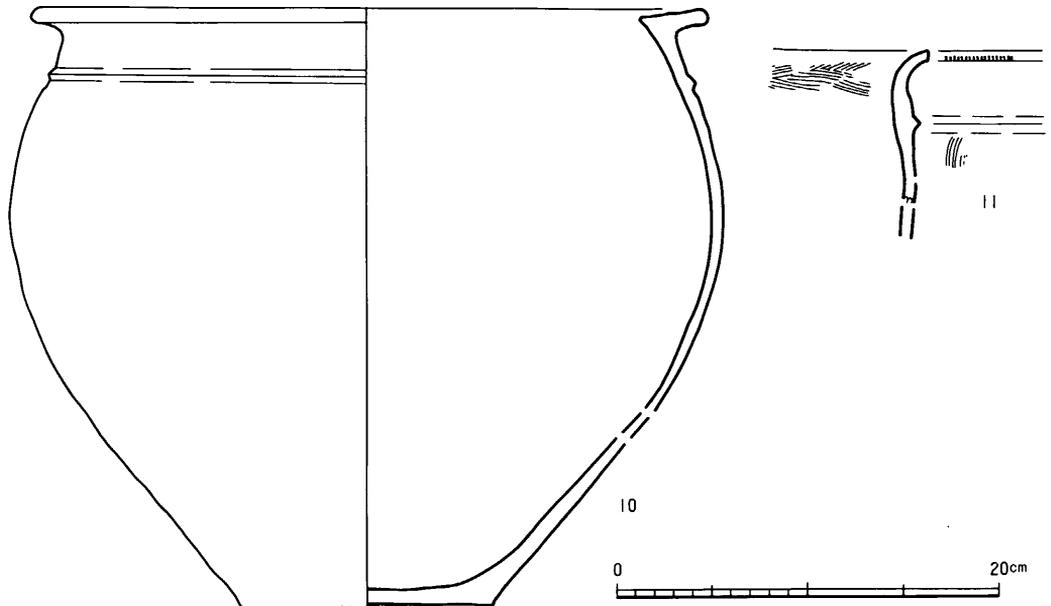


第38図 土壙出土土器実測図（縮尺1/4）



第39図 土壌出土土器実測図 (縮尺1/4)

が、口縁部外面は刷毛後ヨコナデされる。7は同じく5号土壌から出土した底部周辺の破片で、底径10.4cmを測る。底部は上げ底を呈し、指頭痕が多い。胴部との境は強くヨコナデされる。胴部外面は刷毛目、内面は剝落、磨滅している。8は6号土壌から出土した壺である。口頸部と底部を欠失する。頸部と胴部の境は段を有し、頸部下半は内傾する。胴部上位に強い張りを持ち、肩部に貝殻腹縁による連弧文をもつ。9は8号土壌から出土した壺である。口径27.8cm、胴部最大径31.4cmを測る。平担口縁をなすもので、胴部最大径位に2条の三角凸帯をめぐらす。頸部外面にはヘラによる暗文が全体に施され、胴部外面と頸部内面は横方向にミガキが施される。口縁部と胴部内面にはヨコナデされる。10・11は13号土壌出土の甕である。10は口径35.3cm、器高31.6cm、胴部最大径37.2cmを測る。口縁は逆L字



第40図 土壙出土土器実測図（縮尺1/4）

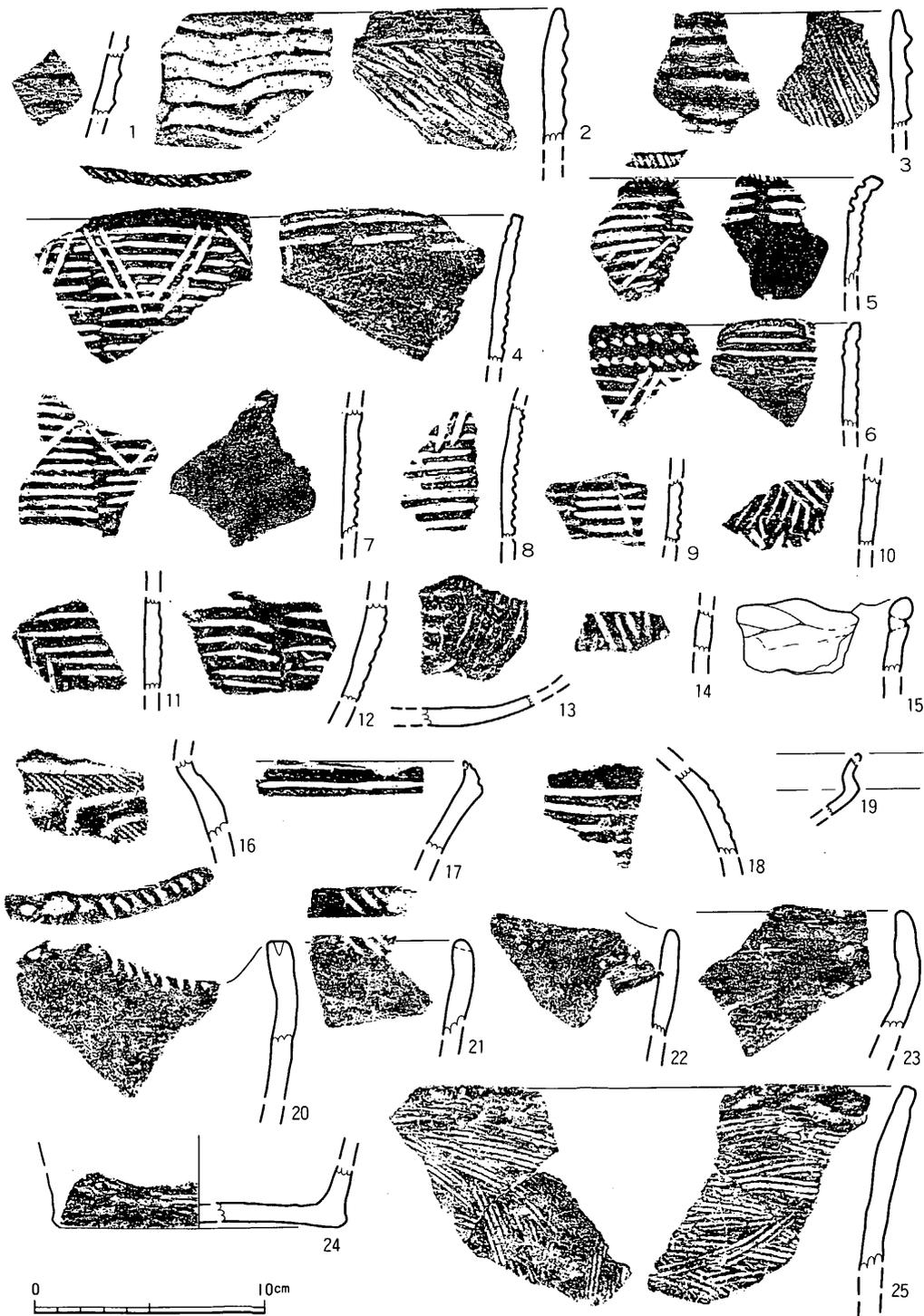
状を呈し、平坦部は端部が高い。全体に磨滅が著しいが、口縁部はヨコナデされ、外面胴部には刷毛目が残る。11は如意形口縁を呈す口縁部小片である。口唇部下段に双歯状の工具による刻み目が施され、口縁下の三角凸帯以下と口縁内面に刷毛目が残る。下位に赤変がみられ、口縁下にはススが僅かに付着する。

## 6 縄文式土器（第40図）

1～3は轟B式土器である。1は上下をナデ上げたような細い貼付凸帯である。2は波状にあまい断面三角形の凸帯を貼付する。3は断面カマボコ状に近い凸帯を貼付する。4～13は曾畑式土器で、いずれも文様モチーフが簡略化されたものである。14は小片のため明確でないが阿高系土器末期のものと思われる。15は口縁部に粘土を擦ったものが貼付された北久根式土器である。16は鐘ヶ崎式土器。17・18は西平式土器で17の口縁部下端には縄文が施される。磨滅が著しい。20～23は粗製土器である。20は頂部に13×16mmの穴を穿ち、その両側にも小穴をもつ。頂部から下る口唇部には斜めに刻みが施される。21も20と同様の刻み目を施す。24は平底の底部、25は器面に貝殻条痕を内外面に施す。

## 7 石器（第42図）

出土した石器は、点を越える。このうち図示したものは21点で、全て住居跡、土壙、ピット

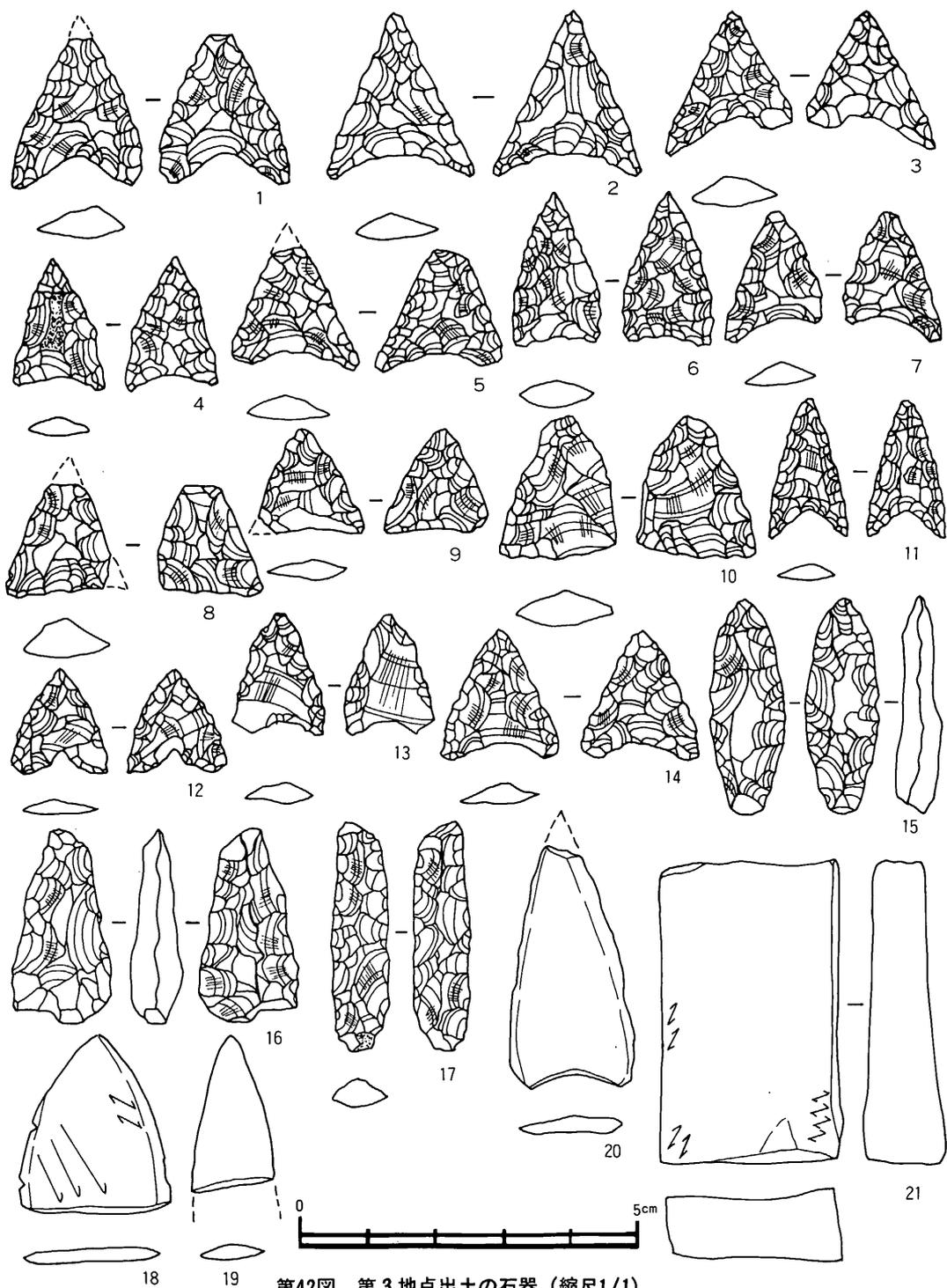


第41図 第3地点出土の縄文土器 (縮尺1/3)

の遺構に伴うものに限定した。この第3地点では縄文の包含層も検出されたが、今回は未報告である。包含層内の石器としては、サイド・ブレイド、剥片鏃など縄文時代後・晩期に出土を見るものが数を占めている。包含層は12号住居跡を中心としたところのみである。あるいは、なんらかの遺構が存在した可能性をもつが、弥生時代の住居跡及び甕棺墓の造営のため削平され、包含層としてのみ遺存しているのであろう。石器の素材は圧倒的にサヌカイト製が占める。

(サヌカイトも安山岩質のものとして2種認められるようである。)中には姫島産の黒曜石の剥片2点の出土もあるが製品として認められるものはない。このように後・晩期の石器特徴をもつものの、石器素材としてはサヌカイト製が多いという特徴をもつ。図示した石器の中にも明らかに縄文時代の所産と思われるものも少ない。また近在の第4地点でも縄文時代の土器、石器が出土している。このように、この地区には縄文時代の遺構が存在する可能性を示唆しているものとして興味深い。圃場整備に先行して調査も開始されているので、縄文期の遺構や遺跡の広がり方に期待したい。以下1～21の石器について述べる。

1はピット45内出土の石鏃である。素材はサヌカイトで先端部は欠損している。広義の剥片鏃。2は2号住居跡出土。1同様広義の剥片鏃である。基部の挟りは浅く二等辺三角形を呈し、パティナが進んだサヌカイト製である。3はサヌカイト製の石鏃、一方の脚部は欠損し基部の挟りは、ふかく二等辺三角形を呈する。10号甕棺墓の上甕埋土より出土。4は素材の表皮を残したサヌカイト製の石鏃で基部の挟りは浅い。ピット38より出土。5は先端部を欠損した石鏃で挟りは浅く断面は凸レンズ状を呈する。3号住居跡出土。6は11号土壌より出土。4と同様なつくりをもつ。素材はやはりサヌカイト製である。7は広義の剥片鏃。脚部は左右対称とならず不ぞろいである。3号住居跡出土。8は素材に厚手の剥片を使用した石鏃。基部の挟りは、ほとんどない先端部の折れたサヌカイト製である。3住居跡出土。9は8と同様に3号住居跡出土。広義のサヌカイト製剥片鏃である。10もかなり厚手の剥片を素材としている。刃部の細部加工は全面に施さず、基部と一側辺のみである。11はパティナの進んだサヌカイト製。基部の挟りは深い。広義の剥片鏃である。12・13・14も11と同様に広義の剥片鏃。13の石材は安山岩質の原材を用いている。11・13は2号住居跡。12はピット45出土。15・16・17は素材の打面部をいずれも残す柳葉型および尖頭状石器である。15・16は3号住居跡、17はピット122出土。18～20は磨製石鏃。18と20は頁岩製、19は安山岩製である。19の基部側は欠損しているが、全体的に丁寧な研磨で研きすまされている。20はローリングをうけ磨耗が著しい。21は粘板岩製の小形の砥石である。5面の砥石面をもつ。一面は他の面にくらべかなり使用されているために断面凹みをもつ。18は5号土壌、19は3号住居跡、20は10号土壌、21は2号住居跡出土である。



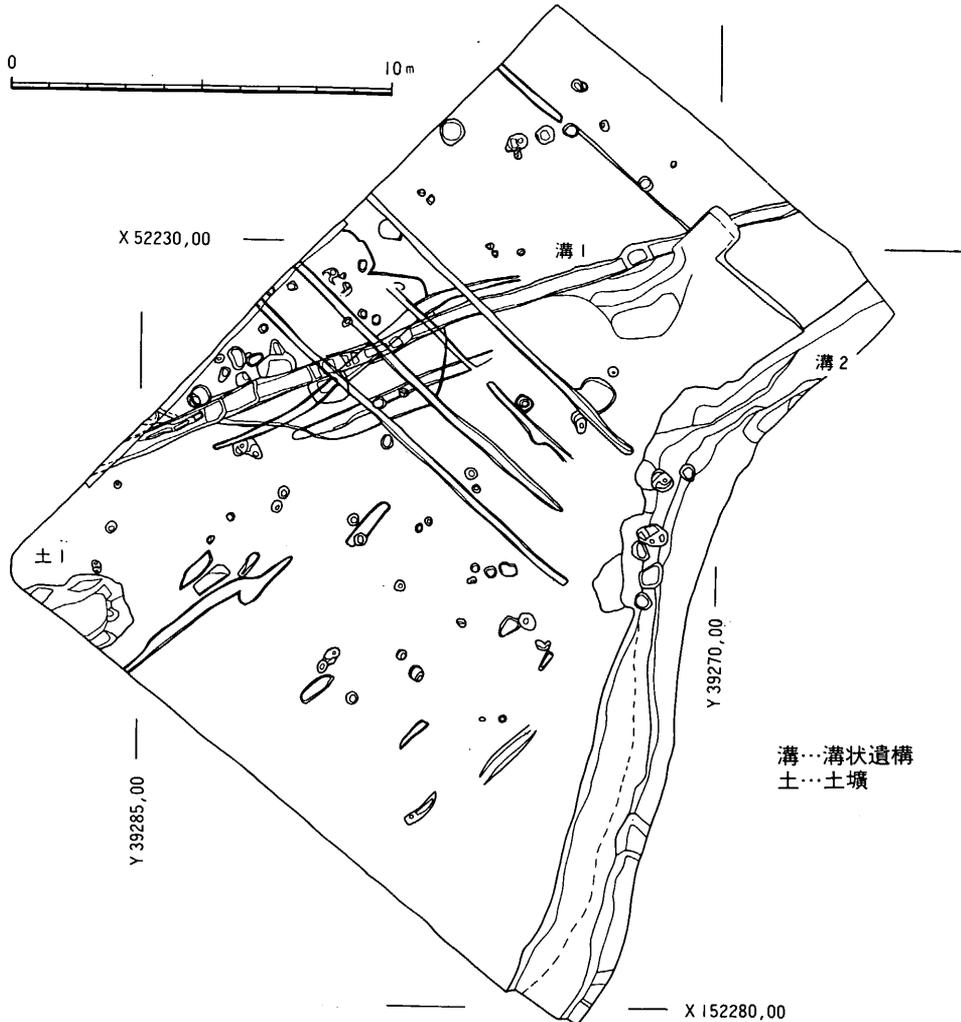
第42図 第3地点出土の石器 (縮尺1/1)

## IV 第4地点の調査

### 1 遺構 (第43図)

第4地点は400m<sup>2</sup>を発掘調査した。東側は段落ちとなっており、この部分からは遺構は検出されなかった。上段の調査では耕作土直下が遺構面となっており、畝跡であろうか耕作土が詰った溝状遺構が多く検出された。その外に溝状遺構2条、土壇1基、ピット多数を検出した。

1号溝は調査区北部で検出されたもので、東北東から西南西に走る。幅は40~50cm、深さ6



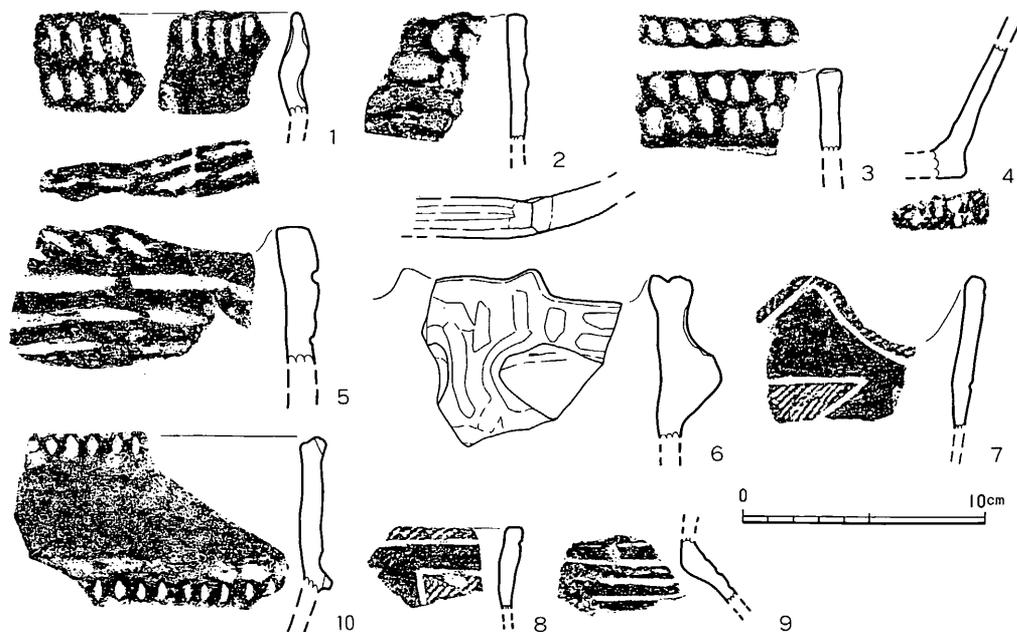
第43図 第4地点遺構配置図 (縮尺1/200)

～20cmを測り、西南西側に向うにつれ低くなる。北東側で1号溝と平行して走る2号溝は、その途中から方向を南よりに変える。幅は段落ち部にかかるため不明であるが、深さは遺構面から13～30cmを測る。1号土壌は調査区西端に位置し、調査区外へ延びるため全容は不明である。深さは27cmまで測ることができ、幅は約2mほどである。また調査区北西には調査区外へ延びる落ち込みがある。遺構としての形状をなすものかどうかは現在の段階では確認しえなかった。幅5～6m、深さは20cmほどを確認しえた。

## 2 出土土器 (第44図)

1は口縁部内外面にヘラ状工具で刺突を施したもので、内面に1段、外面は2段以上が確認された。2・3は凹点文をもつ口縁部である。2は口唇部は波状を呈し、ナデによる浅く太い凹線が凹点部まで延びる。凹点はCタイプ<sup>註</sup>のものである。3は口唇部が浅く波状を呈す。外面に2段の凹点がめぐり、その下に凹縁が認められる。凹点は2と同様であるが、中央の粘土のたまりが右端に寄る。4は底部に脊椎骨の圧痕が残るものである。5は口縁部にあまもりボン状の突起をもつ。全体に短い単位の凹縁で構成される文様である。6も口縁部にリボン状の突起をもつ、この下にブリッジ状の突起を貼付するが、中は詰っている。文様は凹線で構成される。2～6はいずれも阿高系土器の範中に収まるものであろう。7・8は中津式土器で、9は三万田式土器である。10は夜臼式土器で、器面は磨滅する。

註、田中良之「中期・阿高系土器の研究」1979 古文化談叢6の凹点分類による。



第44図 第4地点出土土器実測図 (縮尺1/3)

## V まとめ

今回の調査では第3地点から弥生時代の住居跡等の生活関連遺跡と甕棺墓を中心とする墓地、それに古墳時代の住居跡が検出され、第4地点では溝状遺構と土壌が検出された。また両地点を通じて縄文式土器が出土した。まず17地点の調査をまとめてみる。

### 弥生時代の生活遺構について

円形プランを呈す住居跡は、中心に大きめのピットをもち、その両脇に支柱穴をもつ。さらに柱穴がめぐる形態をとるが、その規模は径6～7mの4号・5号・8号住居跡と最大径11mを越える3号住居跡があり性格の違いを感じさせる。次に時期についてみると3号住居跡出土の土器はいずれも小片であり、第13図8のように前期末～中期初頭に上るものや、同13のように前期も古い段階に下る遺物も僅かにみられるが、ほとんどは前期後葉の遺物である。また俗にメンコと呼ばれる土器を再利用した円盤状土製品が6コ出土する。4号住居跡からの出土遺物も少なく、明確にしがたいが、ほぼ前期後葉～末に位置づけられよう。5号・8号住居跡からは時期を確定しえる遺物が出土しなかったが、遺構の形状から3号や4号住居跡と同時期または近い時期のものとして推測される。また2号・11号・12号・14号土壌は貯蔵穴で、2号土壌からは前期後葉の遺物が出土する。5号土壌の性格は明確でないが、中期初頭に位置づけられる甕が多く出土した。9号土壌からは中期前葉の壺が出土し、時期的に墓地との関係が強いものかもしれない。

### 弥生時代の墓地

墓地は甕棺墓と木棺墓により構成され、3つのグループに分けられる。まず、24号・25号甕棺墓と2号木棺墓を中心とするグループ(Aグループ)。13号・14号甕棺墓や1号・3号木棺墓を中心とするグループ(Bグループ)。9号～12号・15号・16号甕棺墓を中心とするグループ(Cグループ)である。第2表の区分にしたがい(上下甕で時期が異なるものは新しい時期の甕とする)、グループの配列をみると、Aグループ=I期、Bグループ=II期、Cグループ=II期～III期に当り、Cグループでは北側の2基がII期、南側の4基がIII期に2分する。調査した面積が小範囲であるため墓地構成の全容は伺い知れないが、一方向から規則的な埋置やグループ構成はなされていないようであり、この時期に盛興する永岡遺跡<sup>註1</sup>に代表される二列埋置の墓地構成と形態を異にする

### 古墳時代の住居跡

方形プランを呈す住居跡で、全容を確認する事ができたのは2号住居跡のみである。出土遺物は土師器碗とミニチュア土器で時期を確定しがたいが、カマドを持っている所から5世紀代のものであろう。7号住居跡出土の土器は古墳時代初頭に比定しえるものである。本報告では

図示できなかったが、調査区西部遺構面上の黒色土層（遺物包含層）から古式土師器片なども出土する事から、近くに4世紀代の遺構も所在する可能性がある。

第4地点は遺物の出土が極めて少なく、それぞれの遺構の時期を確定するに至らなかった。しかし、包土中からは縄文式土器が出土するし、第3地点出土の縄文土器と合わせて前節の説明を補足しよう。第3地点の曾畑式土器はほぼ同一時期に収まるものであるが、10～12は胎土に滑石を含まない。阿高系土器とした第3地点の9や第4地点の5・6は坂の下（I・II）<sup>註2</sup>式の範疇に収まるものである。また第3地点20・21は北久根式に系譜をたどりえるものであろう。

註

註1 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集 1976、第5集 1977 福岡県教育委員会

永岡遺跡 筑紫野市文化財調査報告書第6集 1981 筑紫野市教育委員会

註2 田中良之「中期・阿高系土器の研究」1979 古文化談叢6

第1表 甕棺計測表

番号	上 甕			下 甕			対象	分類			
	器種	法量 (cm)		色調	器種	法量 (cm)		上	下		
		口径	器高			口径				器高	
K-1	甕	45.6	52.0	黄褐色	甕	42.6	54.15	淡黄褐色	中形	I	I
K-2	甕	27.8	35.0	淡黄褐色	甕	31.0	39.4	黄褐色	小児	II	II
K-3	甕	29.1	35.1	黄褐色	甕	31.0	36.0	橙黄色	小児	III	III
K-4	甕	30.1	35.6	淡黄褐色	甕	31.6	37.55	淡黄褐色	小児	III	III
K-5	甕	32.1	35.2	淡黄褐色	甕	31.55	—	淡黄褐色	小児	II	III
K-6	甕	37.45	37.95	淡黄褐色	甕	33.3	—	黄褐色	小児	II	III
K-7	甕	31.8	36.9	黄褐色	甕	32.5	39.5	暗褐色	小児	III	III
K-8	甕	30.6	—	黄褐色	甕	—	—	—	小児	III	—
K-9	甕	69.4~68.5	87.2	赤褐色	甕	72.0~66.5	93.6	黄褐色	成人	IIIb	IIIb
K-10	甕	65.7	83.6	赤褐色	甕	68.0	86.2	淡赤褐色	成人	IIIa	IIIa
K-11	甕	63.8	87.4	赤褐色	甕	71.1	94.7	赤褐色	成人	IIIa	IIIa
K-12	甕	63.0	86.6	黄褐色	甕	68.0~62.0	85.2	黄褐色	成人	IIIa	IIIb
K-13	甕	45.0~53.0	64.0~66.0	黄褐色	甕	68.8~64.0	黄褐色	成人	—	IIIa	—
K-14	甕	65.4	82.6	黄褐色	甕	65.0	87.7	黄褐色	成人	I	IIIa
K-15	甕	67.4	80.6	黄褐色	甕	69.2	85.4	赤褐色	成人	IIIa	IIIb
K-16	甕	67.2	87.2	赤褐色	甕	68.4	87.2	赤褐色	成人	IIIb	IIIb
K-17	甕	33.4	38.4	黄褐色	甕	32.8	39.6	黄褐色	小児	II	II
K-18	甕	49.1	56.9	黄褐色	甕	42.5	56.85	暗褐色	中形	I	I
K-19	甕	29.0	35.3	淡黄褐色	甕	29.7	36.2	淡黄褐色	小児	III	II
K-20	甕	32.8	40.6	淡黄褐色	甕	37.7	38.4	黄褐色	小児	III	III
K-21	甕	38.0	45.0	淡赤褐色	甕	37.7	47.0	淡赤褐色	小児	II	II
K-22	甕	28.8	35.6	淡赤褐色	甕	39.2	46.5	黄褐色	小児	II	II
K-23	甕	29.2	33.4	黄褐色	甕	28.5	—	淡黄褐色	小児	I	I
K-24	甕	65.0	90.0	黄褐色	甕	62.0	80.8	黄褐色	成人	II	II
K-25	甕	65.0	80.6	黄褐色	甕	64.0	82.4	黄褐色	成人	II	II
K-26	甕	30.5	—	黄褐色	甕	—	—	—	小児	—	—

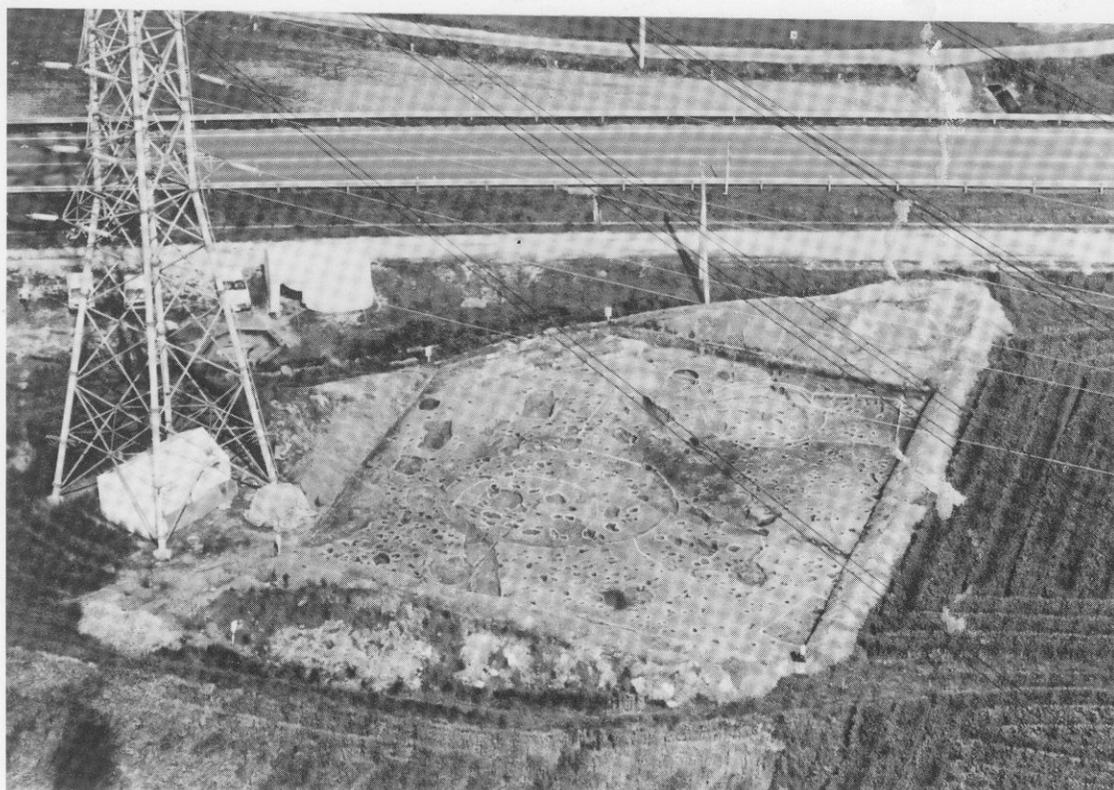
第2表 甕棺時期区分表

時期	中期中頭		中期中葉		
	I期	II期	III期	IIIa	IIIb
大形甕棺	I類	II類	IIIa類	IIIb類	
中形甕棺	I類				
小形甕棺	I類	II類	III類		

# 圖 版

## 图 版 目 次

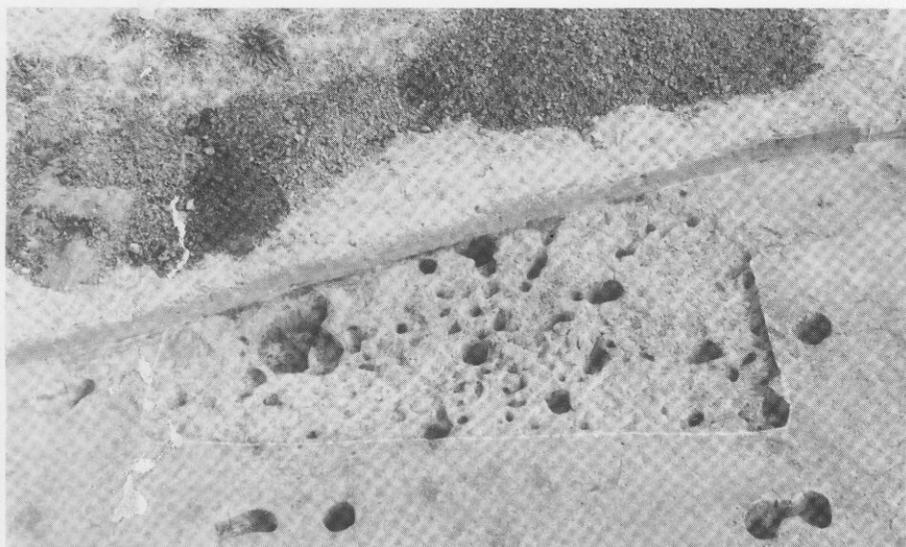
- |   |   |
|---|---|
| <p>图版 1 第 3 地点全景 / 第 4 地点全景</p> <p>图版 2 1 号住居迹 / 2 号住居迹 / 3 号住居迹</p> <p>图版 3 4 号住居迹 / 5 号住居迹 / 7 号住居迹</p> <p>图版 4 1 号甕棺墓 / 2 号甕棺墓 / 14 号甕棺墓 / 5 号甕棺墓</p> <p>图版 5 6 号甕棺墓 / 7 号甕棺墓 / 9 号甕棺墓 / 10 号甕棺墓</p> <p>图版 6 11 号甕棺墓 / 12 号 · 15 号甕棺墓 / 13 号甕棺墓 / 14 号甕棺墓</p> <p>图版 7 15 号甕棺墓 / 17 号甕棺墓 / 18 号甕棺墓 / 19 号甕棺墓</p> <p>图版 8 20 号甕棺墓 / 21 号甕棺墓 / 24 号甕棺墓 / 25 号甕棺墓</p> <p>图版 9 1 号木棺墓 / 2 号木棺墓 / 3 号木棺墓</p> <p>图版 10 2 号土壙 / 3 号土壙 / 4 号土壙 / 5 号土壙</p> <p>图版 11 6 号土壙 / 7 号土壙 / 8 号土壙 / 9 号土壙</p> <p>图版 12 10 号土壙 / 11 号土壙 / 13 号土壙 / 14 号土壙</p> <p>图版 13 15 号土壙 / 16 号土壙 / 17 号土壙 / 18 号土壙</p> <p>图版 14 K19 上 · K19 下 / K10 上 · K10 下 / K11 上 · K11 下</p> <p>图版 15 K12 上 · K12 下 / K13 上 · K13 下 / K14 上 · K14 下</p> | <p>图版 16 K15 上 · K15 下 / K16 上 · K16 下 / K24 上 · K24 下</p> <p>图版 17 K25 上 · K25 下 / K1 上 · K1 下 / K18 上 / · 18 下</p> <p>图版 18 K2 上 · K2 下 / K3 上 · K3 下 / K4 上 · K4 下</p> <p>图版 19 K5 上 · K5 下 / K6 上 · K6 下 / K7 上 · K7 下</p> <p>图版 20 K17 上 · K17 下 / K19 上 · K19 下 / K20 上 · K20 下</p> <p>图版 21 K21 上 · K21 下 / K23 上 · K23 下 / K22 上 / K26 上</p> <p>图版 22—1 2 号住居迹出土土器 (第 13 图 4)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 2 号住居迹出土土器 (第 13 图 1)</p> <p style="padding-left: 2em;">3 2 号住居迹出土土器 (第 13 图 5)</p> <p style="padding-left: 2em;">4 7 号住居迹出土土器 (第 13 图 17)</p> <p style="padding-left: 2em;">5 7 号住居迹出土土器 (第 13 图 16)</p> <p style="padding-left: 2em;">6 5 号土壙出土土器 (第 38 图 2)</p> <p style="padding-left: 2em;">7 5 号土壙出土土器 (第 38 图 3)</p> <p>图版 23—1 5 号土壙出土土器 (第 38 图 4)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 6 号土壙出土土器 (第 39 图 8)</p> <p style="padding-left: 2em;">3 13 号土壙出土土器 (第 40 图 10)</p> |
|---|---|



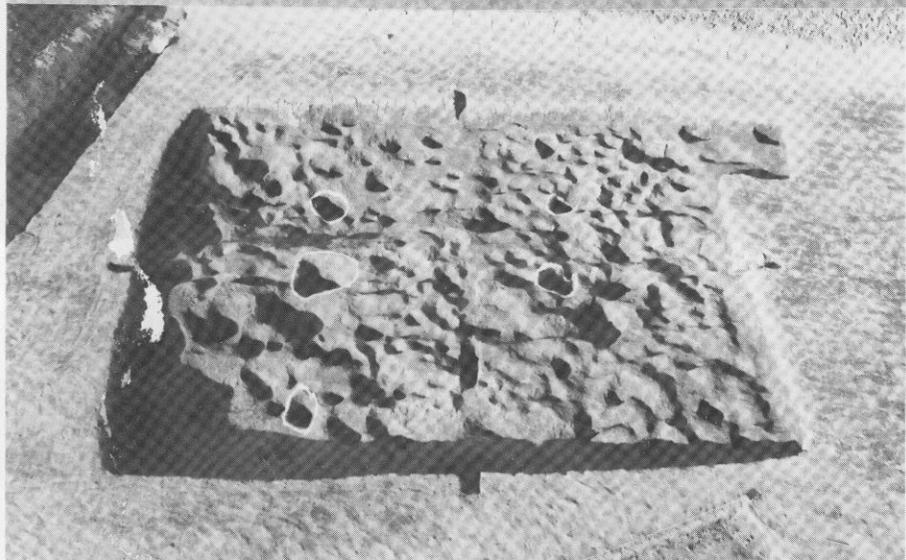
第3地点全景



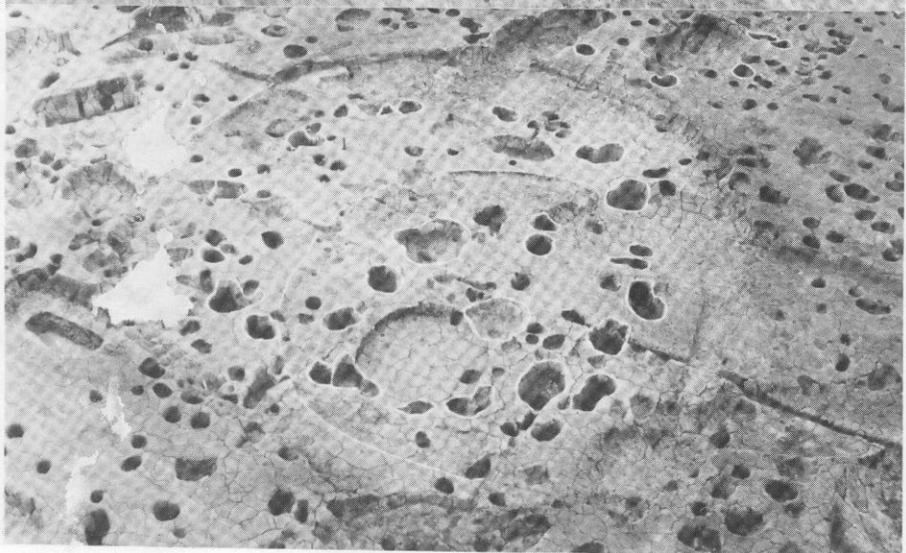
第4地点全景



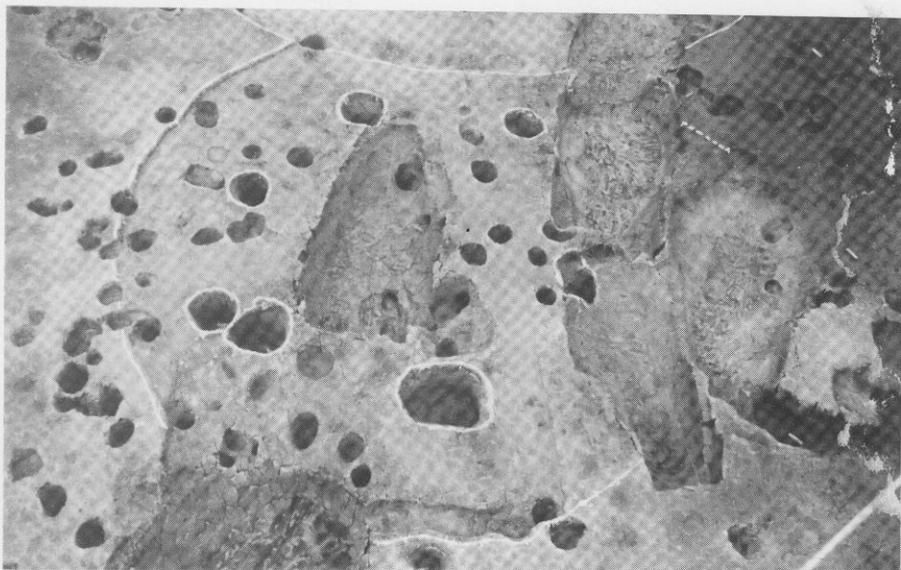
1号住居跡



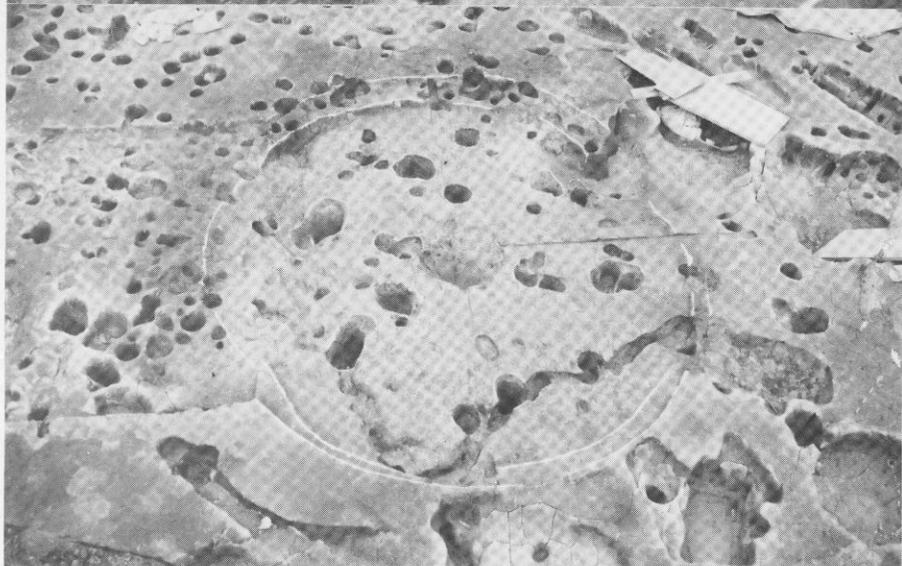
2号住居跡



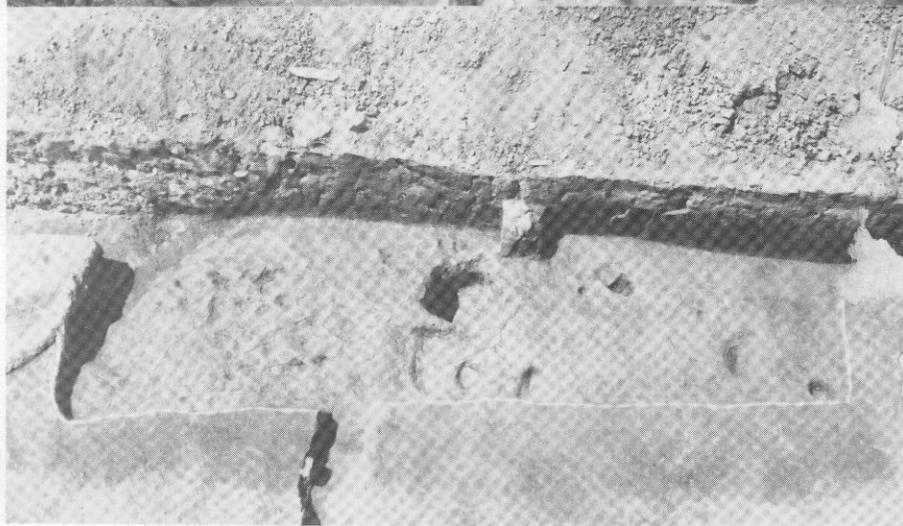
3号住居跡



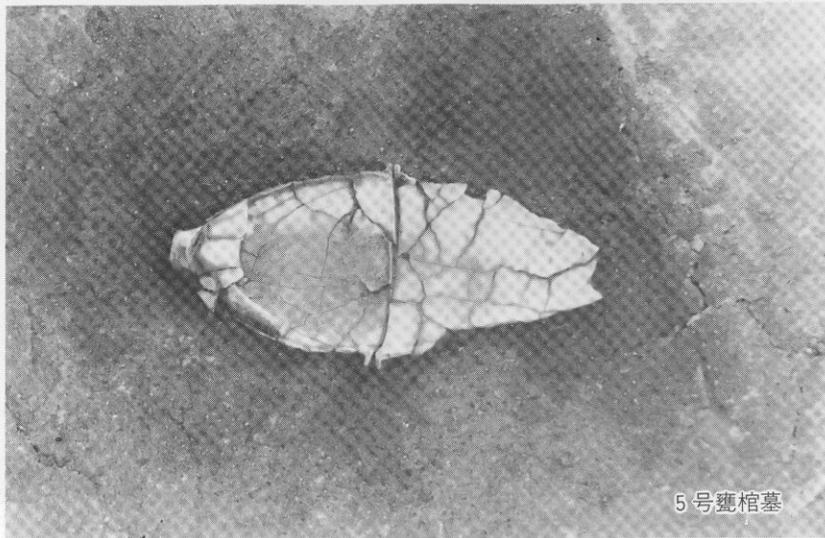
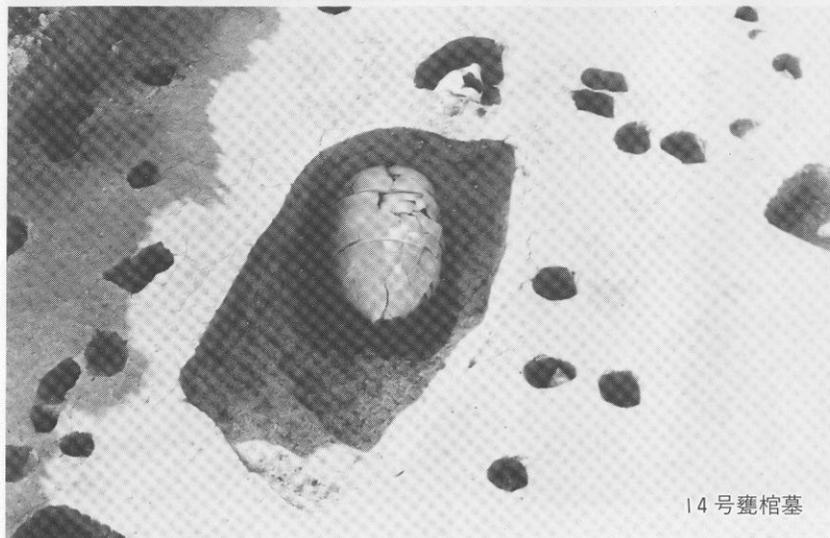
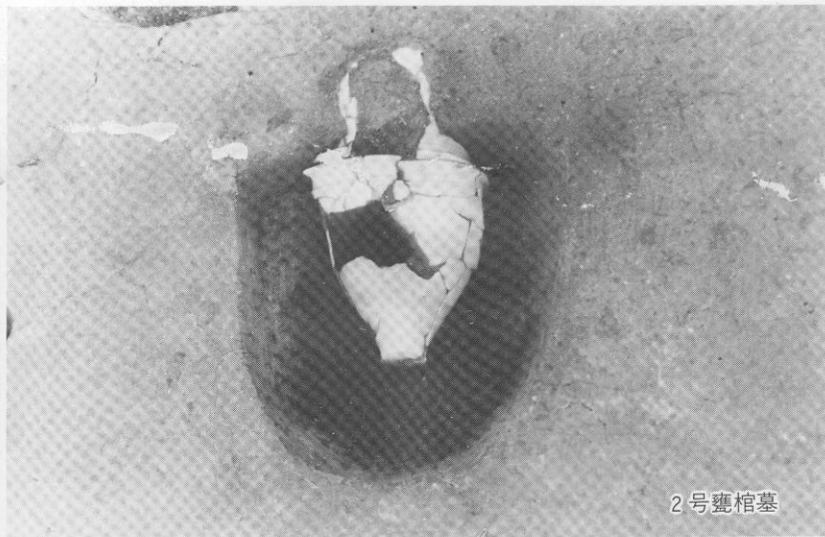
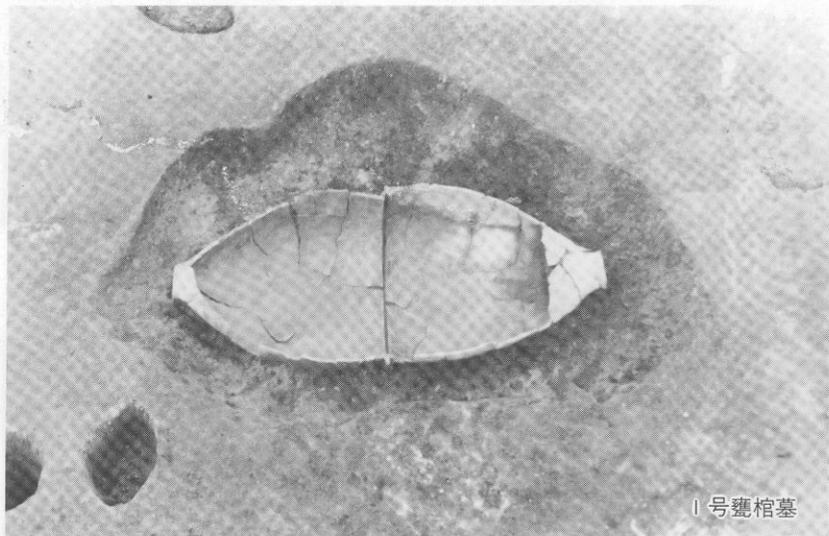
4号住居跡

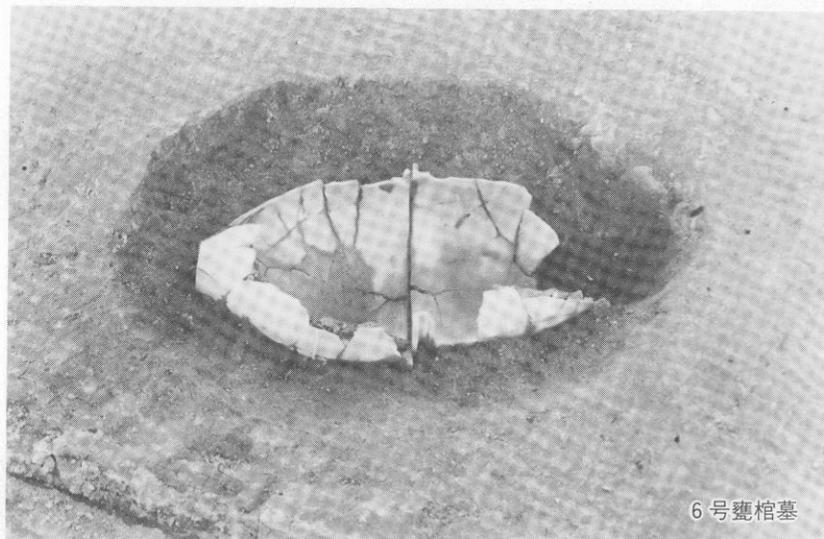


5号住居跡

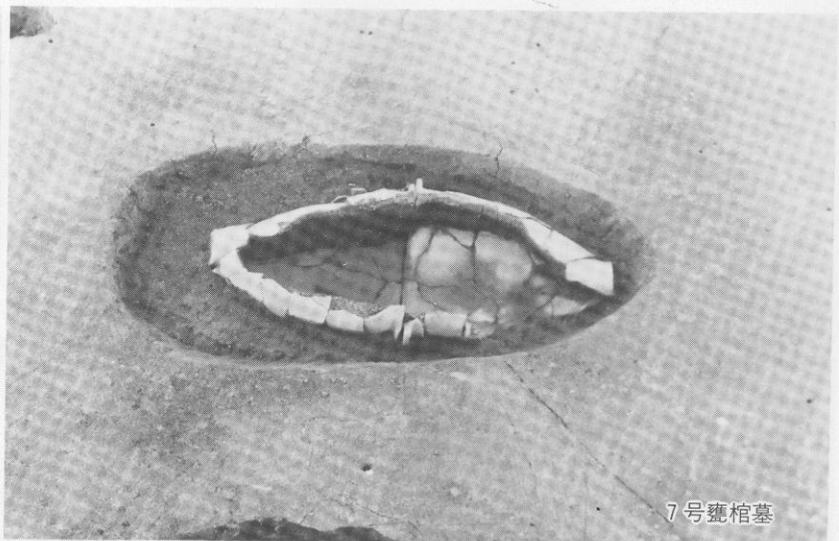


7号住居跡

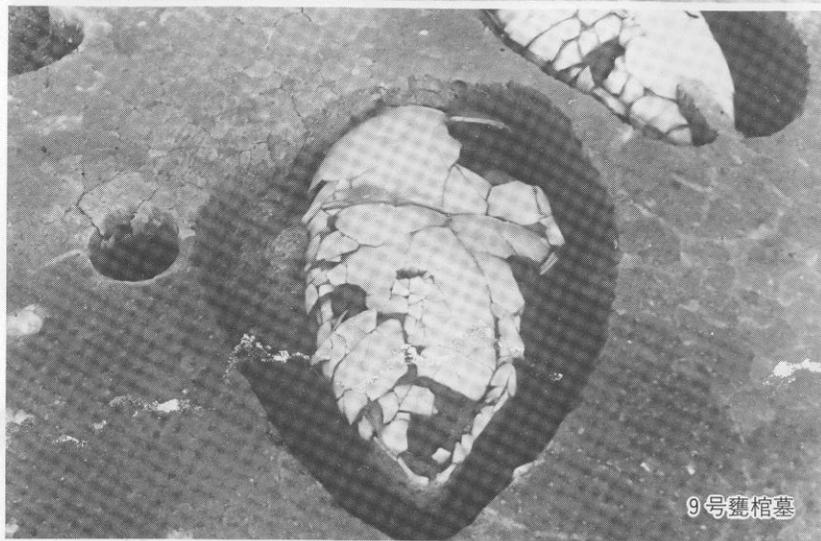




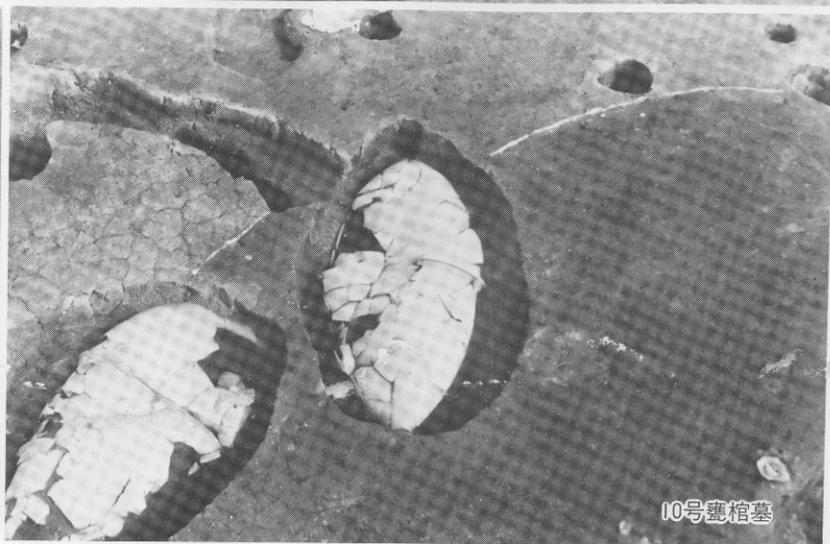
6号甕棺墓



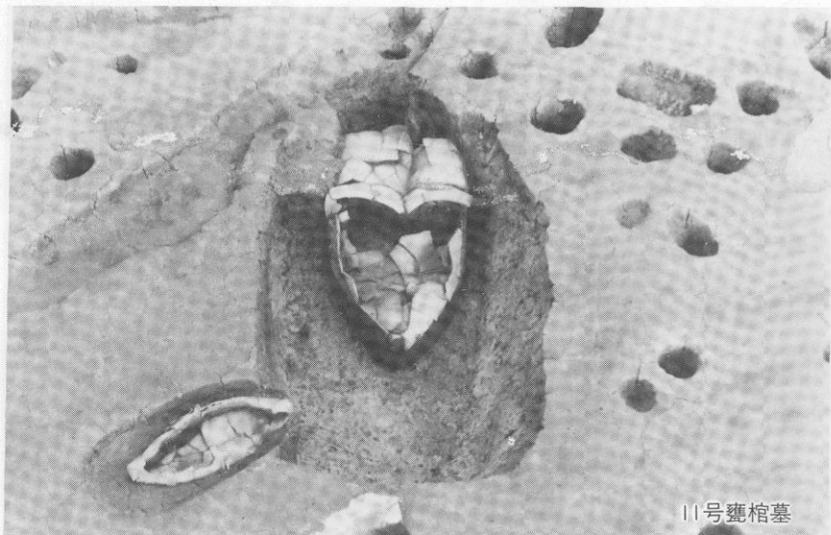
7号甕棺墓



9号甕棺墓



10号甕棺墓



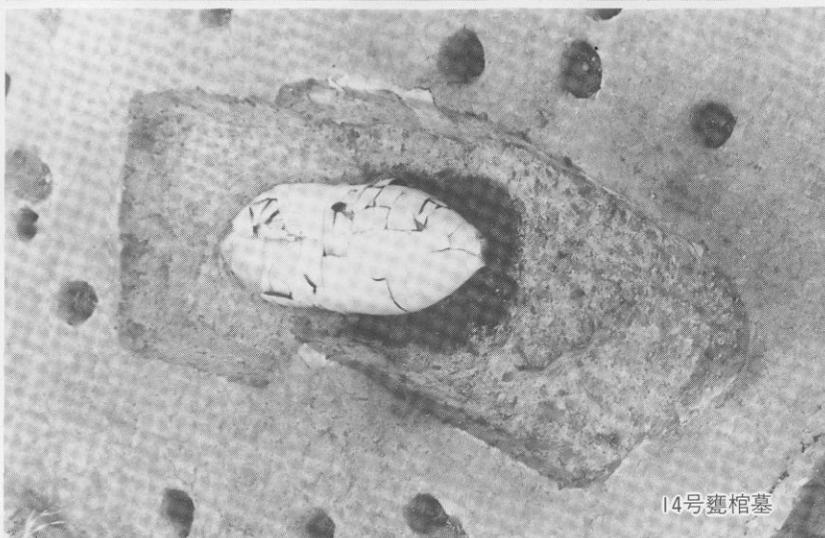
11号甕棺墓



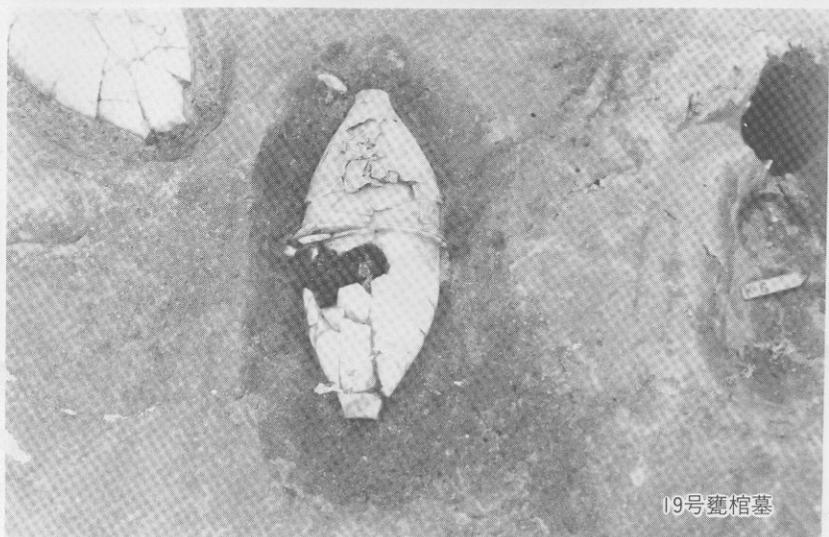
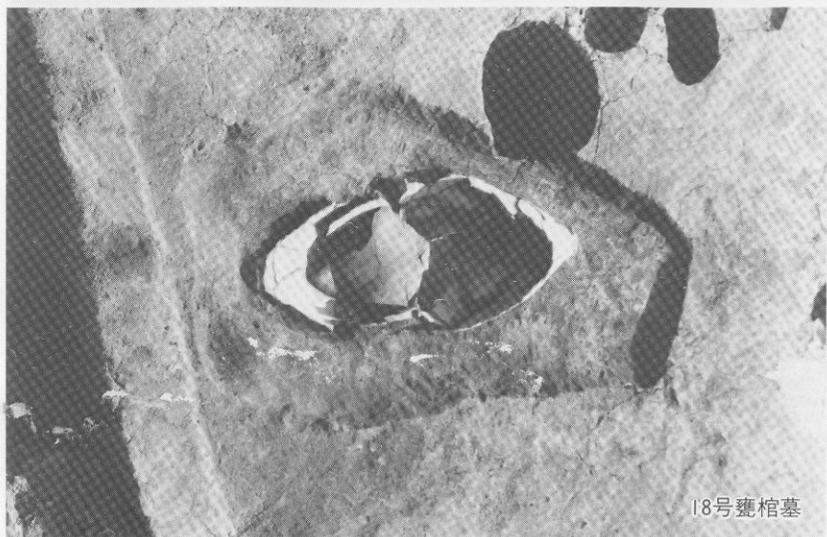
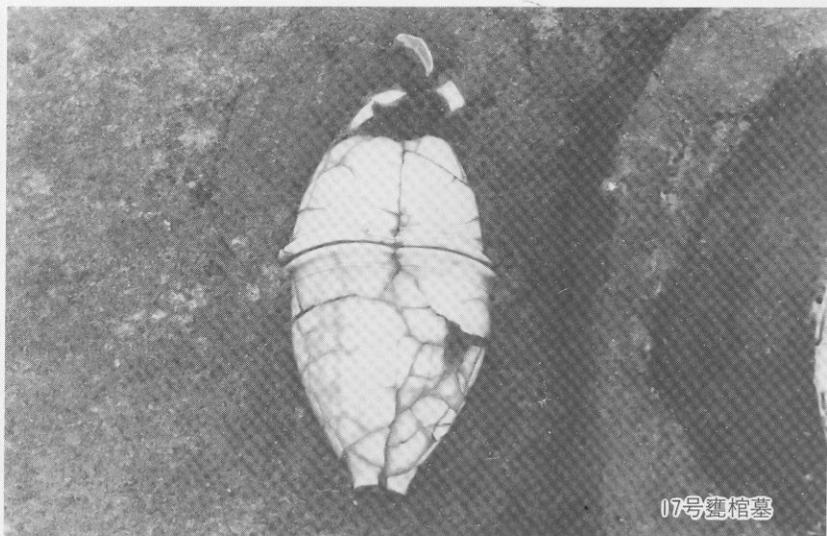
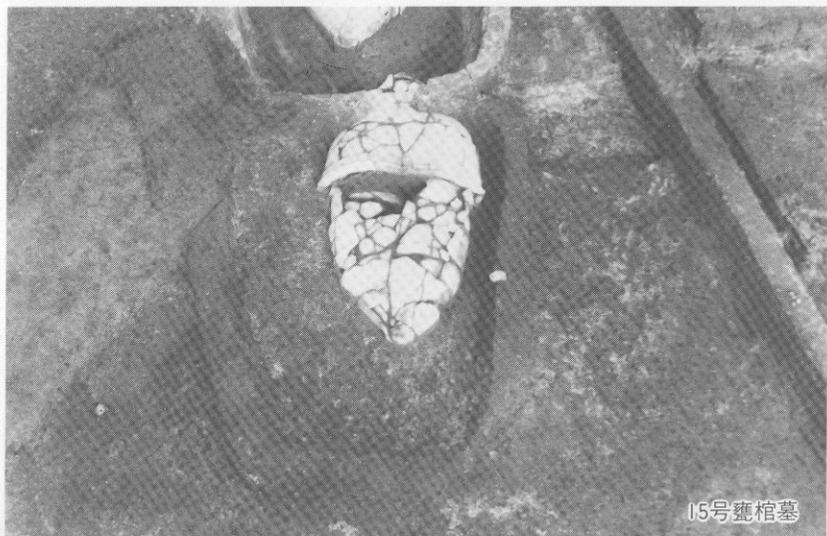
12号・15号甕棺墓

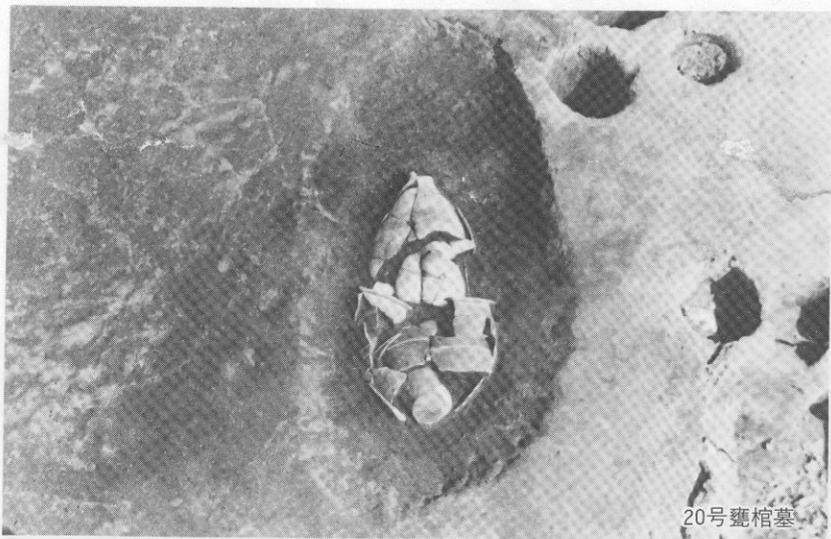


13号甕棺墓

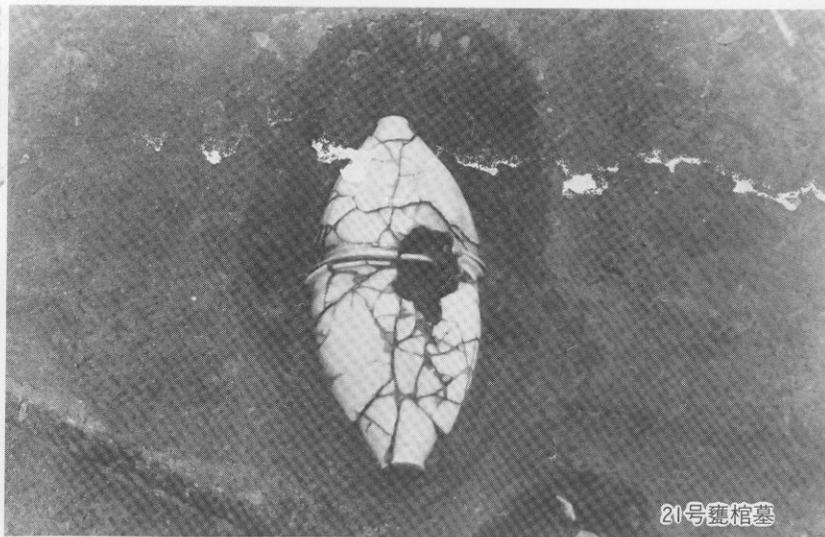


14号甕棺墓





20号甕棺墓



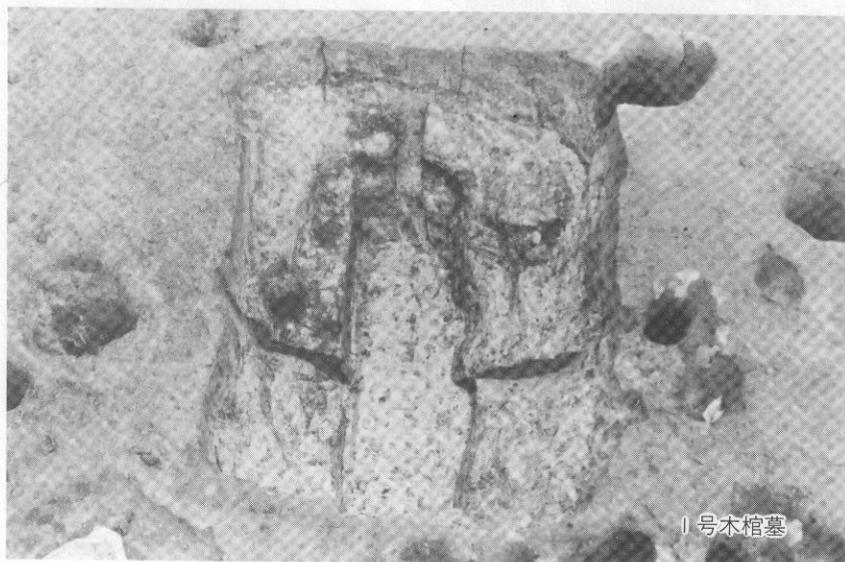
21号甕棺墓



24号甕棺墓



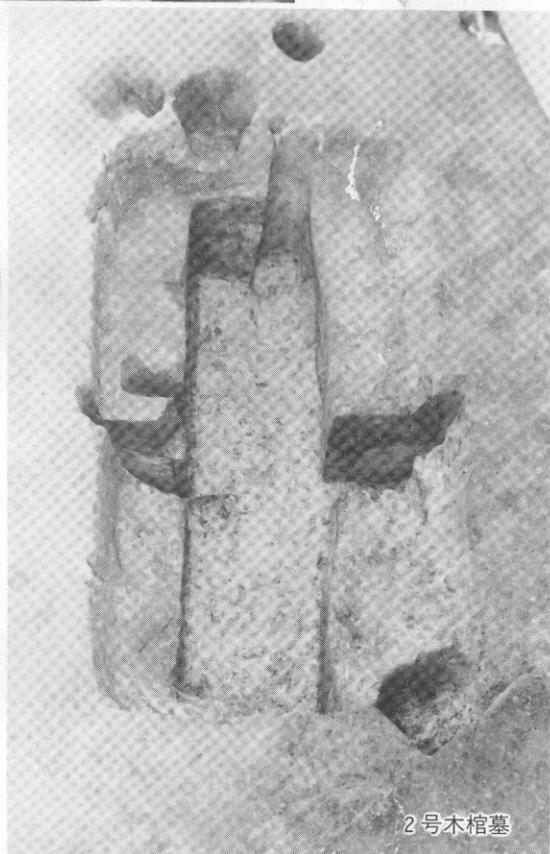
25号甕棺墓



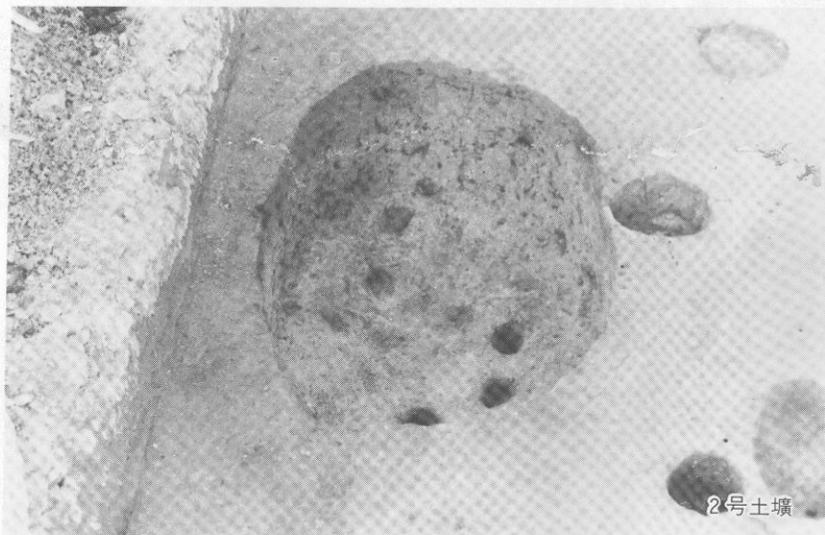
1号木棺墓

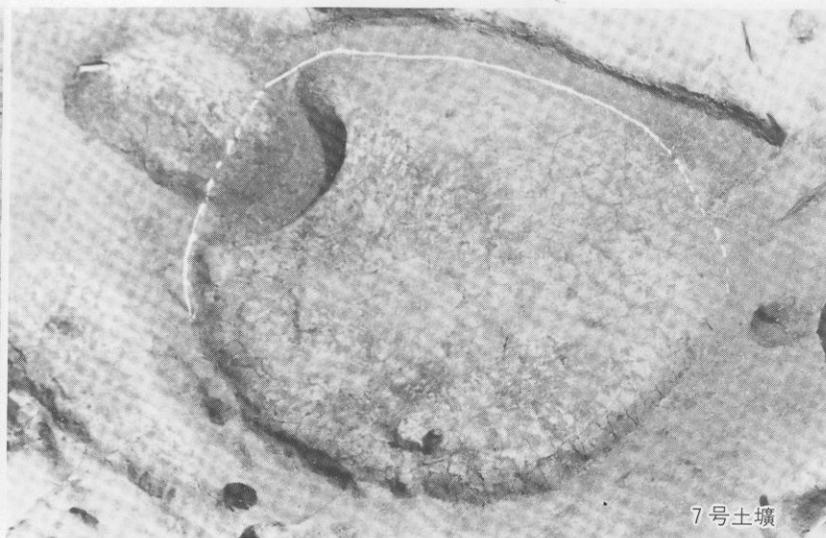
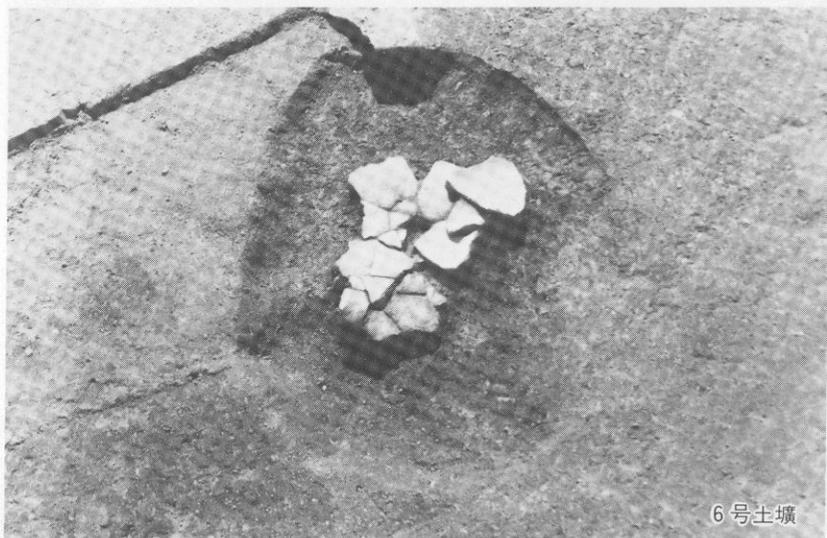


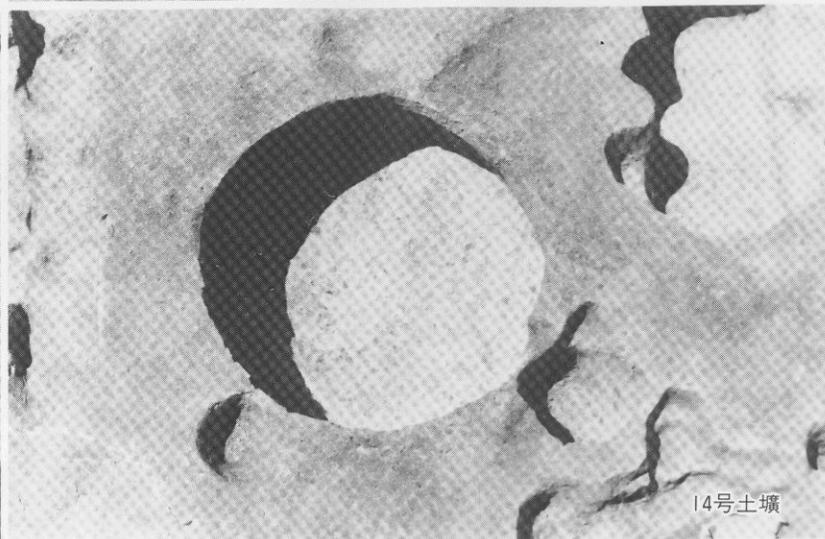
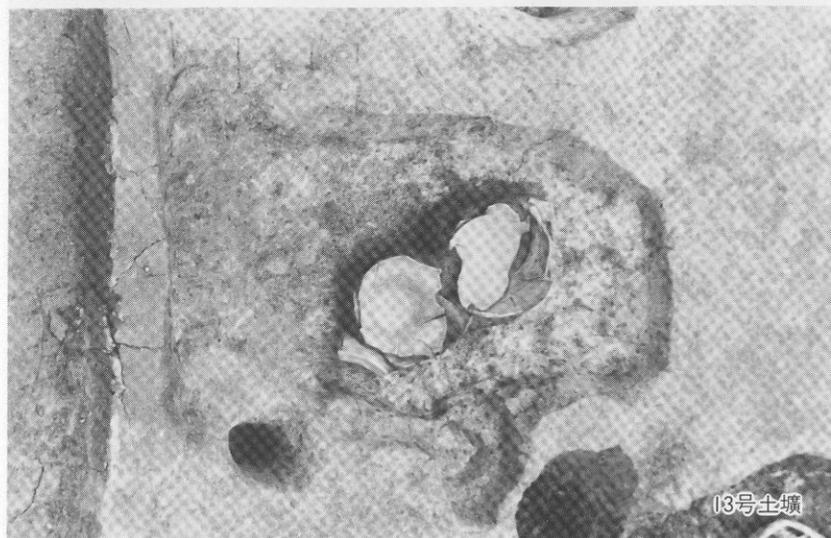
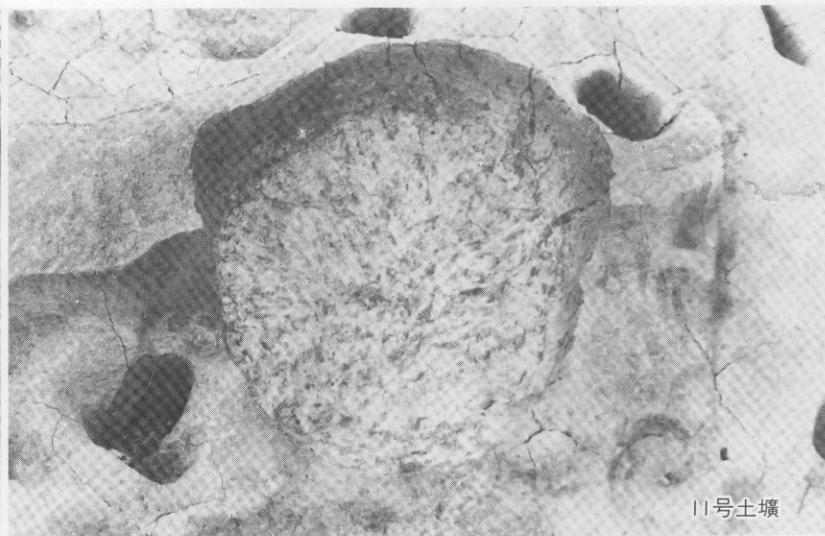
3号木棺墓

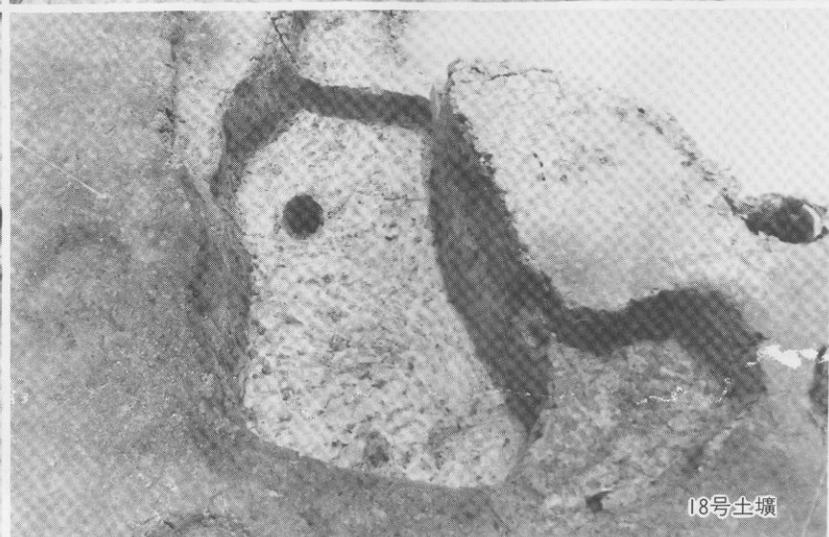
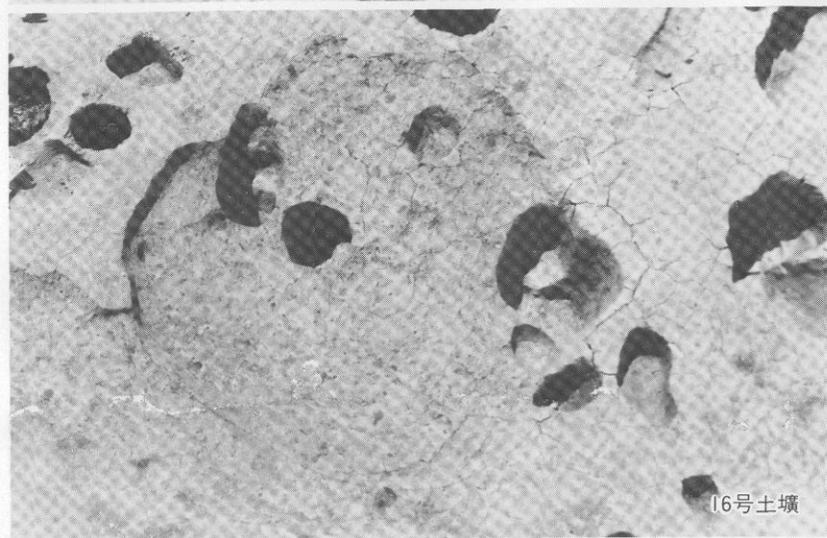
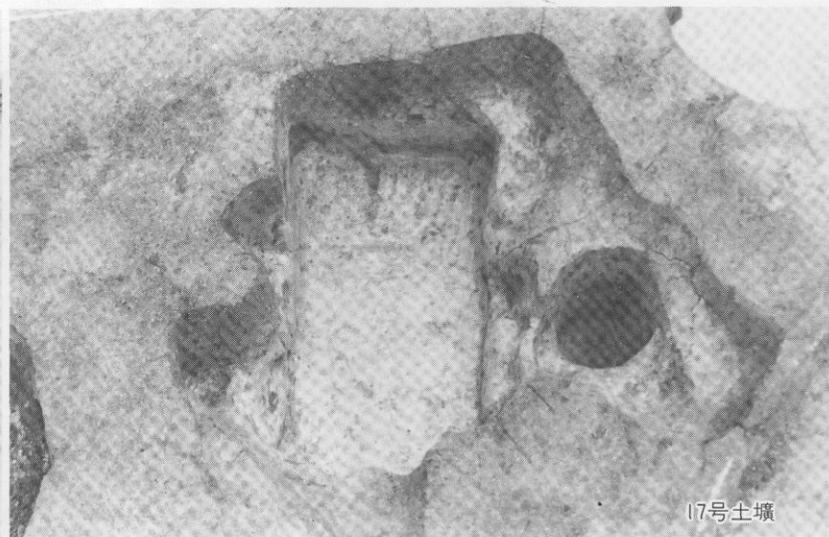
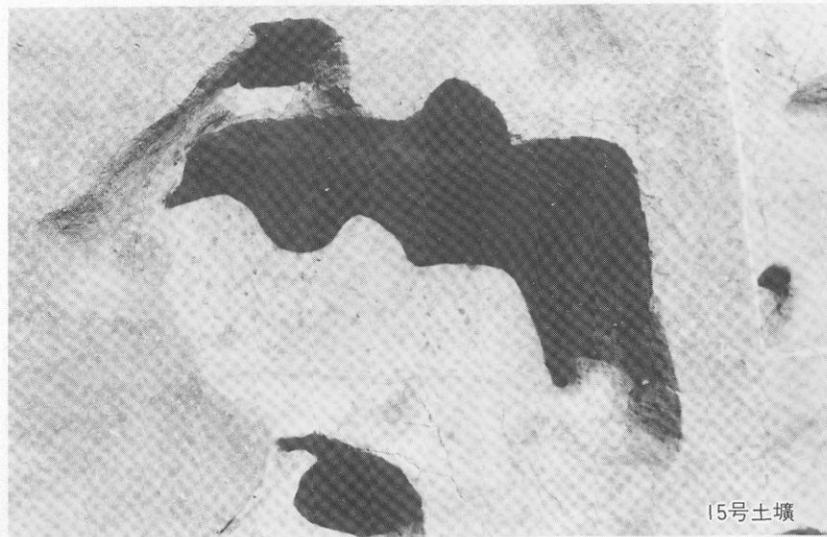


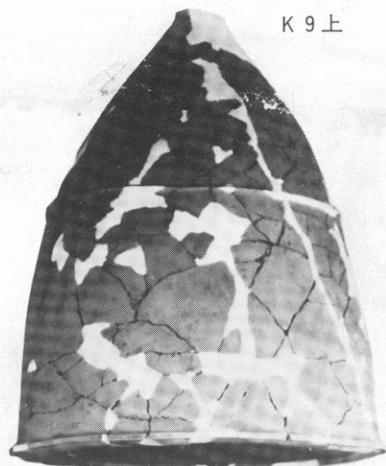
2号木棺墓



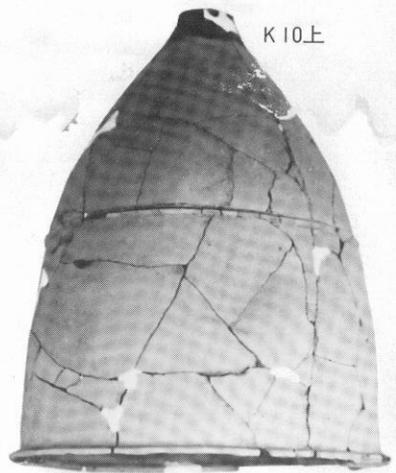




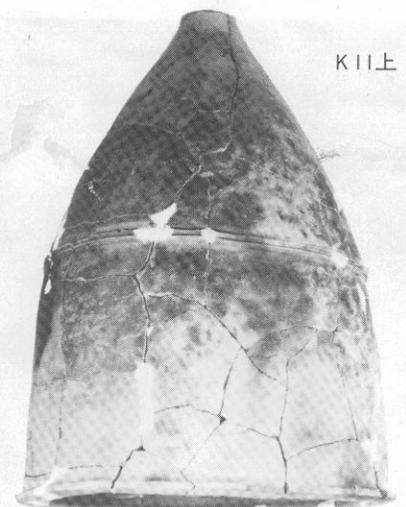




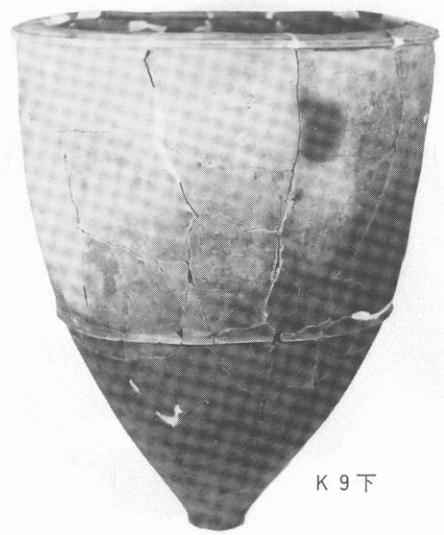
K 9上



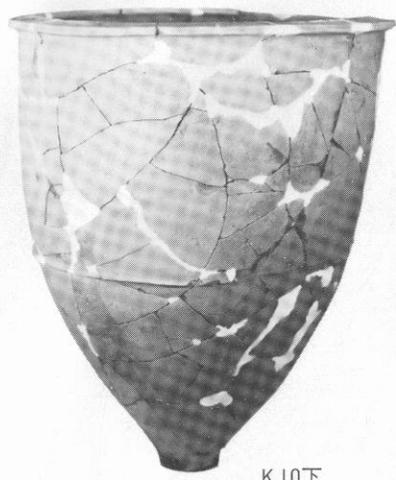
K 10上



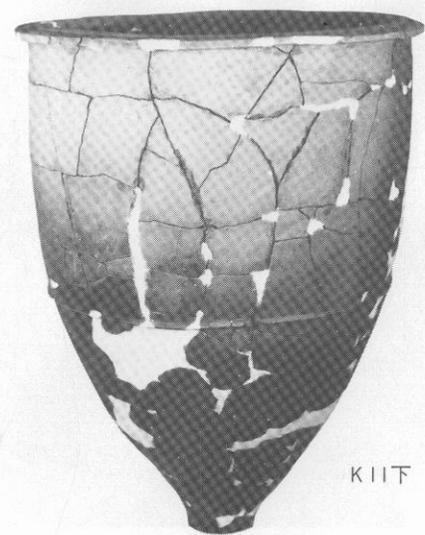
K 11上



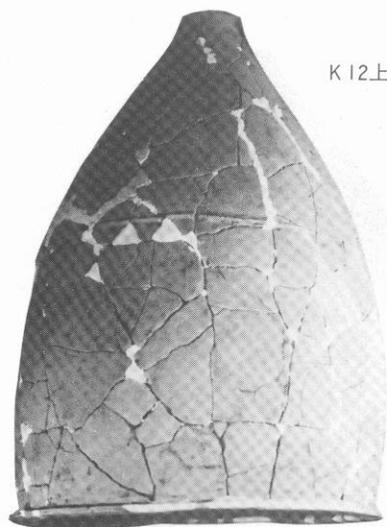
K 9下



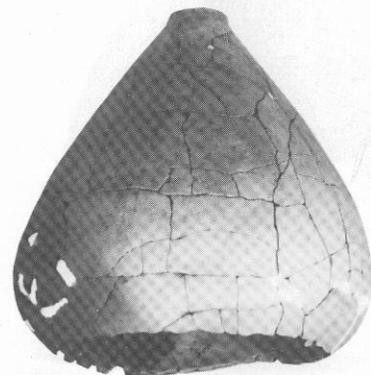
K 10下



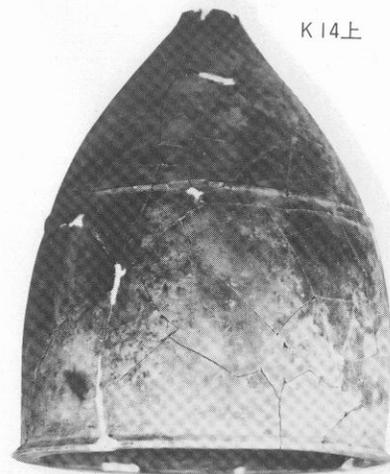
K 11下



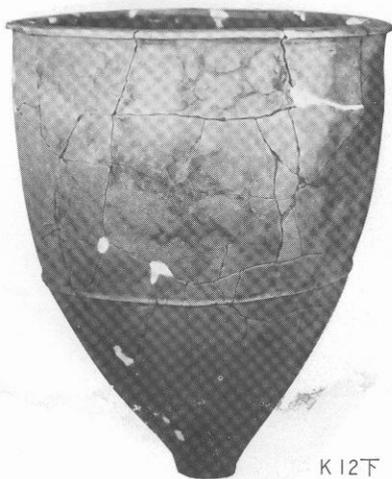
K12上



K13上



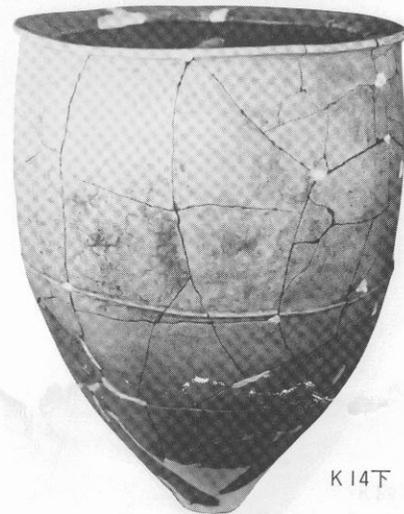
K14上



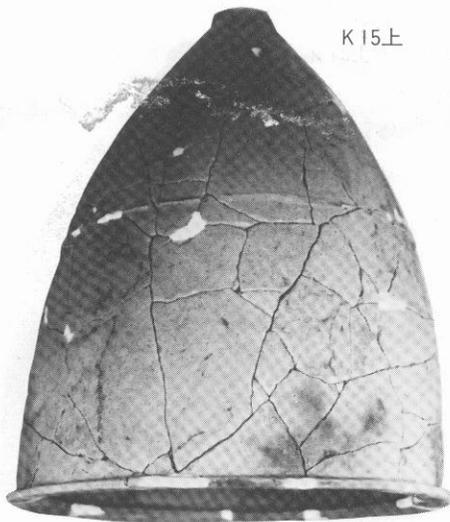
K12下



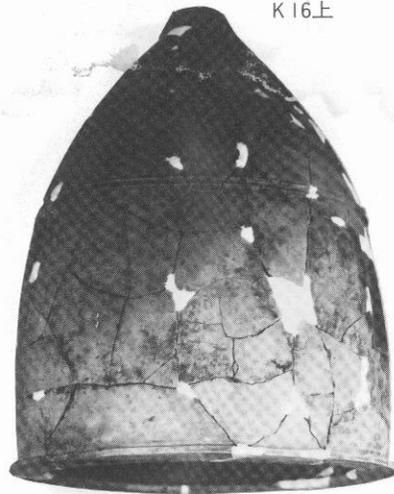
K13下



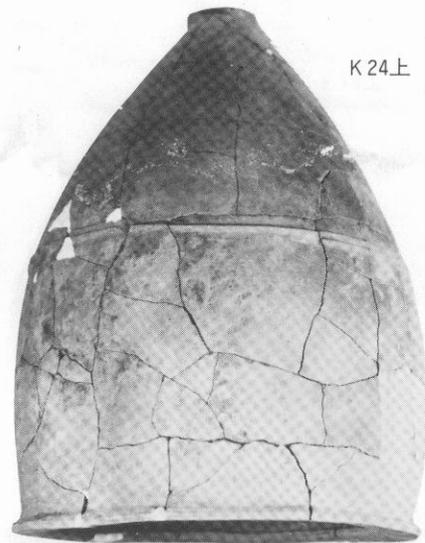
K14下



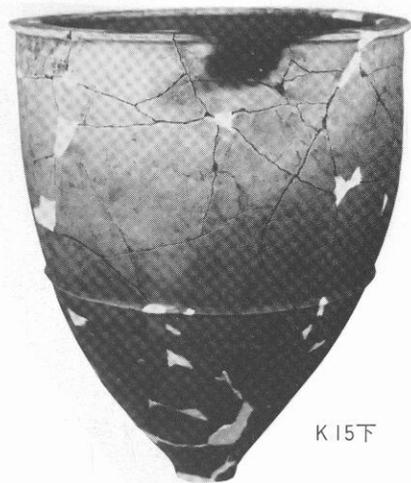
K 15上



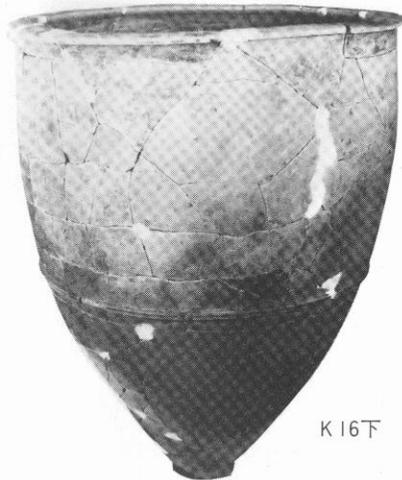
K 16上



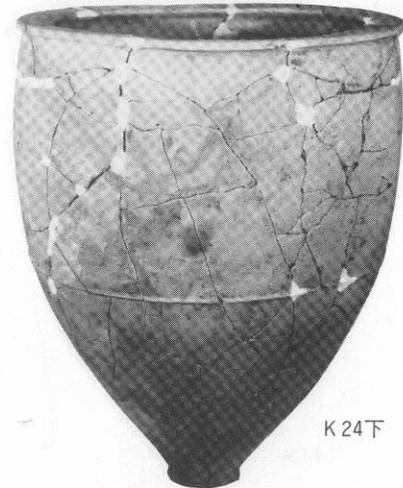
K 24上



K 15下



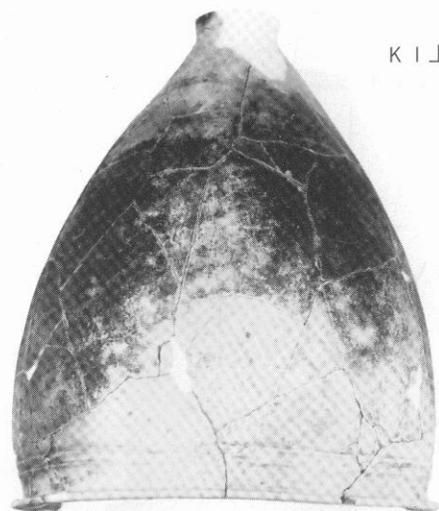
K 16下



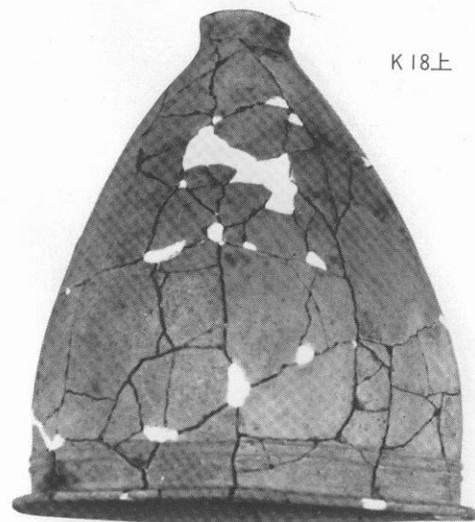
K 24下



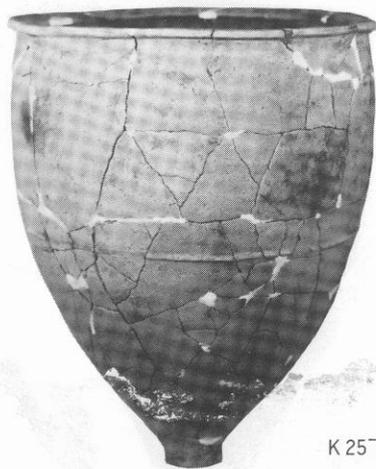
K25上



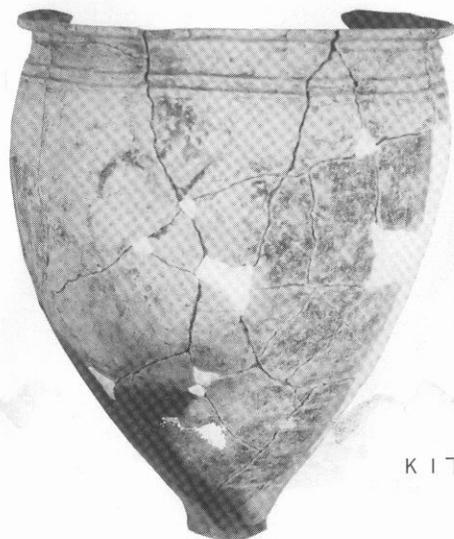
K1上



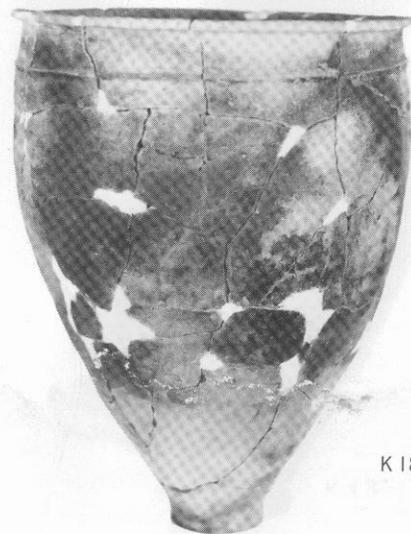
K18上



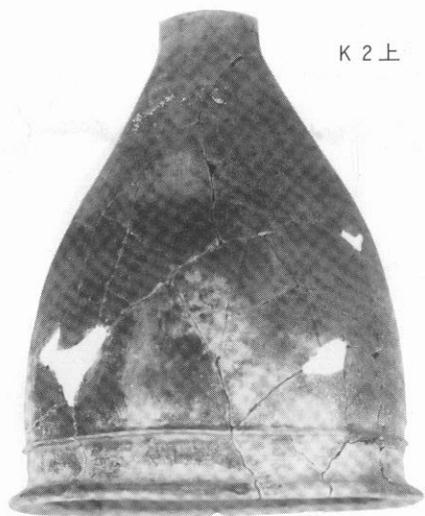
K25下



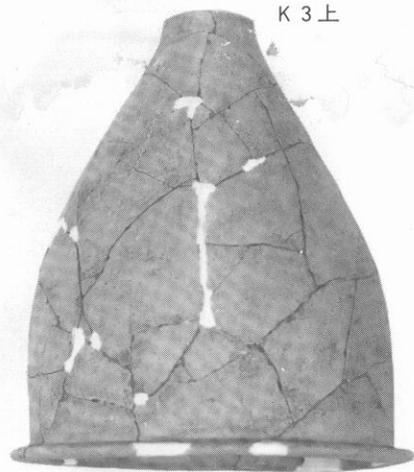
K1下



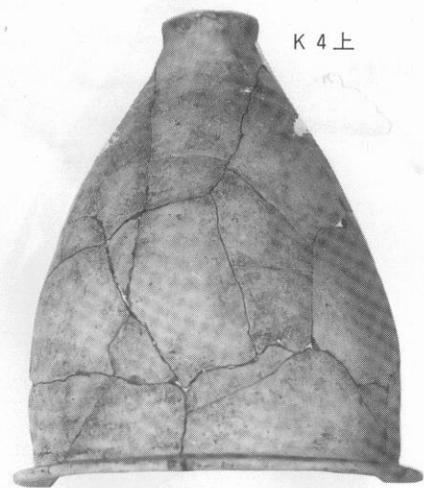
K18下



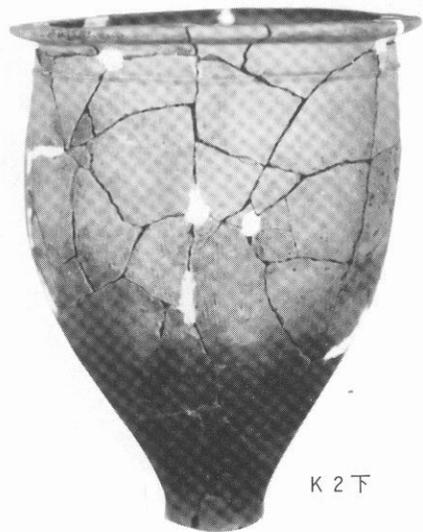
K 2 上



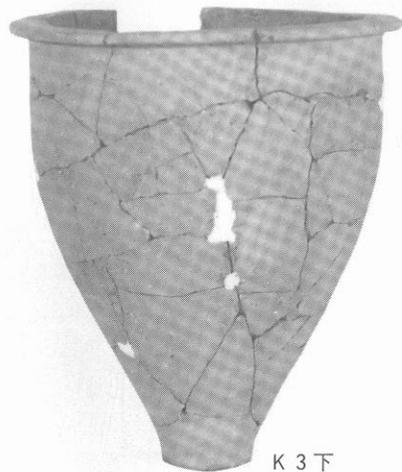
K 3 上



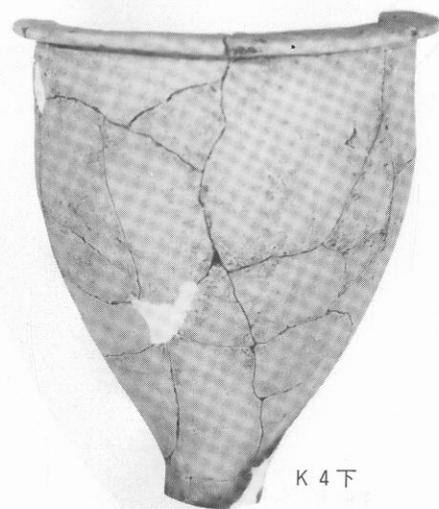
K 4 上



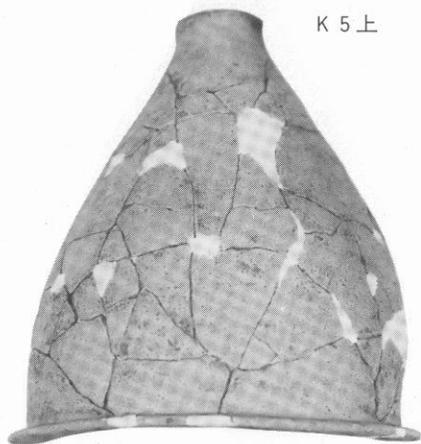
K 2 下



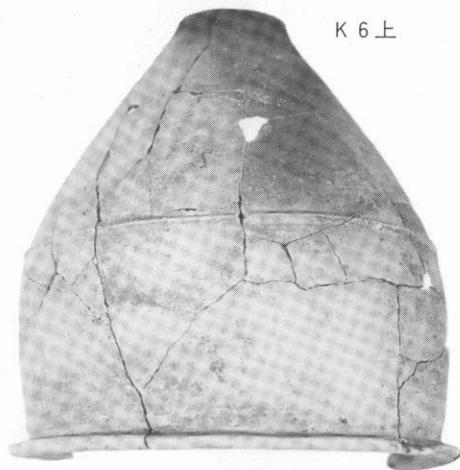
K 3 下



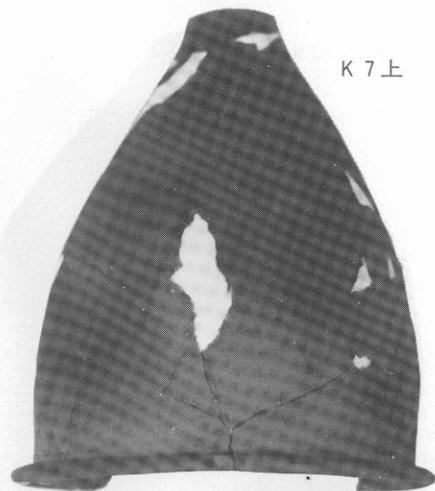
K 4 下



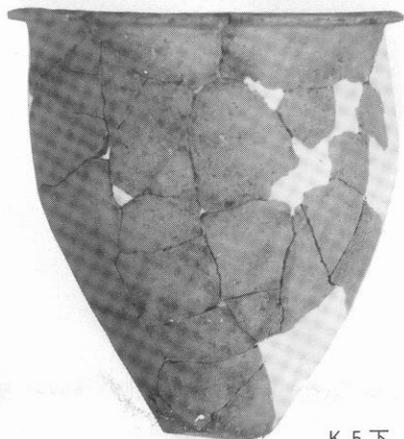
K 5上



K 6上



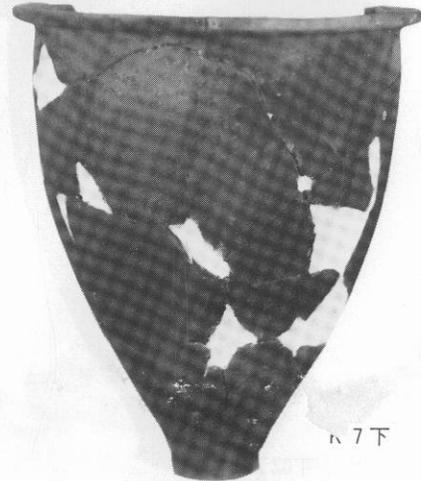
K 7上



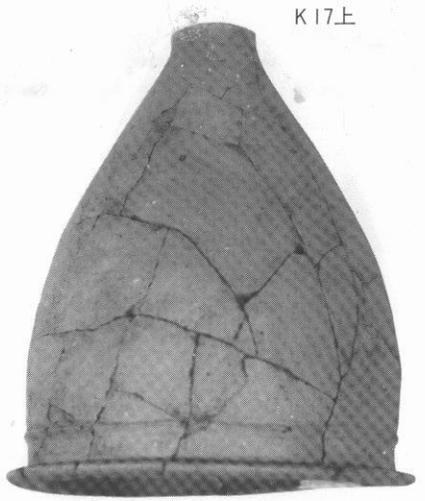
K 5下



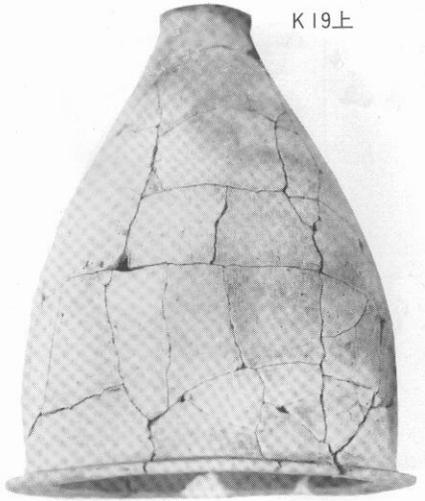
K 6下



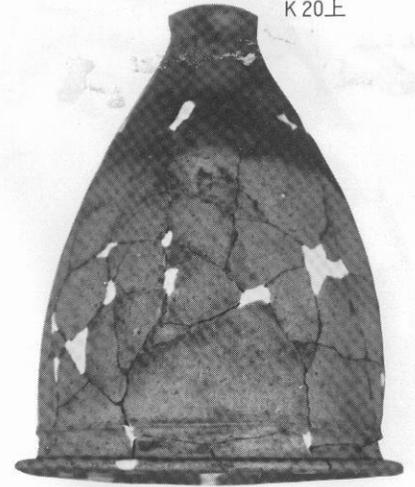
K 7下



K17上



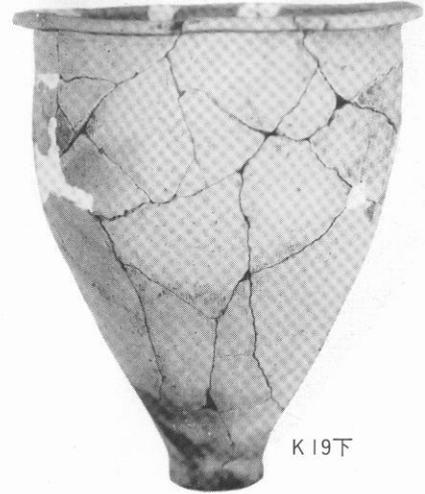
K19上



K20上



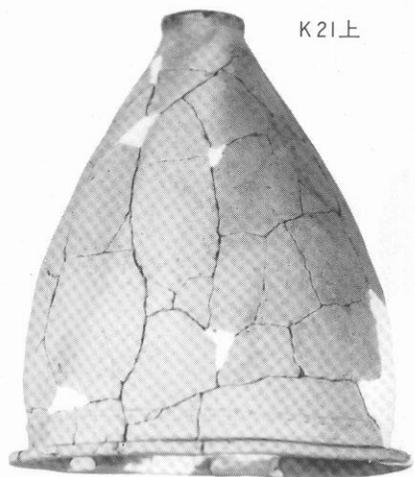
K17下



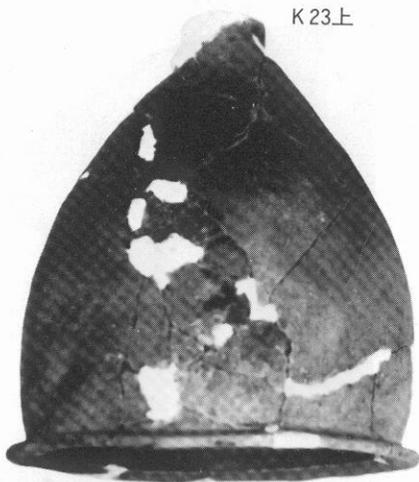
K19下



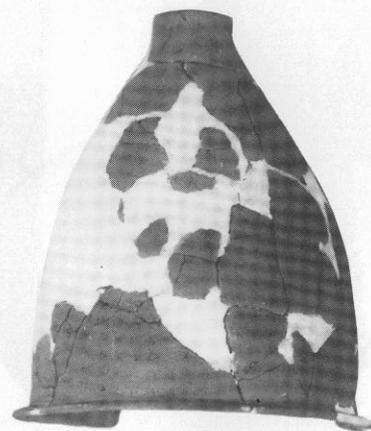
K20下



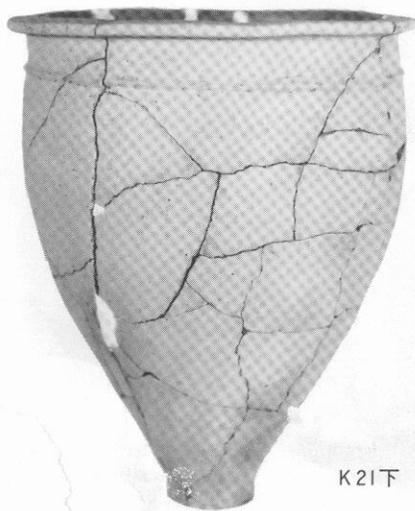
K21上



K23上



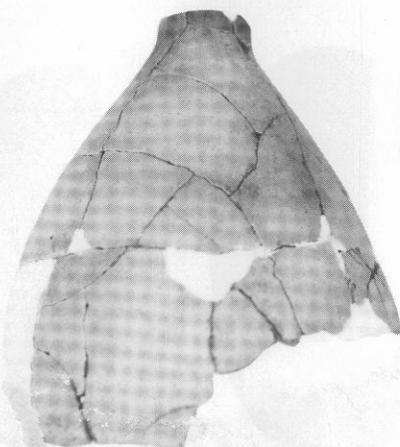
K22上



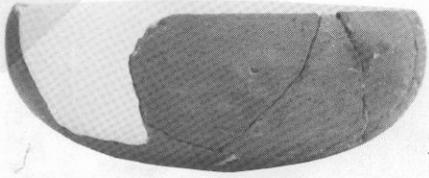
K21下



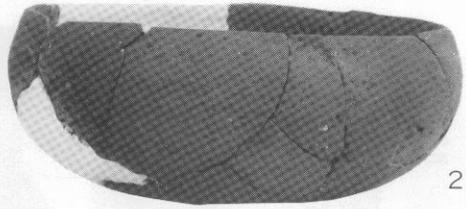
K23下



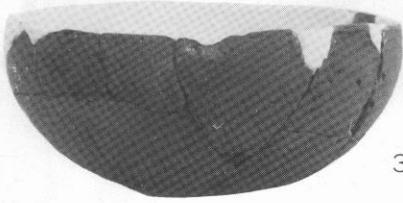
K26上



1



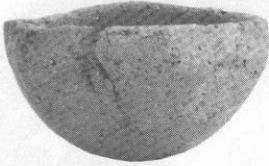
2



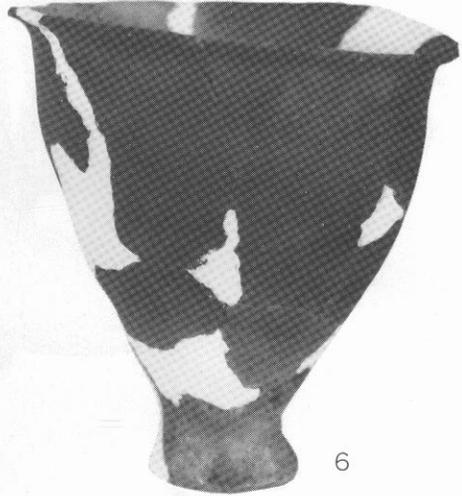
3



4



5



6

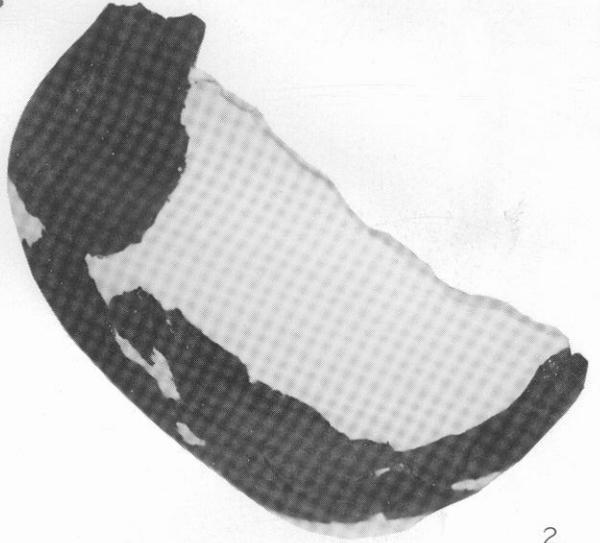


7

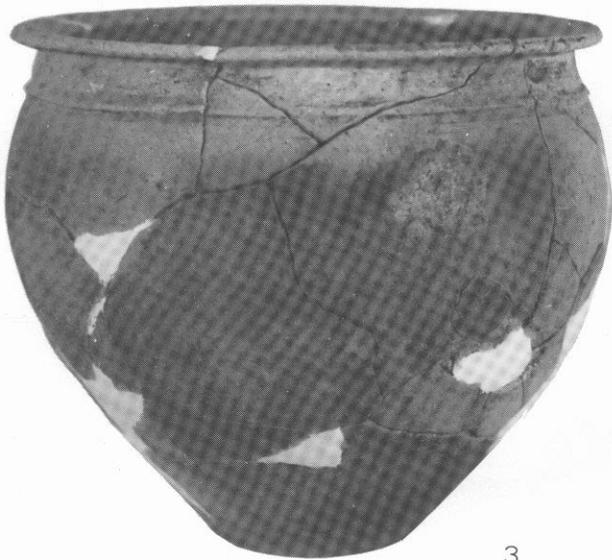
- 1. 2号住居跡出土土器
- 2. //
- 3. //
- 4. 7号住居跡出土土器
- 5. //
- 6. 5号土坑出土土器
- 7. //



1



2



3

1. 5号土壙出土土器
2. 6号土壙出土土器
3. 13号土壙出土土器

# 山家地区遺跡

筑紫野市文化財調査報告書  
第19集

昭和62年3月31日

発行 筑紫野市教育委員会  
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 コロニー印刷  
福岡県粕屋郡新宮町大字上府1592-450